
IS インフィニット・ストラトス Zero

機甲の拳を突き上げる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス Zero

【Nコード】

N1570R

【作者名】

機甲の拳を突き上げる

【あらすじ】

2機の戦闘機は己の思いを抱きアヴァロンダムでの死闘・・・そして散っていき歴史の闇へと葬り去られた。だが彼等の戦いは終らなかつた！再び翼を手にした「片羽の妖精」と「円卓の鬼神」が大空へと舞い上がる！。駄文で誤字脱字があるかもしれませんが生暖かい目で見守ってください

Zero

くそっ！ V2の発射を確認！

イーグルアイの悲痛の声が無線で聞こえた。放たれたV2はぐんぐんの上昇していきコレが地上へと落ちたら多くの人の命が消え去る。だが俺はそんな事態にも関わらず冷静でいた、その理由は目の前の”相棒”のおかげかも知れない

惜しかったなあ 相棒

目の前の機体・・・恐らくベルカの新型に”相棒”が乗っている

歪んだパズルは一度リセットするべきだ

僚機だったPJが落とされ、先程まで続いていた戦闘がまるで嘘のように俺達は飛んでいた

このV2で全てを『ゼロ』に戻し次の世代に未来を託そう

”相棒”の思い・・・信念が無線を通じ伝わってくる

・・・まだだ

俺はそう呟くと”相棒”は黙る

ラリー・・・それがお前の信念なら、俺は・・・俺の信念でお前の信念を潰す

ラリーの機体の特殊兵装である厄介なT L S (T a c t i c a l
L a s e r S y s t e m) は破壊した、俺はラリーの後ろを取り
機銃を掃射した……だが

(なんだとっ! !)

機銃の弾が奴の機体に当たる直前で曲がったのだ

《こちらA W A C S。サイファー、聞け! 敵機体の解析結果が出
た。コード名は“モルガン”。あの機体は、E C M 防御システムに
よって護られている》

……E C M、ミサイル等の誘導装置を狂わすシステムだが機銃の
弾まで曲げる……なるほど機体周囲になにかしらの電磁バリア
を展開しているのか

《唯一の弱点は、前方のエアインテークだ。正面角度からの攻撃を
行い、“モルガン”を撃墜しろ。今、ここで彼を倒せるのは君しか
いない。“円卓の鬼神”、健闘を祈る! 》

弱点は正面……俺は奴の後ろを嗅ぎまわるのをやめ正面からの撃
ち合いを始めた

V 2 再突入開始まであと4分

イーグルアイの叫び

お互い 腕は衰えていないな

ラリーとの戦い……だが俺は焦らない。この戦いは先に焦った
ほうを負ける、だから常に俺は冷静に奴と対峙した。V2の再突入
までもう1分を切った、今俺は奴の正面だ恐らく……いやこれが
奴を落とすラストチャンスだ

撃て 臆病者！

ああ、分っている。俺の信念とお前の信念……どちらが上か、さ
あ 審判の時だ！

C, カモーン moon!

(ああ……イーグルアイの声が聞こえる……俺が……勝った)

そして俺は光の中へと突っ込んだ

「全く、小娘共が面倒かけさせる！」

「まあまあ落ち着いてください織斑先生」

私と山田先生が黙ってアリーナを使用していた生徒に説教と指導をこなしていた……まったくいらん世話をかけさせおって

「じゃあ戻りましょうか織斑先生」

山田先生の言うとうり職員室に戻ろうとしたが、いきなりアリーナ中心が光り出した

「ひゃあああ！なんですかっ！」

「くっ……」

いきなり光り出した光に私は驚きながらも警戒を強めた。光が収まり光り出した中央を見るとさっきまでいなかった人が2人倒れていた

「お、織斑先生！」

「ああ……」

私と山田先生は銃を構え警戒しながらも二人に近づいた、その2人は旧式のパイロットスーツとヘルメットをしていた。どうやら2人は気絶しているようで全く動かない、私と山田先生は2人もヘルメットを取った

（二人共若いな……まだ16か17歳か……これはドッグタグか、ウステイオ空軍第6航空師団第66飛行隊『ガルドム隊』サイファー、こっちはウステイオ空軍第6航空師団第66飛行隊『ガルドム隊』ピクシー……こいつら軍人か、だがウステイオだと？しらない組織だな）

「織斑先生！」

山田先生の方を見るとそこにはドッグタグだ描かれていたのは前翼機の戦闘機だった

(これはIS!なら!)

私はもう1人の持ち物を調べると戦闘機が描かれたドッグタグがでてきた

「これはIS インフィニット・ストラトス ですよ!男性なのに どうして!」

ISは謎が多い。全容はまだ解明されてなくコアも殆ど不明だ。開発者である篠ノ之 束がそれ以上の開発を行わなかった為、現存するISは467機しか存在しない。だがこの2機はナンバリングされていないのを見ると篠ノ之 束以外が開発したことになる……だが一体だれが

「とりあえずこいつらは医務室に運びましょう。その後ISを解析、もしかするとなにかわかるかもしれん」

こうして2人は医務室へと運ばれた

Zero (後書き)

実は私アニメしか知識がありません！ですが既に小説を購入しております。なんとか頑張って小説で勉強します

異世界

「……………うつ……………ここ……は」

俺は目を覚ますとそこには白い天井があった……何？天井だと！
バカな俺はラリーと戦闘していたのはアヴァロンダム上空だ！何故
こんな所に

「よお、相棒。」

俺は振り向いた、この声は間違わない……共に空を翔け死闘をや
った大事な

「まだ生きてるか？」

「……………ラリー。」

そこにいた、ベルカ戦争介入から一緒だった僚機であり相棒……
ピクシーいや、ラリー・フォルクが

「何て顔してるんだ相棒、俺はまだ生きてるぞ。」

そうラリーが笑いながら言つと俺も笑つた

「お互い悪運は強いみたいだな。」

「違うない、地獄も俺達『ガルフ隊』が怖いみたいだ。」

ラリーがそう言つと俺達は笑いあつた、今までの葛藤していたこと

が嘘のように

「所でラリー、お前・・・なんか若くないか？」

「それならお前もだ、まだハイスクールに通っている学生みたいだぞ。」

俺達はその言葉に沈黙・・・そして

「「なんだとおおおお！！！！」」

叫んだ

「おいラリー！どう言う事だ！俺達が若返っているだ！」

「分からん！何故若返っているんだ！」

混乱の中にいた俺達はゼエ・・・ゼエ・・・言いながら息を整え冷静になった

「若返った件はひとまずおいとくぞ、まず問題はここが何処かだ。」

「恐らく此処はどこかの病院施設だろ、扉には鍵もかかってるし窓もない」

俺達が推測などを考えていると扉が開いた

「目が覚めたよだな。」

入ってきた女性は東洋系の美女だ、それに言語はジャパニーズ・・・

だとするとここは日本か？

「こんな場所であんたみたいな美女に会えるとは嬉しいね。」

俺が考えてるとラリーがああ美女に軽口をいった……てお前日本語喋れるのかよ！

「ふん、そんな軽口が叩けるならもう大丈夫だろ。」

「所で名前は？」

美女が喋ろうとしたのをラリーが止めやがった

「お互い初対面だ、名前の交換は大事だろ？」

まったく……こいつの性格には恐れ入る

「いいだろ、私は織斑千冬だ。」

名乗られたら名乗り返すしかないな、俺とラリーは敬礼した

「ウステイオ空軍第6航空師団第66飛行隊『ガルドム隊』一番機、サイファー大尉だ」

「同じくウステイオ空軍第6航空師団第66飛行隊『ガルドム隊』元二番機ピクシー少尉だ」

納得したように頷くMs、チフユだ

「やはり軍人か、まあそうだろうとは思ってたがな。」

「次は此方から質問させてもらおう」

俺そう切り出した

「……なに」

Ms、チフユが鋭い目付きになった……試されているな

「其方の質問に答えた、なら次は此方からの質問だ。お互いフェアに行こう」

まだ鋭い目付きままだが

「……50点だ、まだまだだな」

やれやれ厳しいLadyだ

「まず此処はどこだ？」

俺とラリーが最初の疑問それが此処の場所だ。言語から考えるとここは日本、だがどうやってベルカから日本に送られたかだ

「ここは日本にあるIS学園だ」

やはり日本か……学園？

「おいおい、まさか本当に学園か？」

ラリーが同じ疑問を口にだす、確かに俺達はハイスクール時代の年

齡に戻っているがまさか此処が施設は施設でも教育施設だとは想像の遙か斜め上だ

「次は私の質問だ」

頭が混乱寸前でM s、チフユが質問してきた

「お前達の所属であるウステイオはどこにはる？」

「……なに？」

「M s、チフユ、あんたウステイオをしらないだと？」

「ああ聞いたことも見たこともない」

ラリーがM s、チフユに聞いたが本当に知らないみたいだ……おかしい、明らかにおかしい。あれほど騒がれた戦争さらにほぼ陥落寸前のウステイオが起こした怒涛の反撃は全世界中のニュースになっっているはずだ。それを知らないだと

「M s、チフユ」

俺は真剣な目で彼女を見た

「ウステイオ、ベルカ、オーシア、サピン、ファト、ゲベート、レクタ、ラテイオ、この中で一つでも聞いたことのある国はあるか？」

この質問は最早賭けに近かった……だが

「いや、どれも聞いたことが無い」

絶望的……な答えが帰ってきて俺は何も言えないと同時にある推測がたてれた。だがこの推測あまりにもバカらしいものだった

「サイファー……」

「ああピクシーお前もそう思うか？」

声は小さいがラリーを見ると首を縦に振った

「M S、チフユ、今まで情報で出た結論を言う」

俺は今恐らく真剣な表情をしているだろ

「俺達はこの世界の住人ではない、恐らく異世界……いや平行世界と言った方が正しいな」

俺の結論を聞いた彼女は驚いた表情をした後なにやら考えだした後ポケットから戦闘機が描かれているドッグタグらしきものを取り出した。そこに描かれていたのは俺の愛機であるF-15C”イーグル”とラリーが乗っていたあの”モルガン”と言う機体だった

「これはISと言うものだ」

IS……この学園の名前も確かISだったな

「そのISとはなんだ？」

そう言うと彼女は若干驚いた顔をしていた

「ISをしらない・・・なるほどそう言うことか」

Ms、チフユはなにやら1人で納得しているようだった

「お前達がいっぱい結論を信じよう」

逆に俺達が驚かされた、あんなバカげた結論を信じようと言うのだ

「落ちて若造共、そのバカげた話を信じようと思った理由を話そう」

その後話されたISのこと・・・やはりここは別世界だ。女性しか使えない兵器IS インフィニット・ストラトス、それにより起きた女尊男卑の世の中、篠ノ之 東により創られた世界に467機しかないはずの物が今ここにノーナンバーのやつが2つある。頭がどうにかなりそうだ

「・・・相棒」

「・・・なんだ」

ラリーも何処か疲れた顔をしていた

「・・・頭がどうにかなりそうだ」

「・・・俺もだ」

どうやらラリーも同じ状態みたいだ。そのあとMs、チフユにベルカ戦争のことを話した後彼女は部屋を出て行った

「平行世界、IS、」

「さらに若返りときてやがる」

俺とラリーは盛大に溜息をはきベッドに倒れこんだ

「お、お、お、お、お織斑先生！！このISは！！」

「ああ・・・」

山田先生が調べた彼等のISは・・・とんでもなかった

「サイファアのISはスペック上もはや第4世代型を言っても過言ではないな今世界各国は第3世代開発に全力を注いでいるのに」

「それに武装に追尾方ミサイル「サイドワインダー」中距離空対空ミサイル「アムラーム」セミアクティブレーダー誘導ミサイル「スパロー」」

「さらにバルカンライフルが2つ、更に高機動戦闘型だと、コレこそ動く要塞だな」

私の言葉に山田先生が頷いた、しかしこれ以上問題なのが

「ADFX-02・・・モルガン」

「先程のIS、F-15Cイーグルの何倍も誇るスペックにTLSと言う戦略レーザーシステム、先程の「サイドワインダー」にMPBMと言う多用途炸裂弾頭ミサイル、更にECMPと言うECMPポッドですが・・・これはあらゆる照準・誘導システムの動作をほぼ完全に妨害するものです」

もはやコレはオーバーテクノロジーの塊だ

「F-15は分かる・・・だがモルガンを作ったのは狂人か？これ一つで小国一つと戦えるぞ」

「織斑先生・・・こんなデータを提出したら」

山田先生がうるたえながらそう言って来た

「全世界の国家や企業が機体データの独占を狙い、最悪は戦争だ」

私は涙目になっている山田先生をほっという彼等の処遇を考えていた

「・・・まったく面倒なことになった」

そう呟き私は彼等の元に向った

俺達がベッドの上で横になるとM S チフユが入ってきた

「お前達の処遇が決まった」

先程まで寝転んでた俺達は体を起こし真剣な表情をした

「お前達をこの学園に入学させる

.....

「なにiiiiiiii!!」

俺とラリーは大声を上げ驚いた

異世界（後書き）

よんで頂きありがとうございます

ヒロインですがオルコットを入れるかどうか迷っています
ですので皆様に安価を取ります

1、オルコットがデレだと！許せるっ！

2、オルコットは一夏の嫁、異論は認めない

期限は明日の16時までになります、数が多いほうを採用します（感想なければ・・・どうしようかな）；；）

処遇

「どう言うことだ？MS、チフユ？」

驚いていた俺はひとまず落ち着き理由^{わけ}を聞いた

「お前達が持っていたIS・・・あれは篠ノ之 束が開発した物ではないことは話だな」

俺は首を縦に振った

「問題なのはそのスペックだ。お前のIS『イーグル』は第4世代型かそれ以上のスペックがあるにも関わらずもはや動く要塞と言ってもいいほどの武装だ、今この世界も第3世代型開発にやっきになっている中だ」

顔に出さないようにしたが俺は内心驚いている。俺の愛機であるF-15Cも第4世代型の戦闘機であり大出力のターボエンジンを2基搭載してあるので速さはマツハ2、5あり機動性もF-22がでてくるまで最強の戦闘機とよばれていた

「だが一番の問題は」

MS、チフユはラリーの方を向いた

「お前のIS『モルガン』だ」

モルガン・・・直に戦闘したから分かるが、あれはあの世界上における最強の戦闘機だ。恐らくエース部隊が束になっても勝てるか

分からないほどの性能だ

「『イーグル』の何倍ものスペックを誇り豊富な特殊兵装による圧倒的な火力、あれ一つで小国一つは潰せる」

「.....」

ラリーは黙ったままで頭を抱えていた。クデーター組織「国境無き世界」・・・V2を確保しあんな機体の所持、さらに数多い兵隊、.....元の世界は大丈夫だろうか

「ようするにだ、君達は男でありながらISを動かせ化け物じみたISを所持している。世界中の国家や企業から見れば喉から手が欲しいモノだ」

モノ扱い、要するに他から見れば俺達は大分危険物扱いだな

「下手すれば戦争がおこるかもしれないこの事態を回避するため国や企業などに属さない立場で回避しようとした、だが各国は猛反発し「日本政府は情報を独占している、条約違反だ.....」

「すまないがいいか？」

おれは喋っている彼女を邪魔をしても言うことがあった。国や企業に属さない立場なら

「傭兵」と言う立場、これはどうだ？」

俺は横にいるラリーを目線で動かして見た、口元を隠していたが笑っていた

「俺達は元傭兵だ、国や企業などに属ことなく行動できる」

だが何故か彼女は溜息をついた

「残念だが傭兵は国連総会で禁止する条約がある」

俺は啞然とした

「だからお前達には学園に入学してもらおう」

俺達は両手を額に置き哀愁をただよわせていた……だが俺はあること思いついた

「学園所有のISとできないか？」

彼女の眉が僅かに動いたのを俺は見逃さない

「俺達の機体データが世界に行けば争いが起きるのは目に見えている、だから学園が所有していることにすれば他の国や国連は手が出せないではないか？」

ポーカーフェイスを崩さずにそう言った

「……なるほど、確かにそれなら一先^{ひとまず}ず安全だ、国連と日本政府に根回しをしとこう」

「助かる」

俺は内心安堵した

「だが此方からの指示には従ってもらおう」

「了解だ」

M s、チフコは満足そうに頷いた

「それとお前達にコレを渡しておく」

彼女は何処からか二冊の本を取り出し渡してきた、受け取り表紙を見るとISについての参考書だった

「コレを一週間で覚えろ」

渡しされた参考書はそれほど分厚くない、戦闘機の参考書をよりま
しだ

「OK」

ラリーもモルガンを手足のように扱っていたからか直ぐに了承した

「それとお前達に紹介しおこっ」

彼女がそう言うのとドアから1人の女性が入ってきた

「初めまして、私は山田真耶と言います。ここの学園で教師をしています」

笑顔で自己紹介してきた女性はどうやら優しい教官殿みたいだ

「これまた笑顔がステキな女性だな」

ラリーがまた軽口を叩くとMs、マヤは顔を真っ赤にしていた

「え、えええええ！わわわ私はそんなす、ステキな女性なんて！」

「いや十分魅力的な女性だマヤ、自信をもちな」

追い討ちするかのようにラリーが言うとMs、マヤは耳まで真っ赤になりうつむいてしまった

「自己紹介が終った所で聞く」

Ms、チフユは真剣な表情をしていた

「お前達の本名を言え」

・・・納得した、俺達はまだTACネームしかいっていない。まあ軍規だから仕方ない

「俺はラリー・フォルクだ。ピクシーでもラリーでも好きなほうで読んでくれ」

ラリーは直ぐに言いMs、チフユは俺の方を向いた

「・・・レオン、レオン・クウエイドだ」

そして数日後、サイファーとラリーは第一アリーナと呼ばれる場所にいた

「今日はISの起動訓練を行う。参考書を覚えてきたな」

「ああ」

「問題ない」

サイファーはいつものポーカーフェイス、ラリーは笑っていた

「なら、まずはクウエイドから行う！ISを起動させる」

サイファーは何故か溜息をついていた

「MS、チフユ、TACネームで読んでくれとあれほど」

「黙れ若造、どう呼ぼうが私しだいだ」

（全く、俺の方が年上なのだが）

サイファーがそう思っていると

「今は私の方が上だ」

読心術をもっているのではないこと思うサイファーであった。そして

て『イーグル』が描かれたドッグタグを握り集中すると頭の中に情報が流れてきた

「……なるほど、確かに俺の愛機だ」

隣で同じようにしていたラリーも笑っていた

「不思議な感じだな、だが嫌な感じじゃない」

サイファアはそのままコックピットに搭乗する感覚でいると起動した。脚、腕の装甲は流線型ながらも剛健な感じになっており脚の外側には追加装甲らしきものがあり足首には尾翼部分がついており青く塗られていた。背中の主翼を模した翼型推進器が浮いており翼は青く塗られていた。だが主翼部分の箱状の物体は右正方形で左は長方形をしていて全体色はメタリックグレー、ハイパー・センサーも正常稼動していた

「どうだ？」

ラリーが笑いながら聞いてた

「大丈夫だ、操作方法もまるで操縦している気分だ」

そう話していると

「クウエイド！早くカタパルトへ向え！」

サイファアは歩いてカタパルトにむかった

(……初回で即起動成功、さらに歩行も完璧にこなす……IS

実力者でなければ難しい動作をこつも簡単こなすとはな)

千冬は鋭い目付きでサイファアの観察しており、サウファアはカタパルトにつくと足元がロックされた。サイファアは呼吸しゆっくり吐いた、まるで自分を落ち着かすように

「・・・ガルム1、take・off」
テイクオフ

カタパルトが発射されそのまま飛び立ち空中で静止した。するとモニターに小型ウィンドウで真耶の姿がでた

ではサイファアさん、ターゲットを出しますので全て撃ち落して下さい。なおターゲットは反撃しますのでシールドエネルギーには注意してください

ガルム1、了解

すると目の前に数十機のターゲットが現れた

ガルム1、エンゲージ

サイファアは両手にガトリングマシンガンを装備し撃ち始めた。動くターゲットを外すことなく破壊し反撃も難無く避わず、だが驚くのはその機動性だ。ターゲットの後ろに回り込みピンポイントで破壊。言葉では簡単だが実践してみるとそう簡単に出来るものではない、さらにサイファアはまだ1発も外していないのだ。動くターゲットを予測し動いた先をすぐさま判断し驚きべき反射神経で弾丸を撃つ、これは常人離れした神業だった。ターゲットも少なくなり武装を追尾方ミサイル「サイドワインダー」を選んだ

>Target Lock on<

モニターにそう表示され

ガラム1、FOX2

そう言うと右側の翼型推進器部分が開き何十発ものミサイルを撃ち出した。ターゲットは回避しようとしたが全てのターゲットにミサイルが吸い込まれるかの用に着弾した、煙が晴れると上空にはサイファーだけだった

管制していた真耶は啞然としていたモニターには被弾率0%、命中率100%と熟練者でもありえないことをしたからだ

(これほどの実力とは・・・全盛期の私でも勝てるかどうかだな、何よりもあの予知でもしているかのような動き・・・恐ろしい程実践経験をつんでるな)

クウエイド、訓練終了だ戻って来い。フォルク！準備しろ

了解、コンプリートミッションRTB

サイファーは格納庫に戻りISを解除した

「なかなかいい動きだったぞ」

ラリーがそう言いながらサイファー近づいた

「あの程度できなくては戦場で生きることが出来ない」

「違うない」

ラリーが肩をすくめながらそう言った

そしてラリーはISを起動させた。脚、腕共に流線型で足首に尾翼がついており全体色はホワイト、腰の部分に翼型推進器があり前翼型の主翼がついており右側の翼全てが赤く塗られハイパー・センサーも正常稼働した

ラリーがカタパルトに向おうとしたが

「ラリー」

「どうした？」

サイファーが呼び止めた

「俺達は『ガラム隊』だ」

その言葉の意味を理解したラリーは前を向き

「じゃ行ってくるぜ」

そう言いカタパルトに行き足元がロックされた

「・・・ガラム2、take・off！」

ラリーは再びガラム2番機としてサイファーの相棒として空に上がった

説明は先程と同じ内容です。では訓練開始

真耶の声と共にターゲットが現れた

ガラム2、エンゲージ。FOX2

ラリーはすぐさまターゲットをロックオンし右側の翼型推進器が開き何十発のミサイルが飛び殆どのターゲットが落とされた。僅かに残ったターゲットが反撃したが余裕をもって避わした

ガラム2、T L Sを使用する

そう言うと手に小型T L Sが出て来て発射、一体のターゲットを貫きそのまま別のターゲットへと振り、残りのターゲットをレーザーで斬った

モニターには先程と同じだがタイムがサイファーより早く真耶は目を点にしていた

（機体も化け物ながら搭乗者も凄腕だと、この学園に押し込めて正解だったな）

「織斑先生、彼等って今回が初めてじゃ・・・」

「だがコレが現実だ山田先生」

サイファーとラリーは驚異的なスコアを残し訓練を終えた

処遇（後書き）

安価は今日の16時までです

入学

訓練から数日たち、俺とラリーはあの医療品臭い部屋からおさらばし寮へと移り住んだ。元々は2人部屋みたいだが1人部屋になっている、ラリーは隣の部屋1030にいる、やはり俺達を信用しているとは言っていたがまだ完全ではないみたいだが……まあいい、1人で静かに過ごせるのは素晴らしいことだからな

何故ならラリーのやつ……イビキが五月蠅く汚い体でベッドに入るから相部屋だった俺はなかなか辛かった

するとドアがノックされた、俺は警戒しながらもドアに近づくと

「おいサイファー、早く開けてくれ」

ラリーか、俺はドアを開けた

「よお、一杯どうだ？」

ラリーが手に持っていたのはウイスキーと氷だった。そういえばここ最近は何も飲んでなかったな

「明日から学園だぞ」

「少しなら大丈夫だろ、硬いこと言うな」

俺は溜息をつきながらもラリーを部屋に招きグラスを用意した。ラリーがグラスに氷とウイスキーを入れた

「乾杯」

ラリーがグラスを掲げた

「何にだ？」

「そつだな・・・別世界で送る2度目の学校生活に」

その言葉に俺は笑った

「乾杯」

チンッ

グラスとグラスが当たりいい音が小さく響いた。

ピピピピッピピピピピピピッ

「・・・朝か」

俺をゆっくりり体を起こしベッドから出るとカーテンを開けた、空は
快晴・・・だが

「グオオオオ・・・グエエエエ」

このイビキは、俺はベッドの方を向くと案の定ラリーが寝てた。あ

のアラームでも起きないとは、俺がそう思っているとラリーは体を起こした

「ああ・・・朝か、シャワーかり・・・」

「自分の部屋で浴びろ」

ラリーえお部屋から摘みだした。机の上にあった中身の入ったウイスキーを冷蔵庫の中に入れシャワーを浴びた、浴びた後コーヒーを入れ時間まで参考書を見直した

登校時間が近づいてきた、俺は制服の袖を通し必要なものをカバンに入れ部屋を出た

「よお、相変わらずの精密さだな」

ラリーがドアをノックしようとしていた

「時間に正確なのは傭兵として当たり前だ」

「そうだな」

そう言い俺達は学園に向った

サイファーとラリーは共に指定されたクラスに向っていた

「同じ1-1か、Ms、チフユの策略だな」

「ああ、出なければこんな偶然は起きない」

サイファーとラリーは喋りながら廊下を歩いていた

「だが・・・」

サイファーは周りを見ると、女、女、女、

「話には聞いていたが・・・この視線には慣れそうに無いな」

「流石の俺もこれはキツイは」

周りの女子からの視線を受けながら若干早足で指定されたクラスについた。中に入るとこれまた女子ばかりだが異様なのがいた、そこにいたのは男子だ

「サイファー・・・」

「ああ、あれがMs、チフユが言っていた、世界でただ1人ISを動かせる男性にしてその弟か」

2人は悟られないように目線だけで彼を観察し、指定された席に着席した

しばらくすると真耶が教室に入ってきた

「このクラスの副担任の山田真耶です。それでは皆さん、1年間よろしく願いますね」

そのあと学園に関する説明と注意事項を言った後自己紹介になり例の彼が番になった

「織斑一夏です、よろしく願います・・・以上！」

クラスの女子から何か残念オーラがでていた・・・が

パンツ

何かに頭を叩かれた一夏はおそろそろ後ろを見るとよく見知った人物がいた

「げえっ！信長！」

また盛大に頭を叩かれ、その音に女子は引いていたがラリーは笑っていた

「誰が天下布武を掲げたうつけ者だ」

クラスに沈黙が流れたが

「キャ　　！千冬様！本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

などなど凄い歓喜が起こり啞然としている男子3名

「・・・毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

素晴らしい皮肉で男子2名は顔を引き攣らせ、1名はポーカーフェイスを何とか意地しながらも背中に冷や汗を流していた

「きゃああああっ！お姉様！もつと叱って！罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躡をしてく！」

この事態にもうついていけなくなつた3名がいた

「で？挨拶もまともに出来んのか、お前は？」

先程まで頭を抱えていた一夏は顔を上げた

「い、いやだつて千冬姉、俺は・・・」

スパーンッ

またいい音で頭を叩かれた一夏は叩かれた場所を手で押さえていた

「織斑先生だ、まだ自己紹介は続いているだろ続ける」

そしてまた自己紹介が続いていき、ラリーの番がきた

「俺はラリー・フォルク。仲間からはピクシーと呼ばれていた、ラリーでもピクシーでも好きな方を選んでくれ。趣味は読書と車だ、特に旅行記が好きだ。これからよろしく頼むぜ」

『きゃあああああああああつ！』

クラス全体の女子が歓喜を上げた

「男！で美形で頼れるお兄様系！」

「一夏くと違う魅力が！！」

「お兄様と呼ばせてください！」

「助手席に乗せて遠くまで連れてって〜！」

女子の黄色い声を上げる女子達にラリーは苦笑いをしていた。ラ行は2人しかいなくラリーに次はレオンことサイファアの番だ

「・・・レオン・クウエイドだ。仲間からはサイファアと呼ばれていた、サイファアと呼んでくれ」

簡素な自己紹介だが女子が歓喜しそうになったが

「おいサイファアそれじゃつまらんど、趣味ぐらい言え」

ラリーがそう言うとサイファアは溜息をついた

「・・・はあ、趣味は戦闘機とバイクだ」

「きゃああああああああ」

案の定女子から歓喜が舞い上がった

「またまた男！しかもクール系！」

「あの目付きかっこいい！」

「あの目付きで見つめられたい！」

「後ろに乗せて連れてって！」

ラリーと同様に女子の黄色い声に引き気味のサイファーだった

そして休み時間になり一夏はサイファーとラリーに近づいた

「俺は織斑一夏だ。この学園じゃ男は俺達だけだろ、仲良くやろうぜ」

「ああ、よろしくイチカ。俺はラリー・フォルク、仲間内からはピクシーと呼ばれていた。好きな呼び方で構わないぞ」

「よろしく、ラリー」

そして一夏はサイファーの方を見た

「・・・レオン・クウェイドだ。仲間内からはサイファーと呼ばれていた、サイファーと呼んでくれ」

「よろしく、サイファー。あれ？ラリーとサイファーは同じ中学なのか？」

「ああ、俺とサイファーは同じ中学で大事な相棒さ」

男3人で雑談している光景を見て女子は遠くの方で騒いでいた

「美形3人のお喋り」

「ああ・・・あの中に入りたい」

女子達は艶やかな表情をしていた

入学（後書き）

アンケートでは満場一致でオルコットは一夏の嫁になりました・・・
ぐぬぬー夏モゲロ

対決 前編

俺達が話しをしていると

「ちよつといいか」

後ろで髪を束ねた女子・・・確か名前は

「ホウキだったか？何のようだ？」

そう確か名前はホウキ・シノノだったな・・・開発者の身内だろうか、まあいいどうやら目的はラリーや俺では無いみたいだ

「イチカ、お前に用があるみたいだ。行ってやれ」

「廊下でいいか」

「お、おう」

ホウキがイチカを連れ廊下に出たが女子が完全に2人を包囲してるのか何処かへ場所を移した。俺も席を立った

「何処にいくんだ？」

「飲み物を買ってくる」

ここでの学園生活はどうやら政府が支援してくれるらしく資金も支給してもらえた

「俺も行くこう、ここに1人じゃキツイ」

女子による視線の集中砲火には流石の『片羽の妖精』も撤退せざるおえないみたいだ。俺達は飲み物を買いに食堂に向っているが・・・
・なんだこれは、まるで海割れみたいに女子がむらがっていた。俺達は歩くスピードを早め黙々と食堂へと進んでいた

食堂につき俺は缶コーヒーを購入、ラリーはコ・コーラを購入しクラスまで戻ろうとしたが入り口は女子で埋まっており溜息をついた俺達は学園には安息の場所は無かった

ISについての授業、ラリーは欠伸をしながら聞き、サイファーは要点をしっかりとメモしていた。一夏は

「・・・・・・・・」

冷や汗をダラダラ流しながら教科書を睨みつけていた

授業が終わり一夏を笑っているラリーと無言のサイファーがいた。理由は授業の内容が全く分からない一夏が真耶に「全て分かりません」と発言、その後必読である参考書を電話帳と間違え捨てたと言い千冬に頭を叩かれ、それを見たラリーは笑いサイファーは溜息を吐いていた

「ちょっとよろしくて?」

「へ?」

「ん?」

「・・・」

別々に態度を取った三名が声の主の方を向くと金髪のクルクルロングヘーで白人特有の透き通ったブルーの瞳、気品もありいかにもお嬢様と言う女子がいた。だが3名の反応が快く思わなかったらしく

「まあ!なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんではなくて?」

「・・・」

一夏は啞然とした表情をし、ラリーは苦笑いし、サイファーは表情を崩さなかった

「悪い・・・俺、君のこと誰か知らないし」

少女はそれが気に入らなかつたらしく見下した目付きをした

「わたくしをしらない!このセシリア・オルコットを?イギリス代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを!」

一夏はなにやら考えてる表情、した後、セシリアの方を向いた

「一つ聞いていいか？」

「下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って何？」

一夏の言葉にクラスは凍りついたように静まり廊下の数名の生徒が
ずっこけセシリア本人もずっこけかけラリーは口を開け啞然とした
顔をしサイファーも珍しくポーカーフェイスを崩し啞然とした表情
をしていた

啞然としていたサイファーは溜息をついた

「代表候補生とは各国からIS操縦者の候補生が選ばれ、国や企業
から専用ISの与えられ国の代表選抜の参加資格をえた者のことだ。
簡単にいったらエリートだ」

サイファーの説明で何とか持ち直したセシリア

「そう！エリートなのですわ！そのわたくしと同じクラス・・・」

喋っている途中でチャイムがなった

「っ！また来ますわ！」

そう言いセシリアは自分の席に戻りサイファー達も席に戻った

そして授業が始まる前千冬が教卓に立っていた

「授業を始める前に再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める。立候補、推薦、なんでも構わないぞ誰かいないか？」

興味が無い表情をしていた男子3名だが

「はい！私は織斑君を推薦します！」

一夏は驚いた表情で推薦した女子の方を向き

「私はラリーお兄様を推薦します！」

ラリーも驚き推薦した女子の方を見た

「私はサイファー君を推薦します！」

サイファーはポーカーフェイスを崩さず推薦した女子を見た

「この3人以外に誰かいないか？」

千冬がそう言うが誰も声を上げる生徒はいな・

「待つてください！納得いきませんわ！」

・・・いた、机を叩いて立ち上がったのはセシリアだった

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！そのような屈辱を1年間味わえとおっしゃるのですか!？」

これ以外にもまだまだ罵倒を飛ばすセシリアに

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

一夏が言い返した

「あなた！わたくしの祖国を侮辱しますの！」

だが一夏は無音でセシリアを見ていた

「決闘ですわ」

「いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

2人が目線で火花を散らしていた

「ハンデはどの・・・」

「イチカ」

喋っている一夏にラリーが割り込んだ

「お前はまたISが扱えるだけの男だ、だが相手は国の代表候補生だISの起動時間、経験、すべてがお前を上回っている。それでお前がハンデをつけるのは身の程知らずだぞ」

ラリーは一夏の態度、声の音質、顔の表情で何を言うかを先読みし注意した

「そうですね！わたくしに挑むこと事態身の程しらすですのに・・・」

「だが」

喋っているセシリアをサイファーが止めた

「お前では俺達に勝てない」

「なっ！」

セシリアはそのことに反論しようとしたが、サイファーとラリーの目付きに言葉を詰まらせた

「お前には致命的な欠点を持っている、それをなくさない限りお前は俺とラリーどころかイチカにも勝てない」

サイファーの鋭い目付き、雰囲気圧倒されたアリシアは背中に冷や汗が流れクラスの女子は体を震わしていた。今のサイファーは多くの空の戦士達を葬り普通では無理な任務をこなした英雄『円卓の鬼神』と『片羽の妖精』の姿だった

「では貴方達3人と決闘ですわ！もしわたくしが勝ったら小間使い・・・いえ奴隷ですわ！」

セシリアは何とかして勇気を振り絞り叫んだ。『円卓の鬼神』と『片羽の妖精』の気迫の中で言葉が出たのは凄いが

「オルコット、お前は織斑と戦え。今のお前ではクウェイドとフォ

ルクには何回やっても勝ことは不可能だ」

千冬の言葉にセシリアだけじゃなくクラスの女子も驚いていた

「今のこいつらは全盛期の私と互角だ。今の私では勝率が4割までおちる。お前が戦っても瞬殺だ」

千冬の言葉でクラスに動揺した、だが一番動揺したのは一夏と箒である。2人は最強の千冬を間じかみていたからだ。

一夏はサイファーとラリーの方を向いた、彼等は先程と変わらない『円卓の鬼神』と『片羽の妖精』の気迫をだしていた

(サイファー・・・ラリー・・・お前達は一体・・・)

千冬の言葉とサイファーとラリーの気迫に圧倒されたセシリアは自分の席についた

「話は纏まったな。では試合は1週間後に第3アリーナで行う！」

対決 後編

それから1週間後、第3アリーナ格納庫に一夏、箒、サイファー、ラリーの姿があった

「これがお前のISか・・・随分ごついな」

ラリーは一夏の専用IS『白式』を見てそう呟いた。『モルガン』に比べたら確かに一回りほど大きく角ばっていた

一夏が『白式』に触れた、すると機体の情報が頭に流れた

「分かる・・・理解できる・・・何のためにあるのか」

『白式』をさわりそう呟きISに搭乗した

「背中を預けるように、ああそうだ。座る感じでいい、後はシステムが最適化する」

まるで慣れた操作のように搭乗した一夏は箒を方を向いた

「箒」

「な、なんだ？」

「行ってくる」

「あ・・・ああ。勝っていい」

首を縦に振りカタパルトに向おうとした一夏に

「イチカ」

サイファーが声をかけた

「俺が言ったことを守れ、そうすれば勝てる」

いつものポーカーフェイスでそう言つと一夏は笑つた

「分かつた、行ってくる」

するとラリーとサイファーが親指を上げ

「 Good Luck (幸運を)」

一夏も同じく親指を上げ、空へと向つた

「では！1年1組代表、織斑一夏君にカンパイ！」

「~~~~~カンパイツ!!!!」~~~~~」

食堂の一角で一夏の代表決定のお祝いが行なわれていた。戦闘の結果は序盤、中盤ではセシリアが優勢だったものの終盤で一夏のISが変化しセシリアの攻撃を避けし攻撃する寸前でシールドエネルギーが無くなり判定負け

だが試合に負け勝負に勝った一夏はセシリアの代表辞退により1年1組代表を選ばれたのだ

「おめでとつ。イチカ」

ラリーは拍手しながら言うと皆が拍手した

「あ、ありがと。でもいいのか？俺、本当は負けたしラリー達の方が強いのに」

「おいおいそれは野暮つてもんだぞイチカ、それにオルコット嬢直々のご氏名だ。胸を張れ」

そついいジューズの入ったコップに乾杯するラリー

「そうですね”一夏さん”。わたくし直々のご氏名ですよ？もつと自信をもってください。後わたくしのことはセシリアでかまわなくてよMr・フォルク？」

笑いながらそう言うセシリアに

「これは有難き光栄ですよMs・アリシア」

胸に手を置き頭を下げるラリーであった

「所で・・・レオンさん」

一夏の隣のテーブルに座っていたサイファーにセシリアが声をかけた

「・・・なんだ、後サイファーと呼べ」

「ではサイファーさん、わたくしにあつたと言う”欠点”を教えてくださいませんか？」

代表を決める時のクラスで『円卓の鬼神』の気迫を出していたサイファーに言われた欠点がまだ分からないセシリアが直に聞いてきた

「・・・いいだろ、お前の欠点は傲慢からくる油断だ」

「じつまつ・・・！」

傲慢と言われたことが気に食わないセシリアだが鋭い目付きのサイファーに言葉を詰まらせた

「お前は、まったくの素人であり女より弱い男に負ける訳が無い、と慢心し油断していた。・・・違うか？」

セシリアは正論を言われ反論できずにいた

「・・・そうですね、確かにわたくしは油断していました」

「プライドに生きるなどは言わん・・・だが油断するな、慢心するな、戦場では一瞬の油断で死ぬことがある」

サイファアは思い出していた、V2発射を阻止し一瞬気を緩めた・・・それで殺してしまったPJ・・・パトリック・ジエームズ・ベケツトのことを

「だが、お前の射撃能力は賞賛に値する。あそこまで正確な射撃だ、それ相応の努力を重ねたのだろう」

セシリアはサイファアの話に疑問を抱いた。いままで戦場にいたかのような言葉、今までISを動かした話を聞いたことが無いのに最強と言われた千冬と互角と言っ言葉に・・・そして

「サイファアさん」

ジュースを飲んでいたサイファアはセシリアの方を向いた

「わたくしと模擬戦していただけませんか？」

「・・・なに」

「そこまで言える貴方の實力を直に見てみたのです。どうしますか？」

サイファアは口に手を置き考えた。セシリアの発言でお祭りモードだった女子達が静かになりサイファアとセシリアを見ていた

「・・・いいだろ」

サイファーは模擬戦の申し込みを受けた

お祝いから4日過ぎ授業の一環であるISの模擬戦を行なうことになった

セシリアは既に空に上がっており格納庫にいるのはサイファーにラリ、一夏と箒だ

「……『イーグル』」

そう呟くとサイファーのIS『イーグル』が展開した

「……かけえ」

一夏が呟いた、流線型ながら剛健なフォルムが男心をくすぐったみたいだ。だが箒は驚いた表情をしていた

「なんだこのIS……こんなIS私はしらんぞ」

サイファーがカタパルトに向う途中に一夏は気づいた、アキレス腱のところにある垂直尾翼に描かれた鎖を啜えた赤い猛犬の姿に

「なあサイファー、このマークはなんだ？」

一夏の問いかけに振り向いたサイファアは笑っていた

「……地獄の番犬『ガラム』だ」

そう笑いながら答えカタパルトに乗った

「クウエイド」

ハイパー・センサーの小型ウィンドウに千冬の姿が映し出された

「ある程度揉んでやれ」

「……了解」

カタパルトが足をロックした

「カタパルトロック確認、発進を許可します」

「ガラム1、take・off」

カタパルトが発射され空中へとバレルロールしながら舞い上がりセシリアと10m離れた所に静止した。セシリアは鮮やかにバレルロールしながら舞い上がってきたサイファアの技量に冷や汗をながした

(なんですの！あの完璧なバレルロールは。まったく無駄がありませんでしたは、それにわたくしの丁度10m離れた所に綺麗に静止・
・恐ろしいですね)

今のセシリアはこの前の一夏戦とは違い油断も慢心もしていなく警戒していた

「では試合開始！」

真耶の開始宣言が言われたと同時にセシリアが特殊レーザーライフル「スターライトmk？」を構えた

「ガラム1・・・エンゲージ」

既にサイファーはセシリアとの距離を0にしていた

「なっ！」

既に前にいたサイファーに驚き一瞬の間ができた、それを見逃すサイファーは優しくない。既に装備していたガトリングライフルをフルオートでセシリアの腹の掃射した

「キヤアツ、くっ」

セシリアは行き成りの攻撃に怯んだが直ぐに体勢を立て直し離れた、だが既にサイファーは追撃していた

セシリアは必死に高速移動し振り払おうとしたが全く振り払えず後ろにべったりつかれハイパー・センサーのモニターにはロックオンの警報が鳴り響いていた

「ッ！離れなさい！」

後ろを向きレーザーライフルを撃つものの全て避けられた、その時セシリアはサイファーと目が合い・・・恐怖した。あの鋭い眼光に決して獲物を逃さないとする鷹の如く目に

「……………」

一夏と篤は管制のモニターで観戦していたが何も言えなかった、あのセシリアがあんなに追い込まれているからだ

「いい動きだな」

その一方でモニターを見ていたラリーは笑いながらそう言った

「だが全力ではないのだろ」

千冬がそう言うとなラリーは

「当たり前だろ、奴が本気ならさっきの一瞬で決着がついている。それに尻に食らい着いているのにミサイル所かガトリングすら撃たない」

当たり前な顔をしてそう言うとな千冬は溜息をついた、今戦っている二人の圧倒的な戦力差に

セシリアは恐怖で震えてる体にムチを打ちミサイルを放った……だが

「そんなっ!」

2発の飛来するミサイルをバレルロールで避わしたのだ

「ッ！」

ミサイルを連射し8発のミサイルをサイファアは足を前に出し先程の進行方向に逆噴射し体を止め逆の方に飛びミサイルの回避行動にでた。ハイパー・センサーのHUDにミサイル警報が響いてるがポーカーフェイスを崩さず涼しい顔をしていた

回避行動を取りながらガトリングライフルで全て撃ち落した。セシリアの方を見るとかなり距離をとり体勢を直していた

「…………正直驚きましたわ。貴方がここまでの實力をお持ちなどと…………織斑先生がおっしゃっていた通りですわ、ですがっ！」

セシリアは自分の周りにBT兵器「ブルー・ティアーズ」を展開した

「わたくしは油断も慢心もいたしません！この勝負に勝つのはわたくしです！」

（そして…………）

セシリアは管制室にいる一夏を姿を思った

（あの真っ直ぐな瞳…………彼に恥ずかしい所みせないためにも！）

「さあ踊りなさい！ブルー・ティアーズの奏でる終末への円舞曲で！」

連携の取れたビットの攻撃に飛来する多数のミサイル…………かなり

の実力者でもこれを回避するには骨がおれるだろ……だが

「……この程度か」

彼が相手なら話は別だ。ISが世界最強の兵器だと言えど所詮はス
ポーツ、あの濃度が濃い狂気が渦巻く戦場でエースと呼ばれ数々の
ベルカエース部隊、巨大兵器、史上最強の戦闘機を潰し葬ってきた
相手では話にならない。しかもこの程度の弾幕、ベルカ絶対防衛戦
略空域B7R……通称”円卓”に比べれば子供だましだ

サイファーは襲いかかってくる弾幕に自分から突っこみ縦横無尽で
襲うレーザーを一夏みたい大きく動く回避ではなく小回りを巧みに
使った無駄の無い回避で全て避け飛来してくるミサイルを全て撃
ち落した後両手にガトリングライフルを装備し回避しながらハイパ
ー・センサーの効果である360度見えるのも武器にし回避運動す
るビットの到達予測ポイントを瞬時に割り出し全てが撃ち落とされ
た。そしてセシリアの方を向いた、セシリアは顔にも冷や汗を流しながら
歯をカチカチ言わせながら震えていた。何故なら彼女の前にいる
のは

「……で、^{デモン}鬼神」

「なんなんだ……あれ」

一夏は信じられなかった、自分を襲ったビットの動きじゃなくしつ
かりと統制がとれ連携できさらに多数のミサイルが飛来しているのに
自分から突っ込み全て避け撃ち落した。こんなことが人間にできる

のかと思っていた。だが一番はサイファアの目を見た時の恐怖だ、あの鷹を思わせる鋭い眼光をみた瞬間に体全身が震え出し冷や汗がどっ！と出てきた。その姿はまるで古来から聞く鬼ではないかと思うほどに

「あいつには・・・恐怖がないのか」

一夏の隣で同じく恐怖で震えている箒がそう呟いた

「いや恐怖が無い奴なんていない」

箒の問いに答えたのは笑っているラリーだ

「いかに恐怖と向き合いそれを抱き込むかだ。知ってるか？エースは3つに分けられる」

笑っているラリーを見て疑問を持ちながらも少し落ち着いた一夏と箒が耳を傾けた

「Those who seek strength・・・強さを求める奴」

握っていた拳の親指を上げた

「those who live for pride・・・プライドに生きる奴」

人差し指を上げた

「and those who can read the ti

de of battle 戦況を読める奴」

中指をあげた

「この3つだ、あいつは」

ラリーはモニターを見た、釣られて二人もモニターを見た

「強さを求めエースになった男だ」

それを隣で聞いていた千冬は自分に後悔していた

(私と互角だとバカか私は！あれはそんな次元じゃない、私が潜ってきた修羅場が霞むほどの修羅場で生き残り続けた男だ。恐らく奴に勝てるのは)

千冬はモニターを見ていたラリーを見た

(こいつだけだ)

目の前の敵 . . . セシリアは気迫に当てられたのか体を震わしている、もう冷静な判断は難しいだろ。俺は武装から中距離空対空ミサイル「アムラム」を選択肢しロック、セシリアはロックされたのに気づいたみたいだが反応が遅い

「ガラム1、FOX3」

左のミサイルコンテナのハッチが開き数十発のミサイルが目標に飛

翔して行った。セシリアは回避行動を取り撃ち落してるが……
ダメだな当る、ベルカのネームドに比べたらここでは遊戯に等しい、
だがいい目をしている。まだ諦めた目をしてない勝機を探してる目
だ、実にいい勝負は諦めたらそこで終わりだ。諦め無ければ逆転で
きるチャンスがある彼女は間違いなくエースになれる、後は実践と
BT兵器の使い方のマスターだな

セシリアにミサイルが当り体勢が崩れた、俺はバーナーオープンし
目標に最大加速で接近。セシリアが気づいたが遅い俺はガトリング
をセシリアの額に押し当てた

「……まだやるか」

セシリアは目頭に涙を溜め下唇を噛んで光のある目をしていたが

「……わたくしの……負けです」

降伏宣言が言われ観客席の生徒は歓声を上げていたが興味ない

「クウエイド、とつと戻って来い」

織斑先生から通信でそう言われた

「了解、コンプリートミッションRTB」

俺が先に格納庫に戻り俺の後ろですすり泣くセシリアも格納庫に向
った

格納庫に着きISを解除した俺とセシリアだが格納庫で待っていた
イチカにセシリアが抱きつき泣いていた

「いい動きだったぞサイファー」

タオルを投げ渡してきたのはラリーだ

「あの程度ならお前でも簡単だろ」

そう言い汗を拭き泣いているセシリアに近づいた

「セシリア」

セシリアはイチカの胸で泣いており振り向かずにいた

「……今後俺とラリーは放課後に第1アリーナで訓練する」

無反応だが俺は続けて喋った

「お前は最後まで諦めなかった、それは戦場で大事なことの1つだ」

そう言い俺とラリーは寮へと戻った

対決 後編（後書き）

サイファーとラリーの単一仕様能力はいつ出そうか・・・
ワンオフ・マヒリディー

転入生

「ではこれよりISの基本的な飛行操作を実践してもらおう。織斑、オルコット、クウエイド、フォルク。試しに飛んでみる」

あの模擬戦の次の日、1-1は第1アリーナで授業していた。サイファーとラリーは千冬の指示通りISを展開、その時間僅か0.2秒。セシリアも展開が終わりその時間は0.4秒

「早くしろ織斑。熟練したIS操縦者は展開までに1秒とかからんぞ」

一夏は右腕の待機ISであるガンドレットを左手で掴み集中する。すると『白式』が展開した、この時間0.7秒

「よし、飛べ」

セシリアが言われて直ぐに急上昇、頭上で静止した。一夏も遅れまいと急いで上昇したが、その速度はセシリアよりかなり遅かった

「何をやっている。スペック上な出力では『白式』の方が上だぞ」

千冬のお叱りの言葉が飛んでいた。サイファー達が飛ばうとしたら

「おいガルムコンビ」

千冬が呼び止めた

「曲芸飛行はするなよ。他の生徒の参考にならん」

そう言われるとラリーは笑い

「了解」

サイファーは何時もの表情で

「・・・曲芸飛行は趣味ではない」

そして2人は

「ガラム1、take・off」

「ガラム2、take・off」

2人はそう言い急上昇した、その速度はセシリアの何倍も速かった

「自分の前方に角錐を展開させるイメージって言われてもな・・・」

「

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的ですよ？」

1人遅く飛んでいた一夏にセシリアが巡航速度を合わせた

「そうだぞイチカ。余り難しく考えるな、折角空を飛べるんだもつと楽しめ」

同じく一夏の横を飛んでいたサイファーの隣のラリーがそう言った

「それに今日の放課後に訓練するんだ、お前達もくるだろ？」

ラリーが一夏にそう問いかけると

「ああ！勿論だ」

一夏が笑って答えた

「わ、わたくしも行きますわよ！」

セシリアも焦ったように答えた

「それではお前達、急降下と完全停止をやって見せる。目標は地表から十センチだ」

地上にいる千冬から指示が出た

「了解です。ではお先に」

そう言いセシリアは急降下し地上に向う。そして無事に完全停止した、それを一夏は感心した表情で眺めていた

「やるな、じゃ先に行くぜ」

続いてラリーが『モルガン』のアフターバーナーをふかし急降下、凄まじい速さで地上に向うラリーだがスレスレの所で難無く完全停止し笑っていた

「.....」

何も言わずサイファーも『イーグル』のアフターバーナーをふかし急降下、速さは『モルガン』に劣るものの凄まじい速さだが涼しい顔をして地面スレスレで完全停止した

「よし！俺も行くか」

一夏も急降下し一気に地上に向った……一応着地は出来た、地面にクレーターを作り頭が地面に埋まり専門用語でこれは”墜落”と言っものだった

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を開けてどうする」

「……すいません」

ISが解除され座り込む一夏に

「情けないぞ一夏」

腕を組み目尻を吊り上げた箒がいた

「大体だな一夏、お前というやつh……」

小言を言っている箒を跳ね除けクレーターの中心にいる一夏に近寄るセシリア

「大丈夫ですか！一夏さん！お怪我はなくて？」

「あ、ああ。大丈夫だけど」

「ですがどこかに怪我があつては大変ですわ。わたくしと一緒に保険室へ」

セシリアが一夏に過剰な反応を見せていると

「ISを装備したいて怪我などするわけがないだろ」

セシリアの後ろで凄い不機嫌な表情をしている筈がいた

「あら、篠ノ之さん。他人を気遣うのは当然のこと。それがISを装備していてもですわ。常識でしてよ」

「お前が言うか。この猫かぶりめ」

「鬼の皮を被っているよりマシですわ」

2人が視線で火花を散らしていた。それを見ていたラリーは口から砂糖を吐く気分になりサイファーは頭に手をやり溜息をついていた

「おはよー。ねえ聞いた？ 転校生の噂」

朝一夏達に話しかけてきた女生徒がはなしかけてきた

「転校生？ 今の時期に？」

一夏は首をかしげていた。時期はまだ四月、入学ではなく転入であるのは少々おかしい。しかも転入条件が厳しく試験は勿論、国の推薦がないとできなきのである

「そう、何でも中国の代表候補生なんだって」

「あら、わたくしの存在を今更ながら危ぶんでの転入かしら」

腰を当てたポーズが似合うセシリアが言った

「このクラスに転入してくるわけではないのだから？騒ぐほどのことでもあるまい」

さっきまで席にいた篤が一夏の側にいた

「どんなやつかな」

ラリーが笑いながら言ったが目つきは獲物を見つけた鷹のような目だった

「織斑君が勝つとクラス皆が幸せだよ」

クラスの女子がそう言うと

「織斑くんがんばってね！」

「フリーパスの為に」

「今のところ専用機持つてるクラス代表って1組と4組だけだし、

このクラスに専用機持ちが3人もいるから大丈夫だよ」

続いて騒ぐ女子達だが

「・・・その情報古いよ」

声をした方を向くとそこにはツインテールの小柄な女子がドアに肩膝を立ててもたれていた

「鈴・・・？お前、鈴か？」

一夏が不思議そうに問うと

「そうよ。中国代表候補生、ファン・リンイン鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

一夏を指差しトレードマークのツインテールが左右に揺れた

乱入

教室で現れた一夏のセカンド幼なじみ、凰 鈴音。彼女が宣戦布告
しに来たがその姿を一夏に笑われ怒ろうとしたら千冬が現れやむな
く撤退

そして授業が終わり昼休みになり食堂には同じ席で食べる鈴音と一
夏の姿とそれを恨めしい目で睨む箒とセシリア、それを笑っている
ラリーと興味なさそうに好物のボンゴレ・ビアンコを食べるサイフ
アーであつた

「でも驚いたな、いつ代表候補生になつたんだ？」

「アンタこそ、なにISつかつてんのよ。ニュース見た時びっくり
したじゃない」

久々の再会で楽しく会話していたが

「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいんだが」

「そうですね！一夏さん、その人は誰ですか！」

別の席に座っていた二人が素早く昼飯をたべ（その速さにガラムコ
ンビは啞然としていた）一夏達のテーブルに手を押し当て重い音が
響いた。その姿に一夏はたじろいだ

「あ、ああ・・・凰 鈴音、箒が転校したと同じぐらいに転校して
きたんだ。鈴とは中二の頃まで一緒だったんだ」

それで一夏は鈴音の方に顔を向け

「それでこっちが最初の幼なじみの篠ノ之 篤、前にはなしたことがあるだろ？それでこっちが同じクラスメイトのセシリア・オルコック」

「ふん」

鈴音が2人をジロジロ見ると2人も見返した

「これからよろしくね」

「よろしくお願いしますわ」

「よろしく」

興味さそうに挨拶を返し笑顔で一夏の方を向いた

「アンタ、クラス代表なんだって？」

「お、おう。成り行きだけだな」

それを聞いた鈴音は少しモジモジしながら

「あ、あのさあ、ISの訓練だけど私が見てあげてもいいけど？」
顔を逸らし頬を赤らめ視線だけ向けそう言ったが

「あ、いいよ。俺もう訓練してくれる人いるから」

「…………へ？」

一夏の思いもよらぬカミングアウトに鈴音は間抜けな声をだした

「おい！ラリー、サイファー」

昼食を食べ終え食器を返却しにいていたサイファー達を呼ぶと二人がきた

「…………誰よこいつ等？」

「紹介するよ、クラスメイトのラリー・フォルクとレオン・クウエイド」

一夏はサイファー達の方を向いた

「こいつは俺のセカンド幼なじみの凰 鈴音」

「初めまして。俺はラリー・フェルク、仲間からはピクシーと呼ばれてた。ラリーでもピクシーでも好きな方を呼んでくれ」

「…………レオン・クウエイドだ。サイファーと呼んでくれ」

2人が挨拶すると

「ふん、よろしく」

鈴音は一夏の方を向き直した

「私がISの訓練してあげるよ。こんな奴等より私のがIS扱っの

上手いし強くなれるよ?」

篤とセシリアが反論……せず哀れんだ目をしていた

「な、なによ!その可哀相な子、みたいな目は!」

2人の目に怒り出した鈴音だが

「……鈴、残念だがお前じゃあの2人の絶対かてない」

一夏の言葉に鈴音は心底驚いた表情をした

「なっ!何言ってるのよアンタ!男のこいつ等が私に勝てるはず無いじゃない!」

本人の2人は溜息をついていた

「サイファーさん……今なら自分がどれだけ愚かだったか分かりますわ」

「分かってもらえてなによりだ」

セシリアはサイファーから鈴音の方を向いた

「残念ですが、わたくしがどんなに頑張っても掠りもしなかったのですわよ」

「それは唯単にアンタが弱かったただけでしょ!」

「私は貴女と同じ代表候補生ですわよ」

鈴音が言い返そうとしたが一夏が止めた

「この2人は全盛期の千冬姉と同じ実力だ、今は勝率が4割だって言ってたけど」

「なっ！」

鈴音は再び驚かされた。21ヶ国と地域が参加するIS世界大会であるモンド・グラッソ、様々な競技がある中で全種目制覇者に与えられる称号のブリュンヒルデ、千冬はその初代ブリュンヒルデなのでありその実力と互角など言われても普通なら到底信じられなかった

そして夜になり俺はシャワーを浴びていた。放課後の訓練では1人10分の模擬戦を繰り返し行い指摘していく方法をしていた、かなり手加減していたのだが2時間もすると死屍累々としていた

シャワーを浴びた後冷蔵庫からミネラルウォーターのペットボトルを取り出し飲んでみるとドアがノックされた

「サイファー、俺だ入るぞ」

ドアを開け入ってきたのはラリーだ

「この前のウイスキー残ってるだろ？どうだ？」

「・・・いいだろ」

そう言うとラリーが冷蔵庫から氷とウイスキーを取り出し俺はグラスを用意した。ゆっくり味わいながら飲んでいと

「最っっっ低！女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて、男の風上にも置けないヤツ！犬に噛まれて死ね！」

ドアを蹴り破るような音と走り去る音が聞こえた

「あの声はファン・リンインだったか？またイチカ絡みか」

ラリーが笑いながら言っていたが急に真剣な顔つきになった

「・・・どうした」

俺はこの表情を2回見たことがある1つは初めて”円卓”に向う前の夜、そしてもう1つがラリーが離反する前の夜だ

「・・・嫌な予感がする。こう・・・首筋がチリチリする感じだ」

こいつの感はよく当たるから無視できない

「それは何時もの感か？」

「ああ、何故か分からないがな」

そう言いラリーはウイスキーを飲んだ

「・・・用心する必要がありそうだな」

「・・・あゝ」

そして時間が流れクラス対抗戦当日

上空で戦闘を行なっている一夏の『白式』と鈴音の『甲竜』、サイファーとラリーが訓練したお蔭か鈴音の射撃を見事に避わしていた

「さすが一夏さんですわ」

「ああ、これなら一夏にも勝機がある」

管制室にいる筈にセシリア、そしてサイファーとラリーである

戦況は衝撃砲『龍砲』をくらったものの諦めず突撃しなかなかいい勝負をしていた・・・だが、サイファーとラリーは難しい顔をしていた

「どうしましたかサイファーさん、ラリーさん」

モニターを見ていたセシリアが不思議そうな顔をしていた。サイファーは何時を通りの顔だが親しみやすい笑顔をいつもしているラリー

ーが険しい顔をしているのに疑問を感じていた

「……ッ！サイファー！」

「見えた！山田先生！直ぐに試合の中止を！」

モニターを険しい顔で見っていた2人が慌てた顔をしていた

「え！え！え！どうしたんですか！二人共！」

ラリーだけではなく何時もポーカーフェイスのサイファーも慌てた顔をしていた

「どうした、お前達らしくないぞ」

このような珍しい姿を見た千冬は理由を聞こうとした

「くそっ！感が当たりやがったか！」

ラリーが舌打ち管制室を出て行った。この状況と2人の雰囲気にならぬモノを感じた千冬は真剣な表情をした

「説明しろクウェイド」

冷静であるサイファーに説明を要求した

「アリーナにISが接近してきます！」

「何故そんなことが……ッ！」

サイファアの言葉を不思議そうに聞いたが突然警報がなった

「正体不明のISが接近！遮断シールドに攻撃が命中！・・・ええ
！遮断シールド破られました！」

乱入（後書き）

PVが20,000超えました

読者の皆様本当にありがとうございます

懐かしき仲間

サイファーは管制室を飛び出し格納庫に向っていた

「ラリー！」

「こつちでも見えた！なんて砲撃だ・・・急ぐぞ！」

既にISを展開した2人が侵入しようとしたが

「があっ！」

ラリーが弾かれた。それを見たサイファーはガトリングライフルを取り出し撃つと全弾弾かれた、サイファーはすぐさま管制室に連絡を入れた

こちらガルム1、第1カタパルトから出ようとしたら遮断バリアに防がれた。解除してくれ

私だ、残念だが今アリーナのシステムにクラッキングを受け遮断シールドはレベル4に設定され全てのドアがロックされ先生達による救援どころか生徒の非難すら出来ない状態だ

千冬からの通信で現状が分かったサイファーはハイパー・センサーを使いシールドに穴が無いか搜索、するとあの砲撃があった場所の修復が遅いことに気づいた

こちらガルム1、先程の砲撃があった場所のバリア修復が遅い、そこから内部に侵入する。建物の損害は大目に見てもらおう

まで・・・今システム班から連絡が入った。第1カタパルトが直ぐに修復可能だそうだ、カタパルトを使い内部に侵入しろ

ガラム1、了k

待ってください！

千冬とサイファーが通信していると真耶が割り込んだ

サイファー君、あなたはここ生徒なんですから先生に任せt

山田先生、時間が来ましたこれで

まっ t・・・

サイファーは通信を切りカタパルトに乗り同じくラリーもカタパルトに乗った

「サイファー君！聞いてますが、サイファー君！」

「落ち着け山田先生」

通信機に話しかけていた山田先生の肩に手を置いた千冬

「あいつ等を信じろ、あいつ等の話は聞いているだろ？」

「ですが・・・いえ分かりました」

先程までの焦った表情ではなく覚悟を決めた凜々しい顔だった

カタパルトロック確認、発進を許可します。・・・どうか幸運を

Thank you . ガルム1、take . off

Thank you . ガルム2、take . off

カタパルトが発射され大空へ飛び立った『イーグル』と『モルガン』
、正体不明のISが墜落した一夏に攻撃を仕掛けようとしていた

ガルム1、FOX2

ガルム2、FOX2

2機の右側の翼型推進器に組み込まれたミサイルコンテナのハッチ
が開き数十発のミサイルが乱入してきたISへと飛翔して行った

「一夏っ！」

一夏と鈴音の戦闘中に突如乱入してきた全身装甲IS、一夏の発案
で鈴音と一緒に先生達の救援がくるまでこのISを抑えることにし
戦いを挑んだ

だがセシリアのレーザーライフルより高火力なビーム兵器に予想以
上の速さで苦戦していた、だが一夏がISは無入であると知り全力
で叩き潰せると心が震え『白式』の単一仕様能力である、ワンオフ・アビリティ零落れいらくびやく白夜
くが発動、鈴音のビーム兵器の攻撃をシールドエネルギーと転換し

雪片ゆきひら式型へのエネルギー供給が90%に達し無人ISへ斬撃を食らわした

しかしシールドしか破壊できず吹っ飛ばされた一夏は地面に体を強打し動けなかった。無人ISは一夏に近づこうとしたら大量のミサイルが無人ISに直撃、無人ISは吹っ飛ばされた

「なにつ！」

鈴音はミサイルの飛んできた方向を見るとメタリックグレーの色をし、主翼、尾翼が青く塗られたISと白に黒いラインが入り右翼が赤く塗られた前進翼をしたISが一夏の目の前にいた

「遅いぜ、サイファー、ラリー」

「・・・後は任せろ」

サイファーは背を向けたまま言った

「ファン・リンイン」

サイファーに声をかけられた鈴音は体をビクツとさせた

「イチカをつれ第1カタパルトに向え」

鈴音は一夏と共に第1カタパルトに向った。すると煙の中から無人ISの姿が見え両腕に搭載されてるビーム兵器でサイファー達に攻撃してきたが前進しながら避け二人はガトリングライフルを装備し掃射、掃射しながら右のミサイルコンテナが開いた

「ガラム1」

「ガラム2」

「FOX2」

大量のミサイルが全弾命中、だが少し動きを鈍らせる程度で肩のビーム兵器が2人に掃射した、だが2人はそれを避けながらガトリングライフルを掃射し、サイファアはビーム兵器の掃射の隙間と言う隙間を掻い潜るようにし接近しそ手には武器を装備してなく拳を握り閉めていた

「・・・覚悟しろ、俺の仲間を傷つけた罪は重いぞ」

サイファアは怒っていた、仲間意識の強い故に一夏が傷つけられたことに怒り、その怒りが籠った渾身の右ストレートが炸裂、無人ISは後ろに一回転し吹っ飛んだ

起き上がった無人ISの顔部分が^{ひしゃげ}拉げており、間接部分がギシギシ鳴らしながら立ち上がり肩のビーム兵器を撃つが空中に飛び上がり2機で編隊飛行をするサイファアとラリー

「・・・ラリー」

「どうしたサイファア」

サイファアは笑っていた・・・嬉しそうに

「やはりお前が俺の僚機でよかった」

「いきなりどうした？」

同様にラリーも嬉しそうに笑っていた

「何故だろうな……怒ってた筈なのに……今ではお前と飛ぶのがお前と共に戦うのが嬉しく感じる」

「奇遇だな……俺もだ。首都開放の時を思い出す」

2人の心理状況が高まり

「俺達はガルムだ」

「ああ、そうだ相棒俺達は地獄の番犬」

2人は息を合わせ

「「ガルム隊だ!!」」

叫んだ

ワソフ・アビリテイー
＜単一仕様能力作動……『円卓の鬼神』使用可能＞

ワソフ・アビリテイー
＜単一仕様能力作動……『片羽の妖精』使用可能＞

2人のハイパー・センサーに表示されたと同時にサウファアのISが蒼い光に包まれ、ラリーは紅い光に包まれた

「これは……単一仕様能力だと！」
ワソフ・アビリテイー

ラリーは驚いた表情をした

「しかし何故……ん？」

サイファーは武器選択が増えているのに気づき開くとそこには

「自立型AI兵器『ウステイオの傭兵』」

そう読み上げるとなんと空間からISの3分の1程の大きさの戦闘機が現れた

「これは、戦闘機だと！」

サイファーが驚いてると

お久しぶりです！サイファー

絶句した、サイファーはもう聞くことの無いはずの音が聞こえたからだ

P・・・J

自分だけではありません

空間から次々と戦闘機が現れ

こちらクロウ1、久しぶりだなサイファー

こちらクロウ2、また共に翼を並べてとべるとは

「こちらコブラ1、元気にしてたか？コブラ隊全機いるぜ！

こちらブリッツ1、また会えて嬉しいよサイファー

こちらグリード1、あれが今回の獲物か

サイファーとラリーは混乱し何が何だか分からなくなっていた・・・
すると

「こちら管制機イーグルアイ、全機聞こえるか？」

なんとイーグルアイまでいたのだ

「どつ言つことだイーグルアイ！説明しろ！」

ラリーがイーグルアイにそう叫ぶと

我々はサイファーの記憶の中からコピーされた人格だ

それを黙ってきいてるサイファーとラリー

だが・・・ここには俺達はいない、だから俺達が本物だ

懐かしき仲間の声を聞き最早些細なことなどどうでもよくなった2人

全機聞け、目の前の敵は強力なビーム兵器を撃ってくる、注意し
る

イーグルアイが説明し終わるとラリーが

イーグルアイ、久々にあれが聞きたい。・・・こちらガルム2、
交戦許可はまだか？

その意図が分かったイーグルアイは

交戦を許可する

戦闘前からならず聞く言葉にサイファーとラリーは自然と笑顔にな
った

ガルム、エンゲージ

クロウ、エンゲージ

コブラ、エンゲージ

ブリッツ、エンゲージ

グリード、エンゲージ

IS、F-16C、ラファールC、F/A-18E、JAS39
が無人ISに突っ込んだ

サイファーとラリーがガトリングライフルからレールガトリングガ
ンに変え掃射、レールガン化したガトリングが無人ISに襲い掛か
り体勢を崩す、すると全戦闘機が一斉にミサイルを発射、結構なダ
メージを受けていた無人ISはウステイオの傭兵相手ではもはや歯
が立たず蹂躪され

イーグルアイよりガルム隊へ。そろそろフィナーレの時間だ

クロウ3よりガルム隊へ。決めてください！サイファー！ピクシ
ー！

サイファーは通常のカトリングの大きさだったレールカトリングガンをしまつと馬鹿でかいレールカトリングガノンを取り出した。先程の銃声音ではなくまるで砲撃音が鳴り響きレールガンと同様の速さの砲撃がガトリングで無人ISを襲い下半身を吹き飛ばした

その間にラリーは『瞬間加速』イグニッション・ブーストを起動させ接敵、近接武器TLSソードを装備、現れたのは実体剣だと思つと剣が形を変えエネルギー状の剣を作り出した、下半身を吹き飛ばされ宙に浮いている無人ISの両腕を斬り落とした。無人ISは機能停止し動かなくなつた

敵ISの機能停止を確認。我々の勝利だ

イーグルアイの報告で戦闘機部隊が騒ぎ喜んだ

ガルム1より全機へ。また会えてよかつた

こちらクロウ3、そんなの水臭いですよ

こちらブリッツ2、俺達はお前の仲間だぜ

皆が笑つていると

イーグルアイより各機へ。そろそろ時間だ、引き上げるぞ

サイファーとラリーは全機に別れを告げると消えていった

私は頭がどうにかなりそうだった。あいつ等のISが蒼と紅に光り出すと空間から小型の戦闘機が出てきた。そのあとに

こちら管制機イーグルアイ、管制室聞こえるか

行き成りの通信で警戒したが説明を聞くとクウェイドとフォルクはワンオフ・アビリティ単一仕様能力を発動しクウェイドの武装である自立型Aエィウステイオの傭兵』の管制機であり、あの戦闘機はすべてクウェイドの自立型Aエィだ

そして1分もかからずあの無人ISを大破、管制室にいた奴等は

「なんですか・・・あれは」

「いくらんでも早すぎるぞ」

「な、何者よアイツ等、私たちが苦戦した相手をこつもあっさり」

「すげえ・・・」

ありえない、と言う表情をしていたが事情を聞いてなければ私もそうだ

「千冬先生・・・」

山田先生はもはや涙目だ。私は頭を抱え溜息をついた

懐かしき仲間（後書き）

今回でた単一仕様能力の説明をします

『円卓の鬼神』

機体スペックを全て2乗した数値になりその間だけの特殊兵装が使える

特殊兵装1、レールガトリングガン。小型の扱いやすくなったガトリングライフルが通常の大きさになりレールガン化する

特殊兵装2、レールガトリングカノン。セイリアのレーザーライフルの倍の威力を誇るレールカノン。ラウラより口径はでかくガトリング

特殊兵装3、自立型AI兵器ウステイオの傭兵。サイファアの記憶から作り出されたコピー人格の入った小型戦闘機、動きは無人機なからの変態機動をする

『片羽の妖精』

機体スペックを10倍にの数値になりその間だけの特殊兵装が使える

特殊兵装1、レールガトリングガン。上と同じ

特殊兵装2、TLSブレード。『雪片式型』と同じく展開装甲でエネルギー状の刃は『雪片式型』よりでかい（形は西洋剣）

2人の転校生

一夏が悪友の五反田弾ごたんだと妹の蘭と昼食をとっている頃、サイファアとラリーは駅前の大型デパートにいた

「そろそろ夏だな」

ラリーは何か思い出したみたいに言った

「夏物の服を買っておくか」

カゴにインスタントコーヒー、ティーパック、カリー・メイト、摘みも入れていた

レジに行き清算し終えた2人は上の階の男性服売り場に向った。服売り場に着くと夏物の服がセールしていた、サイファアが服を選んでいると

「おい、サイファア」

笑いを含んだ声でラリーが呼び振り向くと”忍者”とプリントされたTシャツを持っていた、一夏からそれらの物は間違ったお土産と聞いており、サイファアはラリーの額に尻穴を作ってやるうか本気で考えていた

ラリーを無視し服選びをしようとすると、隣にあった本屋に目があった。するとサイファアは服選びを止め本屋に向い一冊の本を持ち上げた

「どうした？」

ラリーが後ろからその本を見ると題名が「世界の戦闘機大特集」と書かれ表紙にF-15が描かれていた

サイファアは無言を言わずそれを購入、レジから戻ってきたサイファアの顔を満足そうだった

「お前も好きだな」

ラリーは苦笑いしながら肩をすくめた。前の世界でも、どんな機体に乗れたのは空軍訓練パイロットだったときに趣味で外国の留学を立候補、そのおかげで戦闘機、攻撃機、爆撃機、輸送機、さらにはプロペラ機や旅客機まで操縦できるようになった。それを聞いたときの当時のラリーは啞然としていた

そして買い物を済ませた2人は近くの喫茶店に入った。メニュー表を見てるとウェイトレスの女性がきた

「ご注文はお決まりでしょうか？」

するとサイファアはメニュー表を指差し

「ズワイガニのカルボナーラを、食後にはコーヒーを頼む」

整った真面目な顔をしているサイファアを直視したウェイトレスは顔を赤くした、するとラリーが

「俺はこのピザを、食後は紅茶で」

そう微笑みながら言うともたもウエイトレスは顔を真っ赤にさせ、
噛みながら注文された品を言い戻って行くと他のウエイトレスに腕
を掴まれ奥へと消えていった

だがサイファーやラリーは既にそちらを見てなく外を見ていた、歩
く人々は笑い倒壊した建物がなくストリートチルドレンがいない平
和な様子を。前の世界では無かったモノを、首都奪還をした、しか
し人々には笑顔はあったが建物は戦闘により倒壊、ストリートチル
ドレンの増加、そして食料不足、それらが無いこの国の平和を2人
は嬉しそうに見ていた

「カルボナーラのお客様」

声が聞こえた方を見ると先程のウエイトレスがいた

「ああ、俺だ」

先程の無愛想な顔ではなく、気分よかったサイファーは優しい顔
をして少し笑っていた。その表情を見たウエイトレスは首筋まで真
っ赤になり、他の女性客もその表情を見て顔を真っ赤させていた

「み！み！み！ミックスピザのお客様！」

カルボナーラを置いたウエイトレスは顔を真っ赤にさせながらもピ
ザをラリーの前に置くと

「ありがとう」

ラリーの何時もの笑顔ではなく、サイファー同様優しい顔をしてい
り、それを見たウエイトレスはてんぱっていた

「うー！うー！うー！うー！うー！うー！」

ウェイトレスは一礼し戻った、するとまた他のウェイトレスにより奥へと連行された

その姿を見ていた二人は不思議に思いながらも食べ始めた

食事風景はキングクリムゾン！

食事を終え食後のコーヒーと紅茶を外を見ながら飲む2人

「サイファー……」

ラリーが語り始めた

「俺はこんな平和を……」笑顔”を守りたかったと思う」

「……」

サイファーはラリーの方を向き黙って耳を傾けた

「この国には国境が無い……俺達がしたことは……間違っていたのか……」

ラリーが離反した後に入ったクーデター組織『国境無き世界』はV

2 戦略核弾頭などによる大規模破壊行為によって、文明退化を引き起こすことで、新たな世界の再構築を目論んだ

しかし連合軍航空部隊によりガルム隊の道を造りV2発射を阻止した

「俺達は傭兵だ、金で雇われ仕事をこなす」

サイファアが外を向きながらそう答えると、ラリーは無表情……明らかに怒った顔をしていた

「だが……俺は守りたかったかもしれない」

サイファアは道を笑顔で歩く親子を見ていた

「一緒に飛んだ傭兵達、その俺達をよくしてくれた基地指令に副指令、あの偏狭の基地まで来てくれた正規軍の守備隊に情報女性士官……そして」

サイファアはラリーの方を向いた

「お前と一緒に取り戻した……首都を守りたかったんだと思う」

ラリーの表情は先程のから何時もの表情をしていた

「だが俺達は来た……この平和な世界に」

サイファアが笑いながら言う

「そして出会った、新しい仲間……守るべき平和を」

サイファーは強い信念を燃やした瞳をしていた

「ああ……俺達は戦うことしか出来ない、だから守ろう、この優しい国を……優しい仲間達の大事な日常を」

2人の瞳には一点の曇りが無かった

「今日はなんと転校生を紹介します。しかも2名です！」

ええええええええええええつ！

クラスの女子がざわめき始めた。噂好き十代乙女には美味しすぎる情報^{エサ}なのだから

「失礼します」

「……」

クラスに入ってきた転校生を見て、喋っていた女子が静かになった。その理由が転校生の1人が……男子だからだ

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

シャルルがにこやかな顔をして自己紹介すると

「お、男……？」

女子の1人がそう呟くと

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を・
……」

「き……」

「き？」

シャルルが聞こえた声に聞き返すと同時にサイファーとラリーは咄
嗟に耳を塞いだ

キヤアアアアアアアアアアツ！

窓がビリビリ響く黄色い声の歓喜が上がり、そのハウリング・ボー
イスが一夏にクリーンヒット、頭がクラクラ動いていた

「男子！4人目の男子！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「WRYAAAAAAAAAAAAAAAAA！」

「お母さん！私を産んでくれてありがと〜！」

わいわい騒ぐ中、一夏の意識が回復すると

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

まさに鶴の一声。騒いでいた女子が席に座り背筋を伸ばしていた

もう1人の転校生が自己紹介するのを待ってるが

「……………」

一向に喋り出す気配がなくクラスに沈黙が流れている中、サイファ
ーとラリーは違う空気を感じていた

「……………挨拶しろラウラ」

「はい、教官」

今のラウラの発言でサイファーとラリーの疑問が確信に変わり、二人は一瞬でアイコンタクトをとった

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではない、お前もここでは一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

ラウラは前を向くと

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」

クラスは沈黙、続きの言葉を待っているみたいだが・・・何も喋らない

「あの、以上ですか？」

「以上だ」

山田先生が何とか笑顔でそう聞くと返ってきたのは無慈悲な即答、それにより山田先生は涙目になってしまった

するとラウラが一夏の前まで行き腕を振り上げ・・・下ろさなかつた、いや振り下ろせなかつた。凄い力で腕を掴んでいたのはラリ―だ

「離・・・っ！」

「お前とイチカは恐らく初対面のはずだ。何が気に食わないか知らんし興味もない・・・だが俺の仲間に手を出すなら・・・潰すぞ」

最後の一言にラウラは冷や汗を流し恐怖した、鋭い眼光からくる得体の知れない気迫、腕を振り払おうとしたが、その気迫で体が硬直し動けなかった

先程サイファーと感じた不穏な気配がなくなるとラリ―は手を離れた、するとラウラは一步後退しラリ―を睨んだ

「貴様・・・」

「・・・」

ラリーは無言のまま睨み、席に戻った。その後千冬からシャルルを任されたサイファーは手を握りラリーと一夏と共にクラスから出て第2アリーナの更衣室に向った……。いや逃走といった方が正しい、何故なら

「ああ！転校生発見」

「しかもサイファー君と手繋いでる！」

そう既に情報が伝達しており必死になって逃げているサイファー達・
・・だが

「はあっはあっはあっ」

シャルルの息が切れてきたのに気づいたサイファーはシャルルをお姫様抱っこした

キヤアアアアアアアアアッ！

「え！え！え！クウエイド君！」

「捕まっている」

そう言うとサイファーは走る速さがさっきより早くなりそれにラリーが続いたが

「ちよっ！お前ら早すぎ！」

サイファー達の速さについて行こうとする一夏だが追いつかず徐々

に離れていき女子に囲まれた

「……………!!」

後ろで一夏が叫んでいたがサイファー達は無視して走った

更衣室につき抱き上げていたシャルルを下ろした

「あ、ありがとう……」

顔を赤らめながら礼を言う

「イチカ……無茶しやがって」

ラリーは遠い目をしていた

「ま、軽い自己紹介をしよう、俺はラリー・フォルク、仲間からはピクシーと呼ばれた。ラリーでもピクシーでも好きな方を選んでくれ」

「……レオン・クウェイドだ。サイファーと呼んでくれ」

「よろしくサイファー、ラリー。僕はシャルル・デュノア、シャルルって呼んでね」

自己紹介を終えた3人は着替え始めた……だが

「わあっ!」

「ん?」

「どっした？」

服を脱ぎ着替えようとしてるとシャルルが声を上げた

「忘れ物か？早くしないと遅れるぞ？」

サイファーが聞くと

「そ、そうじゃないよ……あっち向いてて……ね？」

「？」

サイファーは不思議に思いながらも着替えてると……背中
視線を感じた

「……シャルル、何をそんなに見ている？」

「見てないよ！全然みてないよ！」

顔を赤くし否定する

「もう着替えたのか、スマン少し待ってくれ」

サイファーが急いで着替える……が

「……」

また視線を感じるサイファー、それを無視し着替え終える

「すまない、待たした」

周りをみるとラリーの姿が無かった、どうやら先に行ったみたいだ

「行くか」

「う、うん」

2人は急いで向った……一夏？そこら辺にころがってるぞ

授業では墜落してきた真耶をサイファーがISを展開し受け止めると顔を赤らめて妄想を呟いている以外は無事に終了

そして訓練が終わり昼休み、一夏争奪戦を行なっている中サイファー達は昼食を食べていた

昼飯を食べ終わるとサイファーは袋から食パンを取り出した

「あれ？まだ食べるの？」

シャルや女性陣は首をかしげていると、サイファーの周りに鳥が集まり始めた

サイファーが手に食パンを千切りると手の平に小鳥が集まり食パン

を啄ばむ、その小鳥の姿をみて優しい顔をするサイファー、何時も
の無愛想な表情のギャブにシャルルと女性陣は頬を赤らめた

「何故か分からないがサイファーは鳥に好かれるんだよ」

ラリーが食パンの欠片を手に持つとラリーにも小鳥が啄ばんだ

「ほ、ほら」

鈴音が食パンの欠片を持ち小鳥に近づけると……無視してサ
イファーの頭の上に乗った

「何で食べないのよ!」

小鳥に無視された鈴音は怒っているとセシリアが笑っていた

「まあ、がさつな貴女では無理ですわ」

そう言いパンの欠片を持ち近づけると……無視して箸の頭の上
に止まった

「どうした? 腹へっているのか?」

そう言いながらパンの欠片を持つと頭にいた小鳥が手に降りて食べ
始めた。その姿を鈴に鼻で笑われたセシリアは言い合いをしていた

2人の転校生（後書き）

あ…ありのまま今起こった事を話すぜ！

『小説を書き終えたと思ってディスプレイを見ると保存できてなく
全て消えていた』

な…何を言っているのかわからねーと思うが

俺も何をされたのかわからなかった…

頭がどうにかなりそうだった…絶望だとか鬱だとか

そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…

真実

学校が終わり夜、サイファーと同じ部屋になったシャルルはシャワーを浴びており、サイファーはこの前買った本を読んでいた

シャワーの音が鳴り終わると、読んでいた本にしおりを挟みキッチンで湯を沸かし始めた。湯が沸く間にインスタントコーヒーにカップとグラスを用意した

するとシャワールームが開きジャージ姿のシャルルが出てきた

「・・・飲むか？」

サイファーがインスタントコーヒーのビンを見せた

「あ、うん。お願い」

サイファーはグラスにコーヒー粉に氷、ミルクを入れよくかき混ぜた、湯が沸き自分の分を入れて、椅子に座っているシャルルにアイスカフェオレを渡した

「ありがとう」

シャルルは渡されたアイスカフェオレを受け取り、サイファーも椅子に座った。渡されたアイスカフェオレを飲んだ

「・・・おいしい」

シャルルが美味しそうな顔をした

「インスタントだが味が良くてな」

そう言いコーヒーを飲む

「……優しいんだね、サイファー」

「……何故だ？」

シャルルが上目遣いでそう言い、疑問に思ったサイファーが訳を聞くと

「クラスでの初めて見た印象が……ちょっと怖い人だなんて思ってた」

シャルルは一夏がラウラにビンタされるのを止めたラリー達を鋭い眼光でラウラを睨んでいたからだ

「……ボーデヴィツヒがイチカに手を出すを分かっていたからな、警戒していたからだ」

いつもの表情でコーヒーを飲むサイファーに、その姿に微笑むシャルル

「……やっぱり優しいね」

どこか寂しい顔をしているのにサイファーは気づいた

「……どうした」

その表情が気になり訊ねると

「えっ！ううん！何でもないよ！」

いきなり訊ねられたからかシャルルは顔を赤くし手をブンブン振って否定した。するとサイファーはシャルルの頭を撫でた

「え？」

一瞬何をされたか分からなく間抜けな声を出したシャルル

「お前に何かがあるかは知らん、……………だが何かあれば俺を頼れ、お前を守ることぐらいは出来る」

シャルルはサイファーの顔に見惚れていた、信念が強い瞳、無表情ながらも何処か安心できる表情、力強い言葉に……………ここに来た本当の理由を忘れるぐらいに

「ほん…と？」

サイファーは無言で頷いた

「うん……………大丈夫だよ」

シャルルの表情が笑顔になり撫でてた手を離れた

「あ……………」

シャルルが名残惜しそうな声をだした

「……………男だよな？」

その表情と声で本当に男か疑うサイファー

「な！ななな何言ってるの！僕は男だよ！」

「……………そうか」

サイファーは考えるのをやめた。するとドアをノックする音が聞こえた、サイファーがドアを開けると

「こんばんは」

真耶が立っていた

「この前言った物が到着したのでその連絡に」

頼んだ物が届いたと報告に来た真耶だが、どこかモジモジして髪を弄って顔を赤らめていた

「そうですか……………コーヒーでも飲んで行きますか？」

「え？いいですか？」

どこか嬉しそうな表情な真耶にそれを面白くない顔で見ているシャルルだった

シャルル達が転校してきて数日がたち、土曜日の午後の自由時間にサイファー達はアリーナにいた、その時にシャルルと一夏が模擬戦をやった結果、一夏の惨敗に終わった

「一夏がオルコットさんや嵐さん、サイファーにラリーに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ」

模擬戦で一夏の動きをシャルルに殆ど読まれ決定打を入れることが出来なかったからだ

「えつとサイファーとラリーは一夏と一緒に特訓してたんだよね、どんな風にしたの？」

ISを起動させずに黙って見ていたサイファーにシャルルが聞くと

「他にホウキ、セシリア、ファンを入れて1回20分の模擬戦をサイクルで行い、不足している所を指摘し重点的に指導する」

サイファーの指導方法は実戦形式で自分に何が不足してるかを自覚させる方法をとっていた

「一夏にはまず体を鍛えていた、だから実戦経験が不足している」
それを黙って聞いてたシャルルは

「なら、射撃武器の練習してみようか。はい、これ」

シャルルが渡したのは五五口径アサルトライフル《ヴェント》である

「え？他のやつの装備は使えないんじゃない？」

「普通はね。でも所有者が使用許諾アンロックすれば登録してある全員が使えるんだよ。使用許諾を発行したから試しに撃ってみて」

一夏はシャルルから銃を受け取り構えるが、ぎこちない

「か、構えはこうでいいのか？」

シャルルが指導しようとする

「立ち撃ち（スタンディング）の時は左足を前に出し右足を下げ半身になれ、もつと脇をしめ肘を曲げろ、リコイル反動を吸収できずに目標からぶれるぞ」

現役傭兵だったサイファーが構え方を教え

「スコープを覗く時は首を傾げずに真っ直ぐにし、目は両目とも開ける。咄嗟の事態に反応できない」

同じく傭兵だったラリーがレクチャーしながら教えてた

「えっと・・・反動とかは殆どISが自動で相殺するから心配しなくてもいいよ。センサー・リンクは出来てる？」

教えようとした事を全部言われてしまい乾いた笑顔をつかべているシャルル

「銃器を使う時のやつだよな？さっきから探してるけど見当たらない」

通常ならハイパー・センサーなどに組み込まれているのだが『白式』には組み込まれていなかった

「なら目測でおこなう、引き金トリガーを引く時は絞るようにしろ、目標から目を逸らすな」

サイファアの言う通り一夏は構え、スコープを覗き100と書かれた真ん中に照準を合わせ引き金を引いた

「うおっ！」

火薬の炸裂音で驚いた一夏は照準した所よりも外側に当たった

「ISのおかげで反動操作リコイルコントロールはマシだが……炸裂音ぐらいで驚くな」

サイファアは溜息をつきながら一夏を見ると、一夏は冷や汗をかき苦笑いをしていた

「そう言うなサイファア、イチカは銃を撃つのは始めてだ、的に当たただけでも良しとしよう」

ラリーがそう言い、一夏にポイントを説明しようとしマガジン分射撃をしていると

「ねえ、ちょっとアレ……」

「うそつ！ドイツの第3世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だつて聞いてたけど」

アリーナ内が騒ぎ始めサイファー達もそちらを向くと

「……………」

ドイツの代表候補生、ラウラ・ボーデヴィツヒがいた。ラウラは夏を睨み

「おい」

オープン・チャンネル
開放回線で声が聞こえた

「……………なんだよ」

一夏は嫌々答えた

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話は早い。私と戦え」

ラウラが見下しながら言うが

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様に無くても私にはある」

一夏はラウラの言葉に耳を傾けず、話しは平行線での言い合いがヒートアップし

「また今度な」

「ふん。ならば・・・戦わざる得ないようにしてやる!」

ラウラのISの右肩に装備されている実弾砲が一夏に向って砲撃した・・・が、砲撃し弾が出てラウラと一夏の丁度真ん中で、銃声と共に爆発した

「なにつ!」

爆発による煙で両者共に視界が封じられ・・・煙が晴れると、そこにはISを展開したサイファーが拳銃の銃口から煙を上げていた

この拳銃はサイファーが千冬に頼みオーダーメイドしてもらったサイファー専用五十口径拳銃『フツケバイン』である

「貴様・・・」

「・・・」

一夏の前に立ち拳銃を構えたサイファーを睨み、もう一発実弾砲を撃とうとしたが

「動くな」

ラウラの後頭部に銃口を突きつけたラリーな姿があった。ラリーはISを起動させ煙を迂回するようにラウラの後ろに回りECMPを使いラウラのハイパー・センサーを誤魔化して姿を隠していたのだ

「貴様!」

「言っただろ、仲間に手を出すなら……潰すと」

『円卓の鬼神』と『片羽の妖精』に挟まれ睨まれてるラウラには、もはや抗う手段がなくラリーを睨みつけてると

「その生徒！何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え！」

突然アリーナのスピーカーから騒ぎを駆けつけた担当の教師の音が響く

「……この屈辱忘れんぞ、ラリー・フォルク」

キツとラウラはラリーを睨みつけ、ISを解除し戻っていくラウラ。姿が消えてからサイファーとラリーは武器を解除した

「一夏、大丈夫？」

「あ、ああ、大丈夫だ」

シャルルが心配そうに一夏に声をかけ、サイファーとラリーも一夏に駆け寄った

「そろそろ戻るか、アリーナ閉館時間が近い」

ラリーがHUDヘッドアップディスプレイに表示された時間を見ると結構な時間が過ぎていた

「そうだな。あ、銃ありがとな、色々と参考になったよ」

銃をシャルルに返すと一夏はサイファーの方を向き

「助けてくれてありがとな、サイファー」

「……気にするな」

一夏はサイファーに礼を言ったが、サイファー何時もの表情だった

「えっと……じゃあ先に着替えて戻ってて」

サイファーとラリーは頷き更衣室に戻ったが、一夏がアホなこと言
い女子のある1名に殴られて更衣室に向った

サイファー達が着替え終わると

「あの一、だれかいますか？」

ドアの外から真耶の声が聞こえた

「はい、います」

「入って大丈夫ですかー？まだ着替え中だったりしますー？」

外にいる真耶が語尾を伸ばしながら訊ねてくると

「大丈夫ですよ。着替えは済んでいます」

「そうですかー、それじゃあ失礼しますねー」

ドアが開き真耶が入ってきた、真耶がきた理由は使用できなかった
大浴場が週2回使用できると言う知らせだった

「本当ですか!？」

一夏は喜び、風呂の文化が違うサイファー達にもそれは朗報だった
「確かお湯の中に入るんだったな？」

「ああ! すごい気持ちいいぞ！」

ラリーと一夏が笑いながら話していると

「感謝します、山田先生。俺も興味深く入ってみたかったので」

珍しくサイファーは笑っていた。その表情を見て真耶は顔を赤らめていた

「い! いえ、仕事ですし・・・でも喜んでくれてよかったです」

真耶もサイファーも珍しい顔を見て笑顔になって喋っていると

「・・・サイファー? 何してるの?」

後ろから声をかけられサイファーは振り向くと、そこにはシャルルが立っていた・・・不機嫌な顔をして

「・・・どうした」

シャルルの表情を不思議に思い、訊ねると

「なんでもないよ。それより何話してたの」

不機嫌な表情を直さずにいるシャルルが訊ねてきた

「ああ、どうやら大浴場が使えると聞いてな」

「そう」

何時ものポーカークフェイスで言うサイファーを横目にISを解除したシャルルはタオルで汗を拭き始めた

「あ、そういえばサイファー君とラリー君にはまだ用事があります。この前のアレの書類に本人のサインがあるのであります、職員室まできてくれますか？」

「了解」

「了解」

2人が返答するとサイファー達は更衣室を出た

「・・・・・・・・・・・・・・・・はあ」

寮の部屋に戻ってきたシャルルは吐き出すように溜息を漏らした。

脳裏浮かんだのは先程の楽しそうに話すサイファーと真耶の姿である

（何をイライラしてるんだろ・・・）

更衣室でサイファーに冷たく当たったのに後悔しながら胸が締め付けられるように痛いと感じるシャルル

(・・・シャワーでも浴びて落ち着こ)

職員室に向っていたサイファー達、すると目の前から千冬と何処かの制服をきたダンディーなおじさんがいた

「ここにいたか、お前等・・・どうした？」

サイファーとラリーはまるで信じられない光景を見たかのような顔をしていた

「き、基地司令官・・・」

「ふ、副司令官・・・」

その目の前にいた2人の顔は前の世界の基地司令と副司令に瓜二つなのだ

「久しぶりだな。サイファー大尉、ピクシー少尉」

「元気にしていたか？」

その言葉でこれが現実だと実感したサイファーとラリーは敬礼した、すると司令、副司令も敬礼した、ウステイオ空軍式の敬礼を

「ダルス委員長殿、マセツティ副委員長殿、まずは接客室へ」

「うむ、お願いする千冬君」

千冬はサイファー達の方を向き

「お前達も突いて来い」

こうしてサイファーとラリーは後に続き接客室に入るとソファーに座らず立っていた

「そう硬くなるな2人共、座りなさい」

「では、失礼します」

「・・・失礼します」

サイファー達は敬礼してからソファーに座った

「司令、一体いつこの世界に？」

サイファーは疑問は司令達がどうやってこっちに来たかだ

「その前に聞かせて欲しい、君達はいつこっちに来た？」

「・・・アヴァロンダムでのV2発射阻止して直ぐにです」

サイファーが答えると、司令と副司令はどこか納得した顔をしていた

「では質問に答えよう。私達が来たのはあっちの世界で死んでから

だ」

「「なっ！」」

サイファー達は驚いた声を出した。何故なら彼等が来たのはV2阻止後、つまりその時に司令と副司令は殺されたか、なにかの発作による突然死とされるからだ

「君達が考えている事とははずれている。私達は老衰後に此方に来た」

その言葉に違和感を感じた2人

「……どう言うことですか？」

「つまりだ、前の世界では君達はV2阻止後に行方不明になり、湖にも機体の破片はF-16しかなかった。その後は各国でISAF (Independent States Allied Forces) を結成、小惑星ユリシーズの落下、エルジアが中立国サンサルバシオンに侵攻、だがそれはISAFのエースメビウス1の活躍により戦争終結、ベルカ戦争から15年後ユークトバニアがオースシアに侵攻、だがそれもあるエース部隊により戦争は終結……これが私が死ぬまでに起きた出来事だ」

その話を真剣に聞いていた2人

「そして死んだ後、記憶を持ったままこの世界に生まれ、国連に所属しているとISによる『白騎士事件』が発生、これにより国連内でもIS組織、国際IS委員会ができ、私はその委員長をやっている」

「……それで司令は何故……俺達に会いに？」

そんな重役が懐かしいからと唯単に会いにくるはずがない、二人は真剣な表情をしてると

「……実は今、IS企業に不穏な動きがあり、その証拠がこの前のここを襲った無人ISだ。あれには登録されてないISコアが使用されていた」

「……」

2人はそのまま黙って話を聞き

「それを造った技術は凄まじく、だが造った企業や国家は不明、それで委員会はこれをこう呼ぶことにした『ファントム・タスク亡国企業』。それで私は信頼が出来る者による私個人の部隊を造ることにした」

「そこで目に入ったのが、俺達ですか」

ラリーの言葉に司令が首を縦に振り、副司令が説明の続きを言い始めた

「IS学園からの報告書を見た時は驚いたよ、まさか君達と同じ名前があったからな。それで時間を造りIS学園に来たら君達がいた」

「君達に私の造る部隊『ウステイオ』に入って貰いたい。勿論IS学園の生活、給金の支払い、専用ISの所持、その間のバックアップもつける」

司令と副司令は真剣な表情をして頼み込んだ

「……残念ながら断らせていただきます」

その言葉に司令達は驚き落胆の表情を出した

「俺達は傭兵です、契約書も無く口約束では了承できません」

サイファアの言葉に指令達はまた驚きながらも笑った

「忘れていたよ、君達は『ウステイオの傭兵』だったな。傭兵は契約書もなく了承を得るなど不可能だ」

指令は鞆の中から数枚の紙を取り出し、サイファアとラリーに渡した

「それが契約書だ」

2人は契約書を一字一句逃さずに読み

「司令、給金少なくありませんか？」

「それでも大分高いほうだが……」

などと契約書の内容を変更したりと色々した後、最後の所に名前を書いた

「これより君達は私の部隊、独立航空部隊『ウステイオ』、ガラム隊に所属させる。なお階級はサイファア中佐、ピクシー少佐とする！」

「了解しました」

2人はウスティオ式の敬礼をした

今日は疲れた。いろいろあり過ぎだ、今日は

俺は寮の自分の部屋のドアを開けた

「へ？・・・サイ・・・ファー・・・」

「・・・・・・」

俺は無言でドアを閉めた・・・どうやら部屋を間違えたみたいだ、部屋の中に体をバスタオルで巻いた女子がいた。俺は部屋番号を見ると1029号室と書かれている・・・間違はなく俺とシャルルの部屋だ、とすると今は・・・まさか、俺はドアを開けた

「・・・・・・シャルルか？」

「・・・・・・キャアツ！」

シャルルらしき女性はシャワー室に逃げ込んだ。俺は部屋に入りコーヒーを入れた、かなり濃いのをブラックで。それを飲み干した俺は落ち着き、風呂上りのシャルルの為にアイスカフェオレを用意した

「あ、あがったよ」

シャワー室から出てきたのはシャルルだ。しかし、何時ものジャージにはない胸があった……女性ではないかと思っていたが

「……飲むか？」

シャルルにアイスカフェオレを渡すと

「あ、ありがとう」

そしてゆっくりと飲み、俺は飲み終わるのを待った

「……落ち着いたか？」

カフェオレを飲み終えそう聞くと

「うん、落ち着いたよ」

「……さて、問題はここからか」

「訳を聞かせてもらえるか？」

その後の話は中々ヘビーだった。シャルルはデュノア社社長の愛人の娘、母親の死後に父親が引き取りIS適正が高いことが分かり会社の道具になる。そしてデュノア社が経営危機に陥り、その回復の為にシャルルを男と偽り広告塔代わりとイチカノIS『白式』のデータの採取……愛人だが自分の血を分けた娘にここまでやらすとは……くそつたれなチキン野郎だ！

「……ごめんねサイファー」

顔を上げるとシャルルが

「ごめ……ヒクツ……んね、サイファー……エグツ……折角……エグツ……折角信用して……ウグツ……守ってくれて……言……くれたのに……ヒクツ……嘘……騙してごめんね」

泣いていた、声を出さず泣きながら俺に謝っていた……久々に切れちまったよ……こんな気分久々だ、あのくそつたれの上官以来だな……だがまずは

「……ヒクツ……え？」

俺はシャルルの涙を指で拭った

「どうして……どうして優しく……エグツ……してくれるの……ぼく」

「……何故泣いているんだ」

俺は流れるシャルルの涙を指で優しく拭いながら訊ねた

「だって……だって……僕……サイファーを騙して……それで……」

「俺はお前を嫌いにならない」

「きら……え？」

シャルルは顔を上げた

「シャルル……お前はどつしたい」

「……どう言う意味？」

「このまま会社の言いなりになるか……それともそこから飛び立つか、どちらだ」

シャルルは悩んでいた……俺が見た中で一番辛そうな顔をして悩んでいた

「シャルル」

俺が声をかけるとシャルルはオドオドしながら顔を上げた

「言ったはずだ、何かあれば俺を頼れと、守ってやると」

「ほんとに……ほんとに、守ってくれるの？」

俺は頷いた、するとまた涙を流して

「もう……イヤ……あの人の言いなりなんてイヤ！」

そう叫ぶシャルルを俺は頭を撫でた

「まだ……言ってない言葉があるだろ」

そう言うとシャルルは俺を見て

「たすけて……サイファー」

「ああ……任せろ」

俺はポケットから携帯電話を取り出し、ある人物に電話をかけた

サイファー、どうしたんだ？君からかけるとは？

少々……お願いがあります、司令

俺はシャルルから了承をとり訳を説明した

なるほど、君は彼女を自由国籍をもった国連所有のIS操縦者に
して欲しい訳か

メリットはあります

電話越しで司令が考えてるが分かる

彼女は使えるのか？

適正、腕前は上々、後は実践経験があれば

……よからう、他でもない君の頼みだ、しかもメリットまで
有るとなると断る理由も無い

ありがとうございます、司令。でわ

俺は電話を切り、不安そうな顔をしているシャルルの方を向いた

「安心しろ、あと数日もするとお前は自由国籍を持った国連所有のIS操縦者だ」

「……………ありがとう、サイファー」

そう言いシャルルが俺に抱きついてきた

(なんか、ドキドキする)

僕は顔を上げサイファーを見た、何時ものポーカーフェイスじゃなく安心できる表情だ。

(ああ……………分かった)

この心が温まる気持ち……………僕は……………サイファーに恋をしたみたいだ……………ううん、恋をした

「今日はゆっくり休め……………まだ夕飯を食べていなかったな」

サイファーの声を聞くだけでも心が温まる……………僕はさらに強く抱きついた

「シャルル……流石に動きにくい」

あ、言い忘れてた

「違うよ、シャルロット。これから……2人の時でいいからそつ呼んでくれる?」

「それが……本当の」

「うん、お母さんがくれた……本当の名前」

「シャルロット……いい名前だ」

サイファーが優しい顔をしてくれた……名前を褒めてくれた……嬉しい!!

「そろそろ食堂に行くぞ」

「あの……」

うっ……これを言うのは恥ずかしい……でも

「……どうした」

「あの……ね、これからは……甘えても……いい?」

ああ……言っちゃった!……恥ずかしい

「……ぶっ」

サイファーが頭を撫でてくれた・・・頭を撫でられるのがこんな
気持ちいいなんて

「行くぞ」

お母さん・・・僕は今・・・幸せです

真実（後書き）

PVが30,000、ユニークが5,000突破しました。皆様ありがとうございます

中々難産で時間がかかり（特に指令の所）疲れました・・・、ですが！シャルロットの所を書いている時は恐らくニヤニヤしていたはずwwww

ブライド

・・・暗い・・・いつ頃からこうなのかは覚えていない。ただ、生まれた時にはもう暗い闇を知っていた

人は初めて光を見ると言うが、私は違う。闇の中で育てられ、影の中で生まれた

ラウラ・ボーデヴィツヒ。それが自分の名前だつと知っている、だがそれが何の意味を持たないことを理解している

だが例外はある、教官に・・・織斑千冬に呼ばれる時だけは、その響きが特別な意味を持ち、そのたびに僅かな心の高揚を感じていた

（あの人の存在・・・その強さが、私の目標・・・存在理由・・・）

出会った時に一目でその強さに震えた。恐怖と感動、歡喜に心が揺れた。そして願った、こうなりたい・・・と

空っぽだった場所が急激に埋まり、そして全てになった。絶対的な力、理想の姿、唯一自ら重ね合わせたいと感じた存在・・・ならばそれが完全な状態でなければ許されない

（織斑一夏・・・教官に汚点を残させた張本人・・・）

あの男の存在を認めない

（排除する。どのような手段をつかってでも・・・そして）

私の邪魔をし、あの眼……教官と同じ強者の眼など……

(認めない……貴様が教官と同じなどと認めないぞ！ラリー・フオルク……必ず私の手で排除する)

一緒に寝てくれたの、手を握ってくれたの、と色々ありながらも一夜が過ぎた

「う……ん」

シャルルが眼を覚し、体を起こすと椅子に座りコーヒーを飲みながら新聞を見ているサイファーがいた

「おはよー」

シャルルが眠気眼をしながら挨拶すると

「おはよう、顔を洗って来い」

「うん……」

シャルルが洗面所で身嗜みを整えてる間に、サイファーはホットのカフェオレを淹れていた。洗面所から戻ってきたシャルルは身嗜み

を整えいつもの男性用制服をきていた

サイファアの目の前の椅子に座ると、サイファアがカフェオレを置いた

「ありがとう」

シャルルはカフェオレをゆっくり飲み、時間が過ぎていき、そろそろ時間になった

「朝食に行くぞ」

鞆を持って立ち上がったサイファアがそう言つと

「……」

少しむくれた顔をしていた

「……どうした」

サイファアが不思議そうな顔をしていると

「……まだ一度も名前で呼んでくれない。2人きりなのに」

そっぴいそっぴい向いたシャルルに

「……いくぞシャルロット」

サイファアが名前を呼ぶと、シャルルは鞆を持ち笑顔でサイファアを見た

「うん、いこサイファー」

2人が部屋から出ると

「よお、おはよう」

部屋の前にラリーがいた

「……待たせたか？」

ラリーが腕時計を見ると

「誤差2分だな。珍しいな、時間に正確なお前が」

「気にするな」

そう言いサイファーが歩くと同時にラリーがサイファーの隣を歩き、少し遅れてシャルルがサイファーの隣を歩いた

朝食を食べている途中で一夏と合流、食べ終わり教室に向っていると

「そ、それは本当なんですの!」

「う、ウソじゃないでしょうね!」

廊下まで聞こえてくる声を不思議に思う男子一同（女子1名）は教室に入ると

「本当だって!この噂、学園中でもちきりなのよ?月末の学年別ト

「ナメントで優勝したら織斑君と交際でき・・・」

「俺がどうしたって？」

自分の名前が出た一夏が訊ねると

「「「きゃああっ！」「」」

と悲鳴を上げた、その悲鳴に驚いた一夏だが

「な、何の話をしてたんだ？俺の名前が出てたみたいだけど」

「な、なんでもないよ！なんでも！」

「そうですね！な、なんでもありませんわ！」

慌てて否定する鈴とセシリアを疑問に思う一夏だが

「あまり詮索するなイチカ。しつこい男は嫌われるぞ？」

ラリーが鈴達をフォローすると

「そ、そうよ！女の子には秘密があるんだから！」

「そ、そうですねよ！紳士は女性を詮索などいたしませんわ！」

そう言い鈴は自分のクラスに戻り、セシリアは自分の席に戻り、それを見ていた篤はなにやら頭を抱えていた

(やれやれ、面倒だな)

俺はトイレに向ってるが……遠すぎる。女子しかいないから分かるが……男子が増えたんだトイレを増設して欲しい

特定の場所以外ではISの展開は禁止されてるし、『モルガン』ならものの数秒なのだが……

「何故こんなところで教師など！」

「やれやれ……」

ん？……この声は織斑先生にボーデヴィツヒか、俺は声が聞こえた方を向くと

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」

「このような極東の地で何の役目があると言っているのですか！」

おいおい、人の行動を他人がどうこう言うとな……まるで分かってないな

「お願いです、我がドイツで再びご指導を。ここではあなたの能力は半分も生かせられません」

「ほう」

「大体、この学園の生徒など教官が教えるにたる人間ではありません
ん」

おいおい、何様のつもりだ

「なぜだ？」

「意識も甘く、危機感に疎く、ISをファッションか何かと勘違い
している。そのような程度の低い者達に教官が時間を割かれるなど
」

視野の狭い奴だ、人を上面と偏見でしか見れないのか

「・・・そこまでにしとおけよ、小娘」

「っ！・・・」

「・・・なかなか凄い気迫だな、ベルカエースとの格闘戦ドッキングファイトを思い出
すぜ

「少し見ない間に偉くなつたな。十五歳でもう選ばれた人間気取り
とは恐れ入る」

「わ、私は・・・」

怯えたか・・・ま、しかたない。あれほどの気迫だ、俺もブルッ
ちまっぜ

「さて、そろそろ教室戻れ、授業が始まるぞ」

「……………」

さてそろそろ俺もトイ……

「その男子、盗み聞きか？異常性癖は感心しないぞ」

ばれてたか

「相変わらず厳しいな、織斑先生」

バシーンッ

いきなり頭を叩かれるとは

「目上の者には敬語を使わんか、クウエイドを見習え」

「アイツは堅過ぎるんですよ、もっとフランクにならないと」

まったく、アイツと初対面の時なんてまるで精密機械だったんだぞ、
まあ今はだいぶ柔らかくなっただがな

「……………」

「……………」

「……………聞かないのだな」

沈黙が続いていたが織斑先生が先に喋りだした

「……俺は元傭兵だ、いろんな立場な奴を見てきた。上官を殴って軍を辞めた奴、甘いものが好きな戦闘狂、ゲイだが色々頼れる奴、いろいろだ」

俺は肩をすくめながら言う、織斑先生は真剣な表情だ

「……アイツだつてそうだ。訓練中に敵の奇襲を受け自分以外撃墜された。その後はその戦争では合計で40機以上を撃墜した、だが政府はその戦争のきつかけを世間に露出させない為に2階級特進し退役では少佐待遇だと聞いた」

「……」

「……織斑先生、アンタは今の行動を後悔してるか」

真剣は表情だが、眼は曇ってない

「……後悔など無い」

「だろうな。アンタ程の人物が後悔なんてする筈が無い。……だが今の職業にプライドを持っているか？」

「……」

「俺にはある、世界中どこへでも戦うべき場所へ行つて戦うのが傭兵だと俺はおもっている。戦争に群がるハイエナとか言う奴もいるが、俺には『傭兵』がプライドだ」

まったく何て奴だ、ここまでしつかりとプライドが言える奴などそういない。それに・・・いい顔をしている、流星はエースと言った所か

「・・・恐れるよ、お前には」

この男がここまでいたるのには、それこそ想像もできない修羅場を潜って、それで自分の信念が折れずに歩んでこれた賜物だろう・・・
・ 凄い奴だ

「へえ、そんな表情ができるのか」

・・・何を言ってるんだこの男は

「なかなか可愛い顔できるじゃないか」

「なっ!」

私の顔が可愛いだと!

「で、出鱈目を言っな!馬鹿者!」

「いや本音だぞ、自分の表情を理解できてないのか? いい顔してたぜ」

なんだと！……いつたいどんな表情をしていたんだ私は

「……………それともう一つ」

私が顔を上げると……………そこにいたのは歴戦の猛者だった

「ボーデヴィツヒか……………恐らく次は本格的な戦闘になる。手加減せず潰すが大目に見てくれよ」

目の前の男は口は笑ってるが眼は笑ってない……………これは戦士の目だ

「ああ、いいだろ。あいつにもいい薬になるだろ」

「そうか……………それだけだ。あ、次の授業は織斑先生だろ？トイシ行くから遅れる」

戦士の気迫がなくなるといつもの調子に戻ったか

「馬鹿者、そんなの許せるか。グランド10周で許してやる」

「うへえ〜、勘弁してくれよ」

「ダメだ、しかも敬語で喋らない罰をいれて15周で許してやる」

フォルククが必死で言い訳をしてくる……………まったく面白い男だ

プライド（後書き）

昨日30,000だったのに40,000になってやがる・・・ありえるのか・・・こんなネクスト（PV）が

最近、千冬さんがACf aのセレンさんに見えてしまうのは俺だけだろうか

禁じられた力

サイファー、ラリー、シャルル、一夏は授業が終わり放課後、月末の学年別アリーナといつもの特訓のためアリーナに向っていた

「確か今日使えるのは、えっと……」

一夏が何処が使えたか思い出そうとしたが

「第3アリーナだ」

「「わあっ!」「」

いきなりの声に一夏をシャルルは驚き、サイファーとラリーは普通に振り向いた

「ホウキか、お前もアリーナに行くのか？」

「ああ、今日は使用者が少ないと聞いている。空間が空いていれば模擬戦も出来るだろ」

「それは助かるな、機体の微調整ができそうだ」

ラリーと篤が何気なく喋りながらもサイファー達がアリーナに向っていると、近づくにつれ慌しい様子で廊下を走っている生徒も多い

「何かやってるのか……っ!」

ラリーが疑問に思っていると……突然爆発音が聞こえ驚く一夏達

だが、その音に慣れているサイファーとラリーの行動は早く、アリーナを見ると、鋭い眼つきになりラリーも何時もの表情から鋭い表情になった

一夏たちも視線を向けると煙を切り裂くように影が飛び出した

「鈴！セシリア！」

アリーナで模擬戦していたのは、かなりのダメージを受けISSアーマーの一部が破壊され苦い表情をしている鈴とセシリア、そしてもう一方が

「……………」

『シュバルツエア・レーゲン』を駆るラウラである。ラウラのISSは無傷では無いものの軽微な損傷だった

「……………」

一夏が声を上げ何か言っているが、サイファーとラリーは厳しい表情をしていた。その理由が

「くらえっ！」

鈴のISS『甲龍』に搭載されている第三世代型空間圧作用兵器・衝撃砲《龍砲》を最大出力で砲撃した……………だが何かバリアらしきモノを展開し右手を突き出しただけで衝撃砲を完全に無力化したからだ

2人は数の有利をいかせず追い詰められ、そしてワイヤーブレード

と呼ばれる武器でセシリアと鈴音を縛り上げ、殴る、蹴るなどして痛めつけていた……愉悦に口元を歪めながら

だが、ラウラのハイパー・センサーが警告を示した。ラウラは2人を縛っていたワイヤーブレードを戻しバックステップすると、ラウラがいた場所に青白いレーザーが突き抜けた

ラウラはレーザーが飛んできた方向を見ると……制服をきた一夏とシャルル、そして一般生徒しかいなかった

「……すまない、セシリア」

「俺の不注意で……すまん、ファン」

ラウラは声が聞こえた方を見る、ボロボロになったセシリアと鈴音を抱えたサイファーとラリーがいた

「ラリー！サイファー！」

一夏とシャルルがISを展開しサイファー達に近づいた

……サイファー、コイツは俺が喰う。そいつらを連れて下がってくれ

ラリーオープン・チャンネルが開放回線でそう言う

「まで！俺も一緒に戦う！」

「僕も！」

シャルルと一夏がそう言つと

「……足手まといだ」

背中を向けていたラリーがそう言つと

「ッ！」

「ッ！」

2人は体全身から冷や汗が流れた、声からすら分かる殺気、体から漂う気迫、それらに当てられた二人は無意識に後退していた

……確実に潰せ

だれに言ってる、潰すさ……確実に

開放回線でそう言つとサイファーはセシリアと鈴音を抱え、一夏達と一緒に格納庫に向つた

ラリーはラウラを見た、ラウラはレールカノンの照準をラリーに向け先程の歪んだ笑みをしていた

「ラリー・フォルク、貴様を排除するこのt……」

「……だまれ」

ラリーはラウラを睨んだ、ウステイオやベルカ、諸外国にもその名を轟かせた2名、『円卓の鬼神』、『片羽の妖精』と言われた……
・戦争を味わつたことの無い生徒と違い、本物の戦場で命の駆け引

きを常にやってきた人物を、ラウラは怒らせてしまった

「この国のことわざに「仏の顔も三度まで」と言う言葉がある。・・・2度忠告した筈だ、仲間に手を出せば・・・潰すと」

だがラウラは目の前の強敵を恐れなかった・・・いや、脳内麻薬が過剰分泌し恐怖心が麻痺していたのだ

「はっ、所詮貴様もあのメス共同様に取るに足らない存在だ。この私みずから排除する！」

ラウラはラリーに向けてレールカノンを発砲、だがラリーはガトリングライフルでそれを撃ち抜くと爆発、その爆発により発生した煙により2人の視界が塞がれた

「ちっ」

ラウラが煙の中から飛び出ると、ラリーの姿が見えなかった。煙の中にいると思いハイパー・センサーで探してみると・・・ハイパー・センサーにノイズが走った

「なにっ！」

ハイパー・センサーにノイズが起きた事に驚いていると背中に衝撃を受けた

「があっ」

銃による連射音を聞いたラウラは銃で撃たれたと理解し後ろを見ると、右腰のミサイルハッチを開いたラリーの姿があった

「ガラム2、FOX2」

数十発のミサイルがラウラに向けて飛翔した・・・だが

「無駄だ」

ラウラが右手を前に突き出すと、ラウラの目の前にバリアらしきモノが発生、それにより「サイドワインダー」はラウラの目前で止まった

「私の「停止結界」の前では貴様の攻撃など無意味だ！」

ラウラは歪んだ笑みをしていた。だが、目の前に視界が埋め尽くされるミサイルでラリーを目視ではなくセンサーに頼っていた、だから

「ガラム2、MPBMを使用する」

ラリーは既に動きを止めたラウラの背後に回っており、左腰のミサイルハッチが開くと3発のミサイルが発射された。ミサイルが発射後にラウラのセンサーに警告画面がでた

「なっ！」

ラウラは後ろを向きミサイルが近づいてきているを確認した後上空へと回避行動をとった。3発のミサイルがラウラに追尾し、1発のミサイルが弾頭を炸裂し子爆弾を散布した

「っ！」

ラウラはすぐさまA I Cを起動させ散布ミサイルを止めたが、残り2発のM P B Mが炸裂、散布ミサイルがラウラを襲うが

「無意味だ」

もう片腕を前に突き出しA I Mを発動させ、散布ミサイルを止めた

「止まったな」

ラリーは既にラウラの上空におり、ガトリングライフルの照準を散布ミサイルの1発に合わせ発砲、ミサイルが爆発し周りの散布ミサイルを誘爆させた。目の前にあった100発近いミサイルが一気に爆発、その衝撃波をA I Cで防いだが・・・余りにも威力が大きすぎ動けなかった

その間にラリーが接近しようとしたら

「っ！死ねええっ！」

ラウラがレールカノンを発砲、だがラリーの手にはT L Sが握られていた

「ガラム2、T L Sを使用する」

音速で飛んでくる砲弾をラリーはT L Sで撃ち抜き、貫通したレーザーはそのままラウラのレールカノンに直撃、爆散した

「があっ！」

すぐ側でレールカノンの爆破により集中していたA I Cが無くなり、

爆破の衝撃波を受けた。ある程度相殺していたおかげでそこまでのダメージを受けなかったが遠距離武器を破壊された苦い表情をしていた

「・・・・・・・・」

上から見下すように睨むラリー、その姿が感に障ったラウラは奥歯を噛み締め両手に搭載されてるプラズマ手刀を起動させ

「はあああ！」

ラリーへと突っ込んだ、ラリーはそのまま回避行動を取った。逃げるラリー、追いかけるラウラの凶になり徐々にラリーとラウラの距離が縮まり

「もらったあっ！」

『イグニッション・ブースター瞬間加速』を使って一気に距離を詰め斬りかかった、しかし

「何っ！」

プラズマ手刀は空を斬っただけであった。そしてラウラは後ろから銃撃を受けた

「うがっ！」

ラリーがおこなった行動は『クルビット』と言われる機動である。クルビットとは水平飛行中のコブラから機首を前方に戻さず、後方に一回転させ水平姿勢に戻る機動である。本来なら目の前で止まるなど自殺行為であり実戦ではなくデモンストレーションの技なのだが

ISにはPICのおかげで前後左右自由自在に動け、速度を落とすことなく宙返りを起こったのである

ラウラがハイパー・センサーのシールドエネルギーを見るとかなり減っており、後2、3回しか攻撃を耐えることが出来なかった

(バカな……私が……シュヴァルツ・レーゲンが追い込まれるだと！)

ラウラはやつと冷静になり、理解した。目の前のエースに、敵国から恐怖の対象とされたネームドの実力に、ラリーから発する恐怖を掻き立てる気迫に

(ラリー・フォルク、貴様は一体何なんだ！?)

ラウラの機動が鈍くなるのを見てラリーは開放回線で話しかけた

ボー・デヴィツヒ、お前は何のために戦う

突然聞こえた声にラウラは顔を上げ睨む

何のためだと……決まっている国のためだ！

本当にそうか？

何ッ！

お前は本当に国の為なのか？違うなお前には何も無い

ッ！

ラウラは凶星を突かれた

お前は何も無かった、だがそこで与えてくれる人物が現れた。織斑千冬だ、お前は彼女に何かしらの思いを抱いた

管制室にもその声は届いており、そこにいる全員が耳を傾ける

だが、そこにプライドはあるか信念はあるか

・・・ッ

ラウラは返答できなかった、何故なら彼女は

そんなのは必要無い！私は戦う為の存在だ

筋が通って無いぞ、お前が戦う為の存在なら何の為に戦う

力こそが全て！存在意義だ！

ラウラとラリーが空でグルグルと周りながら言い合う

力を求め、得て、お前は何をなす。何処へ向う

戦闘者として完成された存在こそ私の全てだ！

ラウラが6つのワイヤーブレードをラリーに向けて射出、縦横無尽に襲いかかるブレードとワイヤーだが、ラリーは足のバーナーを巧みに操りワイヤーの隙間を縫うように避け反撃、それをAICで止

めるラウラ

完璧な奴なんて何処にもいない。お前にはプライドも信念も無い
黙れ！

ワイヤーブレードでラリーを攻撃するが……同じ攻撃を受ける
ほど彼は愚かではない、ガトリングライフルで回避行動を取りなが
らブレードを撃ちおとしていく

1人で出来ることなど高が知れてる、仲間がいて成せることの方
が多い。その仲間に必ずプライドがあり信念がある、だからどんな
存在だろうと立ち向かえる。機械と同じ考えのお前では俺達には勝
てない、織斑千冬には成れない

黙れええええっ！

ラウラは『瞬間加速』を使いプラズマ手刀でラリーに襲いかかる、
だがラリーは動かずじっとしている

おおおおお！

叫びながら斬りかかるラウラだが

……がはっ！

そこには斬られたラリーでは無く、腹にラリーの拳がめり込んだラ
ウラの姿だった

『瞬間加速』は確かに凄まじい速さだ、だが一直線にしか突っ込

まないそれにはカウンターを入れやすい。冷静さを失ったお前の動きなど手に取るように分かる

シールドエネルギーが無くなり地上へと落ちてゆくラウラ

(こんな・・・こんな所で負けるのか、私は・・・)

落ちてゆくラウラは見下ろしたラリーの姿が映った。その姿に苛ついた、自分に命令していいのは織斑千冬だと

(敗北させると決めたのだ。あれを、あの男を完膚なきまでに叩き伏せると！)

心の中で思った

(力が、欲しい)

ラウラの中で何かが蠢蠢いた

『・・・願うか・・・？汝、自らの変革を望むか？より強い力を欲するか？』

(当たり前だ。力があるなら・・・手に出来るなら、私など・・・何も無い私などくれてやる！だからよこせ！比類なき・・・唯一無二の力を・・・よこせ！)

ラウラの金色の目に

機体損傷・・・レベルD、精神状態・・・最大値、意志・・・確認・・・『ヴァルキリートレースシステム』起動

「あああああああああああああああああああああつ」

アリーナに響くアウラの悲鳴、それと同時にシュバルツエア・レーゲンから激しい電撃が起こり、ラウラの眼帯が弾き飛ばされ、『ヴォーダン・オージエ』が露あじわとなった

その姿に管制室にいる殆どが驚いていたが、驚かない人物もいた。アリーナ……いや戦場にいるラリー、管制室にいる織斑千冬とサイファーだった

「なんだよ、あれは……」

モニターで見ていた一夏が呟いた。何故ならラウラのISが……装甲が全てぐにやりと溶け、どろどろになったものがラウラを包み込んでいき、緊急事態となり観客席の防護壁が下りた

織斑先生、あれは何だ

ラリーから通信が入った

後で話す、だが……油断するなよ

目の前のヘッドロもどきがラウラを飲み込み形を造り始めた

(形は……打鉄か?)

ヘッドロもどきが高速で全身を変化、形成し、そこに立っていたのは黒い全身装甲フルスキンのISに似た「何か」だった

(武器は・・・近接武器、だが何かに似ている)

ラリーは目の前のISを警戒しながら詮索し、持っている武器が何かに似ているのに気づいた、すると

はなせ！あれは千冬姉の！

落ち着けイチカ！

開放回線にしているから聞こえてきた声は、声を荒げる一夏とそれを止めるサイファアの声だった

それを気にせずガトリングライフルを構えるとISモドキが高速で接近してきた

「っ！」

その速さは先程のラウラとは違いフェイントを含んだ動きだった

「くそっ！」

ラリーはバーナーを吹かし上空に逃げながら掃射、だが銃弾を避けながらラリーに接近してき、突然ラリーの目の前に現れ武器を振り上げていた

(『瞬間加速』だっ！くそったれ！)

ラリーはバーナー全開にして足を横に向けた

「ぬおおおっ！」

振り下ろしてくる武器を体を捻りながらも回避、そのまま全速で距離をとった

「……確かにこれは本気でやらないとヤバイな」

そう呟くとまた通信がきた

離せ！ふざけやがって！ぶっ飛ばしてやる！

また一夏が暴れており

離せ！サイファー！邪魔するならお前も！

すると誰かが殴れた音がし静かになった

ガラム1よりガラム2へ、騒がせてすまない

どうやら殴られたのは一夏の方で床にキスし気絶していた

どうやらそのISモドキは織斑先生の全盛期を模写した姿らしい

なるほど、通りで強い訳だ

もうすぐで先生方が到着する……援軍は必要か？

サイファーの声には何やら試しているものだった

……到着時間は

残り10分だ、直ぐにケリをつける。所詮は偽者だ

ガルドム2、了解

ラリィが返事すると同時に

ワンオフ・アヒリティ
＜単一使用能力作動・・・『片羽の妖精』使用可能＞

ラリィのIS『モルガン』が紅い光に包まれ、手には

ガルドム2、TLSブレード使用する

レーザーブレードを握ったラリィが構えた、まるで熟練者のように流れる動作でアルバーの構えをした

フォルク

通信に千冬の声が聞こえた

一撃で仕留めろ、あの姿を見てると不愉快になる

その言葉にラリィは笑い

ガルドム2、了解

そしてラリィは突っ込んだ・・・いや『瞬間加速』をぶっつけ本番で使用した。その速さは『白式』や『シュバルツエア・レーゲン』が霞むほどの速さで突っ込んだ

「G A A A A A A A A A A A A A A A A ! ! !」

「C・mooooooooon!!」

ラリーは叫びISモドキも叫んだ、そしてすれ違う一瞬……勝
負は決した

「……………」

「……ガア……ア」

ラリーの左腰のミサイルコンテナが斬られたが、ISモドキは正中
線を見事に真っ二つに斬られた。ラウラがISモドキから落ちる所
をラリーが抱え

ラリーの目とラウラの目があった、金色の左目と、ラリーはラウラ
の姿が捨てられた子犬のように見え助けを求める姿にも見えた

「……たく、寝顔は可愛いんだな」

ラリーは疲れて寝てしまったラウラをみて微笑みながら呟いた

禁じられた力（後書き）

今回でた西洋剣の構え『アルバー（Alber）』ですが構え方は左足を下げ、右足を前に、腕を左に下ろし、切っ先を正面下に下げた構え。これは一見ノーガードに見えるので、勢い込んで相手が攻撃してくる時に、切っ先を上に向け下腹を突く。さらにノーガードに見せるべく、切っ先は地面に降ろして剣を垂直に立て、左手はポムメルの上に重なる方法もある。右手を軸に左手でポムメルを押し下げると、テコの応用で剣先は持ち上げるよりも早く上を向く・・・以上、wiki先生からでした

この構え方はFate/stay nightのセイバーことアルトリア・ペンドラゴンの構えです。ラリーのレーザーブレードは西洋剣がモチーフです。扱い方は本能で理解できている、まあ何故か使い方が分かると言うことです

PVが50,000突破しました。皆様ありがとうございました

それと、そろそろ閑話で戦闘機 VS ISをしようと考えてますが書いて欲しいですか？ということアンケートを書きます

1、ガラム1、離陸する（書く）

2、早く本編進めろ！（書かない）

アンケートは7日まで待ちます、どんどん感想に書いてください

やりすぎの和解(前書き)

どこかにACCネタがありますが・・・わかるかなWWW

やりすぎの和解

医務室、そこには眠っているラウラと椅子に座っている千冬、サイファー、ラリーの姿があった

「では話してもらいますよ、織斑先生」

サイファーが真剣な表情でそう言うと

「VTシステムは知っているな」

「授業で言っていたISの禁止条例の1つですね」

VTシステムとは過去のモンド・グロッソの戦闘方法をデータ化し、そのまま再現・実行するシステムである。現在ではあらゆる企業・国家での開発が禁止されている

「と言うと・・・あれがVTシステムか」

「そうだ、巧妙に隠されていたがな。操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そして何より操縦者の意志・・・いや願望か、それらが揃うと発動するようになっていた」

「司令への通達は」

「既にしてある近い内にドイツ軍に強制捜査が入るだろ」

3人は真剣な表情をしていた

「……上層部は本当に許諾していたのか」

サイファーがそう言うとラリーはサイファーの方を向いた

「どつ言つことだサイファー」

「ボーデヴィツヒの秘密を聞いて考えたが、彼女が力を求めてしま
うのを予測してVTシステムを入れたかもしれない」

「……VTシステムの実験データか」

顎に手を置き考える千冬

「……だが一体だれが」

謎が謎に包まれ頭を捻る3人だったが

「う……あ……」

ラウラが目を覚ました

「気がついたか」

千冬がラウラの方を向いた

「私……わ……」

「全身に無理な負荷がかかったことで筋肉疲労と打撲がある。しば
らくは安静だ」

千冬が、あの出来事をはぐらかそうとしたが、かつての教え子はそう簡単に誘導してくれなかった

「何が……起きたのですか？」

無理に上半身を起こし、無理に起こしたことで全身に走る痛みで顔を歪めるが、瞳は……左目の金色の目と右目の赤色の目が真っ直ぐ千冬に問いかける

「ふう……一応、重要案件である上に機密事項なのだがな」

千冬はラウラに話した、シュバルツェア・レーゲンに密かに組み込まれていたVTシステムのことを

ラウラはうつむき、虚ろな目をしていた

「私を笑うか……フォルク、私は力こそが全てと言い、完成された兵士と言いながら……こんな反則な力を使う私を」

ラリーを見たラウラの瞳は光がなく濁っていた

「……気にするな」

何時もの笑顔でそう言うラリー

「人間誰だって完璧な奴はいないさ、失敗して道を踏み外して……それを誰かに言われて初めて気付く」

「だが……私は」

ラウラの瞳はまだ濁ったままだ

「ボーデヴィツヒ、お前にはプライド、信念はあるか？」

「私は……………」

ラウラは答えなかった、今の自分には何も無いのだと

「無いなら見つければいい。この歳で明確なプライドや信念があるやつなんてそういない」

ラリーはラウラの目の前に行き

「もつと周りを見て、答えが見つかるまで考えればいい、1人で無理なら誰か他の奴を頼ればいい、お前は1人じゃない少なくとも俺や織斑先生がいる」

ラリーの言葉でラウラの瞳に光が戻ってきた

「見つけれる……………のか、私にも」

「見つけられるさ、時間は腐るほどある」

ラウラの瞳に光が戻るのを見たラリーはサイファーと一緒に医務室を出ようとした

「お前……………は、何の為に戦う」

ラリーは振り向き答えた

「いろいろ理由があるが……守る、為だろつな今は」

そう笑いながら答え医務室を後にした

医務室から寮へ戻る時に一夏がサイファーに謝りに来て数時間後

「ふう〜、確かにこれはいいものだ」

俺は使用可能になった大浴場におり湯に浸かっていた

（イチカが進めるだけはあるな、前の世界にオンセンと言うのがあったが、ここにもあるだろうか）

湯に浸かり、そんなことを思っていると……浴場の扉が開く音がした

「ラリーか？」

俺は恐らくラリーだと思い、後ろを向かず声をかけると

「残念、僕だよ。サイファー」

……聞き間違いか、今……シャルロットの声が聞こえたよつな。俺は恐る恐る振り向くと……前をタオルで隠しただけ

のシャルロットがいた

「あ、……あんまり見ないで、サイファアのエッチ」

「すまん」

俺は前を向いた……落ち着け、いくら女性の裸が久々だからと……まだ15、6歳の少女だ

「どうした、何かあったか」

冷静に……そう常に冷静な判断が必要だ。例えどんな状況下だろうと……

「僕が一緒だと……イヤ？」

いらん考えを捨てる！素数を数えるんだ！2、3、5、7、11、13、17、19、……

「いや、そんなことは無いが」

シャルロットが俺の真後ろに座ったと……俺も男だぞ一体何を考えているんだ

「……そろそろ上がる、ゆっくりしていけ」

流石にこの状況はマズいな、撤退だ

「ま、まって！大事なことから、サイファアにも聞いて欲しい」

「……しかたない、俺は座り直した」

「その……前にいつていたこと、なんだけど」

「……自由国籍のことか」

「うん、僕ね嬉しかったんだ。あつちじゃ僕の居場所なんて無かったんだ。唯一の肉親であるお父さんとも殆ど喋ったこと無いし本妻の人にもいきなり会う度に叩かれるから……もうこの世界には僕の居場所なんて無いと思ってた、けど」

シャルロットが俺の手を握った

「サイファーに会って僕に居場所ができたんだ。言いなりだった僕を……人形みたいだった僕を助けてくれた……凄く嬉しかった、それに……」

「……風呂場には沈黙が流れた」

「キャアッ！」

「ッ！どうした！」

突然の悲鳴に俺は警戒したが

「す、水滴が落ちてきて……びっくりしただけ」

「……そうか」

あの沈黙の中だ、驚いてしまうのも仕方ない。また沈黙が続くなか、

湯の中で動く水音が聞こえた、俺は反射的に音の発生源を向くと

「み、見ちゃダメ！あっち向いてて！」

「す、すまん」

風呂場に響く声に若干驚きながらも俺は前を向いた

（また沈黙か・・・そろそろ撤退するか）

そう考えていた俺だが・・・予想外も出来事が起きた。シャルロットが俺の背中に抱きついてきた

「サイファーが、守ってくれるって・・・困ったら助けてくれるって・・・言ってくれたから、僕はここにいることを決めただ。・・・全部サイファーのおかげ」

抱きつきながら語るシャルロット

「それは違う」

シャルロットの体がビクツと震える

「それは全てお前の意志だ、俺のおかげでは無い。飼い鳥から飛び立ち渡り鳥に成るのを選んだのも、ここに残ると決心したのも己の意志だ。お前は立ち止まった頃のお前では無い、前へと歩みだしたお前だ」

俺もそうだ・・・軍が仲間を見殺し、口封じをした時に俺は他人を信じなくなつた。だが・・・傭兵になりラリーと飛び、傭兵達

と共に戦い……信じることを思い出し、前に進めたと思った

「……ありがとう、サイファー」

シャルロットが俺の背中に頬ずりしてきた……いかん理性が……コジマはまずい……違う！今何を考えた俺は！

「……シャルロット」

俺が名前で呼んだせいか……後ろでシャルロットがどんな表情をしているか分かる、恐らく、いい笑顔をしているだろ

「なに？サイファー？」

声の音質でも分かる、何時もより若干高い

「そろそろ離してくれ、上がるに上がれない」

俺がそう言つとシャルロットは慌てて離れた

「ご、ゴメンね！サイファー！僕、髪と体洗ってくるから！」

シャルロットが急いで湯から上がった

「ご、ごっち覗いちゃダメだよ」

「覗かん」

「……覗いてもいいのに」

最後の言葉は聞こえなかった、そつだ聞こえなかった

次の日、中々いい天気だ。こんな日はサイファーと一緒に飛び回りたいものだ

「み、みなさん、おはようございます」

ん？いつも元気な山田先生が元気じゃ無いな。今日見た占いが悪かったとかか？

「そんな理由じゃないですよ。ラリー君」

・・・なぜ心が読まれた、超能力者か

「今日は、ですね・・・みなさんに転校生を紹介します。転校生といますか・・・すでに紹介がすでに済んでるといいますか、ええと・・・」

説明がよく分からんが、どうやらまた転校生のようだな。クラスも騒がしくなってきた

「では入ってください」

「失礼します」

ん？この声は

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしく願います」

・・・スカート姿のシャルルだと。クラス全員が啞然とした表情をしてるぞ、俺は後ろを向くとサイファーもポーカーフェイスを崩して驚いてやがる

「どういうことだ、サイファー」

「わ、わからん・・・」

俺は前を向き疑問を感じていると

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。と言うことです・・・
・はあ、また寮の部屋割りを組み直す作業が始まります・・・」

確かに大変だな、だが問題はそこではない

「え？デュノア君って女・・・？」

「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったわけね！」

「って！サイファー君！同室だから知らないってことは・・・」

クラス全員がサイファーを見た

「・・・」

何時ものポーカークフェイスをして授業の用意をしていたが……冷や汗が流れているぞ

「ちよつと待つて！昨日つて確か、男子が大浴場使つてたわよね！」

確かにそだが……まさかサイファーに限つてそんな事は、そんな事考えてたらクラスのドアが蹴破られる勢いで吹っ飛んだ

「一夏っ！」

ファンの奴がIS展開して殴りこんできた

「まで！俺は関係ない！まったくもつて関係ない！」

「問答無用！死ねええっ！」

ファンのISの両肩にある衝撃砲が最大出力で放たれた。フルパワーだがそれを間一髪でサイファーがISを展開し救った、だがその衝撃で机が吹っ飛ばされ俺に向つてきた

（直線コースか）

俺はISを展開し防ごうと思つたが……俺の前に誰かが入り込んだ

「……………」

ラウラだ。『シユバルツェア・レーゲン』を展開し机をAICで防いでいた

「助かったゼラウラ。もう体はいいのか？」

「あの程度の怪我など直ぐ治る」

「なるほ・・・むぐっ！」

咄嗟の行動で反応できなかった俺はラウラに胸倉を掴まれ・・・キスされた

「!?!」

何が何だか分からない・・・ナニカサレタヨウダ・・・違う！何を考えているんだ俺は！

「お、お前は私の嫁にする！決定事項だ！異論は認めん！」

「・・・なぜだ」

頭が覚醒できてない俺は疑問を口にだすと

「日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般の習わしだと聞いた。故にお前は私の嫁にする！」

俺は日本人じゃねえ・・・っ！なんだこの殺気は！

「・・・なにをしているラウラ」

そこにいたのは・・・織斑先生だった

「フォルクを……いえ、ラリーに私の嫁宣言をしました！」

「ほお……私のクラスで異性不純交遊とはいいい度胸だな」

（何故だ……なぜラウラとフォルクがイチャつくだけでこんないらつく……理解できん！）

……ヤバイ、この状況はヤバイ

メーデー！メーデー！敵に囲まれた！援護を求む！

俺はプライベート・チャンネルでサイファーに救援を頼んだが

ガルム1よりガルム2へ、援護は不可能だ。自力で脱出せよ

返ってきたのは無慈悲な返答だった

やりすぎの和解（後書き）

アンケートは7日の23:59までです。どんどん感想でお待ちしています

学年別トーナメント 前編

あの騒動から翌日の朝、まだ部屋割りが済んでないシャルル……いやシャルロットはサイファーと同じ部屋で寝ていた

「……う……あ……」

その夜、シャルは悪夢でうなされていた。母親が死に、居場所を無くし、父親から物扱い、本妻からの暴行、罵倒、それから何時ものように悪夢を見ていた

「いや……いや……」

暗い闇の中で前も見えずに怯えている夢、夢の中まで聞こえる罵倒、その闇の中でサイファーがいた

「あ……」

夢の中のシャルがサイファーに手を伸ばすが……だが、その手を払い冷たい目線で見下し、その後闇の中へと消えていった

「いや……一人にしないで……助けて……サイ……
ファー……」

闇の中をさ迷いながら、泣きながらサイファーを探すシャル

「……お……や……」

サイファアの声が聞こえ、その声の方へと闇の中を走るシャル

「サイファア……サイファア……」

そうして目が覚めたシャルの前にはサイファアがいた

「おい、大丈夫か。うなされていたぞ」

無表情ながらも何処か心配した声をするサイファアに、シャルは泣きながら抱きついた……力いっぱい抱きついた

「お願い……サイファア……行かないで」

どうやらまだ夢と現実が理解できていないと判断したサイファアは優しくシャルを抱きしめた

「落ち着けシャルロット。約束したはずだ、守ると、助けると」

シャルの頭を優しく撫でながら、耳元で呟くと。徐々にシャルの意識が覚醒していった

「サイ……ファア」

意識が覚醒したシャルは思考回路が止まっていた。夢の中でサイファアに抱きついていていた思っていると本当に抱きついていたらだ

意識が回復したと分かったサイファアはシャルをベッドに座らせた

「大丈夫か」

キッチンでホットミルクを入れシャルに渡し目の前に座った

「うん・・・ありがとう」

まだ若干怯えた表情をしかった

「また、あの夢か」

実はサイファーもこれが初めてではなかった。相部屋になってから数回、このような出来事がおきていた、だがサイファーは戦闘疲労^{シエル・シヨ}症などの戦場で起こる心の病気を見たことがあるので、驚かずに対処できた

「・・・最近は見なくなっただけだね」

シャルが笑顔を作ろうとしていたが、それはとても寂しい笑顔だった

「・・・シャワーを浴びて来い、寝汗で気持ち悪いだろ」

「うん・・・そうするね」

シャルがシャワー室に行くと、サイファーは改めてデュノア社長と本妻に明確な怒りを表していた。1人の人間を・・・まだ10代の少女をあそこまで追い込むことに、本社にUGBL投下を本気で考えていると、シャルルがシャワー室からでてきた

「・・・ねえ、一緒に寝ていい？」

シャルが少しオドオドしながら聞くと

「……………好きにしろ」

サイファアはそう言いベッドに横になった。シャルが嬉しそうにサイファアのベッドの中に入り背中にくっついた

「ねえ……………2人きりの時は、レオンって呼んでいい?」

「……………」

サイファアは黙っていたが、その沈黙を了承だと感じたシャルは

「レオン……………レオン……………」

嬉しそうにサイファアの名前をよんでいた

(久しぶりだな、この名前で呼ばれるのも)

戦争で両親と妹を亡くし、軍に入って呼ばれていたが、尉官になってからはTACネームで呼ばれ、傭兵の時もずっとTACネームで呼ばれていたからだ

(レオンの匂いがする……………おフロでも感じたけど大きい背中、逞しい筋肉……………やだ、なんか変な気分になってきた)

サイファアは直ぐに寝たが、シャルは1人モンモンとした夜を過ごしていた

ラウラとの戦闘、VTシステムとの戦闘で疲れたいたラリーは大浴場から部屋に戻った後すぐに寝た

そして朝、寝ていたラリーは目を覚ますと・・・ベッドの中になにかいた。ラリーは舌打し迅速な行動を取った、傭兵である自分が鍵をかけた部屋に侵入してきた人物に気付かないとは、平和ボケしたか・・・と後悔しながらベッドの中にいる何かを拘束しようとしたが

「いきなり激しいやつだな」

いくら平和ボケしたと言っても傭兵として生きてきたラリーには体に染み付いた戦闘技能がある、それが防がれた。その相手は・・・
・・・ラウラだった、待機ISと眼帯をつけただけの姿で

ラリーはベッドのシーツをラウラに被せた

「何て格好をしているんだラウラ」

ラリーは苦笑いしながら言うと、ラウラは首をかしげた

「夫婦とは包み隠さぬものだと聞いたぞ」

「だれだ、お前にそんなこと教えたのは」

ラリーはラウラにこんなことを教えた奴の顔を見てみたいと考えていた

「日本でこういう起こし方が一般的だと聞いたぞ？」

「本当なのかそれは？」

「ああ、マンガに描いてあると行ってたぞ」

「……………」

ラリーは啞然としていた、マンガの内容を本気で信じるなんて正気の沙汰じゃないからだ

「しかし効果てきめんのようだ」

啞然としていたラリーはラウラを見ると

「目が覚めただろ？」

いい笑顔をしていた。その笑顔は歳相応の可愛い笑顔で、ラリーも笑いながら頭を撫でた

「ああ、そうだな」

頭を撫でられたラウラは目を細めて気持ちよさそうな顔をしていた

「にしても、まだ朝食には早いな」

ラリーが時計を見るとまだ6時、サイファーは既に起きているがラリーは30分後にいつも起きている

「服貸してやるから制服……」

するとラリーの部屋のドアが凄いい音をして開いた。ラリーとラウラが警戒してドアの方を見ると……鬼の顔をした織斑千冬がいた

「……何をしているラウラ」

「夫婦は共に寝ると聞いて、共に寝てました」

キリツとした表情のラウラは入ってきた千冬に言つと、裸で男の上に乗っている……その姿に青筋を浮かべた千冬は表情にラリーとラウラは冷や汗を流した

「フォルク……貴様、なぜ気付かなかった」

低く響くかのような声をする千冬に

「き、昨日はいろいろあつて疲れてたんだ！」

必死に言い訳をするラリーだが、千冬は拳を握った

「……教育的指導が必要みたいだな」

その後ラリーの部屋から悲鳴が聞こえた

6月最終週、アリーナでは学年別トーナメントが行なわれていた。1年の部では専用機持ちが多く、参加人数が一番少なかった

参加したのはサイファー・シャルロットペア、ラリー・ラウラペア、一夏、箒ペア、セシリア・鈴音ペアだけである

A・Bブロックに別れ、一回戦はサイファーチームVS一夏チームだった、アリーナの中央で対面していた

「では、試合開始！」

真耶の声がアリーナに響く、と同時にサイファーが一夏と箒の真ん中にガトリングライフル《ガルダ》を掃射

「うおっ！」

「くっ！」

一夏と箒がお互い反対方向に回避した

「シャルロット」

「まかせて」

サイファーが一夏を《ガルダ》で牽制しながら上空へと誘導させ、シャルロットもマシンガンで箒を一夏と反対側に追い込んでいく。2人の取った作戦は各個撃破、実力が無ければできない作戦である

「おおおっ！」

一夏がサイファーに《雪片式型》で斬りかかってくるが、それを見切り紙一重に避わした。元々音速の世界での戦闘で培ってきた反射神経と動体視力、それをハイパー・センサーで底上げしており、一夏の動きがスローモーションのように見えるのである

ブースターで体を捻って避けた勢いを使い、体を回転させ一夏の背後に回りこみ《ガルダ》を両手に構え掃射、毎分5,000発を誇る連射速度で発射される弾丸が一夏を襲う

「くそっ！」

絶対防御が発動しエネルギーシールドをガリガリ削られながらも退避、距離を取る一夏を追わずミサイルロックをした

「ガラム1、FOX2」

右肩のミサイルコンテナから《サイドワインダー》が発射され一夏目掛けて飛翔する。必死で回避行動をおこなうが、数十発のミサイルが一夏を逃すことなく追う

「くっ、ぬおおお！」

一夏は回避行動を止め、自分からミサイルに突っ込んだ。《雪片式型》でミサイルを斬り落とすが、全部斬れる筈が無く被弾した

「はあああっ！」

一方地上で戦っていたシャルと箒、中距離からマシンガンで撃つシャル目掛けて突撃し対IS用近接ブレードを振り上げた。箒の使用

しているIS打鉄は第2世代型であり、防御面で優れた性能で多少の無理がきくISである

「てやつ！」

シャルは振り下ろしてきたブレードをシールドでぶつかつた。シールドバツシュ、盾で殴り相手の体勢を崩す技法である。これをサイファーはシャルと対簿戦に備えて対策を練っている時にでたものだ。ブレードをシールドの体当たりをくらい、体勢を崩した筈、それを狙つたかのようにシャルはマシンガンを解除し、六二口径連装ショットガン《レイン・オブ・サタデイ》を両手に構えた。筈の顔が青ざめていくが無慈悲にも銃口から火が吹き、から空きとなつた腹部へと全弾当たりエネルギーシールドをこつそりと削つた

「はあああつ！」

ミサイルに被弾しながらも雪片式型を構えサイファーに突つ込む一夏、サイファーが銃を構えようとしたが、行動が遅く隙が出来ていた。一夏はその隙を狙い『瞬間加速』を使い一気に距離を詰めた。
・だが

「ぐはあつ！」

突つ込んできた一夏の腹にサイファーの膝が突き刺さり、体をくの字にしていた。サイファーは銃をわざと遅く構えようとして隙をつくり、一夏に『瞬間加速』を使わせた。一直線にしか動かないし、速さもサイファーから見れば慣れている速度でカウンターを叩き込まれ

「…………チエツクメイトだ」

その隙に五十口径ハンドガン《フツケバイン》を構え、マガジンがロングマガジン特殊弾倉になっており、一夏の腹でフルオートで発砲。毎分1／500発の弾が全弾一夏の腹に直撃、絶対防御が発生し

「あ…………」

『白式』のシールドエネルギーが0となり地表へと落ち停止した

「一夏っ！」

「よそ見はダメだよ」

何とか踏ん張って戦っていた筈が、一夏が機能停止になるのを見てシャルから目を逸らした。それにより隙ができ《レイン・オブ・サタデイ》をもろに喰らい

「試合終了。勝者…………レオン・クウェイド、シャルロット・デユノアチーム」

観客席から歓声が上がリシャルはサイファアの方に向った

「やったね、サイファア」

嬉しそうな笑顔をしているシャル

「…………いつもどおりだ」

いつものポーカフェイスだったサイファアだった

「続いて2回戦、ラリー・フォルク、ラウラ・ボーデヴィツヒチー
ム対セシリア・オルコット、凰 鈴音チームとの試合です」

名前が呼ばれアリーナの中央に向う4人、そして対峙する

「では、試合開始！」

真耶の声が響いた、と同時にT L Sを真横に振った

「キヤアツ！」

「のわっ！」

突然の攻撃に上空へと退避したセシリアと鈴音、だがそれは

「きゃああっ！」

ラウラのレールカノンが鈴音に直撃、地表へと落ちたが体勢は直つ
ていた

「鈴さんっ！」

突然の攻撃に砲撃、戦いの流れを完全に相手に握られていた

「よそ見は厳禁だぞ、セシリア」

目の前に接近していたラリーがセシリアに向けてガトリングライフ

ル《シュトリゴン》を掃射、毎分4、000発の連射速度で出る弾がセシリアのシールドエネルギーを削っていく

「くっっ！」

セシリアは近距離でミサイルを放った、だがラリーは発射される前に距離を取っておりミサイルを撃ち落とした

「いきなさいっ！」

セシリアはブルー・ティアーズを展開、4つの自立兵器がラリーに襲い掛かる

「これは……中々面倒だな」

口ではそう言っているものの、縦横無尽にレーザーを撃っているのに1発も被弾せず回避している

「そこっっ！」

ブルー・ティアーズを展開して移動しながら精密射撃、サイファールとラリーの訓練の賜物である

「いい動きだ、だが……まだ甘い」

展開し移動しながら精密射撃でも十分凄いのには、その動きはまだムラがあり遅く、ラリーから見れば格好の獲物だ

《シュトリゴン》をセシリアの方に向け発砲、回避行動をおこなうが、回避先を読まれ弾丸を当てられた

「キヤアッ！」

セシリアが怯み、そのせいでブルー・ティアーズの動きが止まった、それを見逃さず

「ガラム2、MPBMを使用する」

ラリーの左腰のミサイルコンテナな開きMPBMが発射、拡散し4機全てを巻き込み爆発した

「く、このっ！」

地上では鈴がラウラに双天牙月そつてんがげつで攻め込むが

「そこっ！」

プラズマ手刀、ワイヤーブレードを巧みに扱われ逆に攻め込まれていた

距離を取り『龍砲』を撃とうにもラウラAICで無効化され、白兵戦になっていた、そしてラウラが距離を取りレールカノンを放った

「当たるもんかっ！」

それを避わす鈴音……だが

「キヤアアッ！」

悲鳴が上がり鈴音が振り向くと……そこにはレールカノンが当

たりシールドエネルギーが0になって機能停止してるセシリアの姿があった

ラリーがプライベート・チャンネルを使いラウラに指示を出し《サイドワインダー》を発射、それを撃ち落としながら回避するセシリア。だがそのミサイルをラリー自信が操作し鈴音と直線になるように誘導、ラリーが合図を出しラウラがレールカノンを発砲、それは鈴音が避ける前提の作戦だったが、ラリーには成功する自信があった。故に作戦は見事成功した

「戦場でよそ見とは余裕だな」

鈴音がハッ！となり急いで振り向いたが、既にラウラはレールカノンを発砲、それを直撃した鈴音はシールドエネルギーを半分以上削られ

「きゃああつ！」

体勢を崩した、そこをラリーが

「ガラム2、TLSを使用する」

TLSを発射、それにより

「試合終了！勝者・・・ラリー・フォルク、ラウラ・ボーデヴィツヒチーム！」

観客席から歓声が上がった

「見事な作戦だったな、流石は私の嫁だ！」

ラウラが意気揚々としていた

「お前の射撃センスが良かったからだ」

ラリーもラウラの行動を褒めていた。そして、試合は決勝戦へと進む

学年別トーナメント 後編

2回戦が終わり、上級生の試合が行なわれ、2時間ほどの休憩があった。控え室にいるサイファー達、シャワーを浴びた後タオルを頭にかけてベンチに座りじっとしているサイファー

「・・・大丈夫？サイファー」

シャルは何時もの雰囲気ではなく、冷たい・・・まるで研ぎ澄まされたナイフの刃のように鋭い雰囲気のサイファーに戸惑いを感じていた

「・・・・・・」

サイファーはシャルの声に耳をかさず、ただひたすら作戦を考えていた・・・『片羽の妖精』、自分がしている中で最も頼れる相棒、最も恐ろしい相手、永遠の好敵手、お互いの癖を知り尽くした仲である、どんな作戦でも成功率は極めて低い

「・・・レオン」

人を近寄らせない雰囲気を出していたサイファーに、シャルは名前を呼び手を握った

「僕じゃ足で纏いかも知れない・・・けど一人で背負わないで、今の僕達はパートナーなんだよ」

考え込んでいたサイファーはシャルの方を向くと、真剣な表情で見つめていた・・・その表情の中に寂しいと思わせる雰囲気をだし

ながら

「……………」

サイファアは無言だったがシャルの頭を撫でた……………出来る限り優しく撫でた

「……………次の相手はラリーだ、これまで戦ってきた奴らとは次元がちがう」

先程の鋭い雰囲気は消えず……………ただ冷たい雰囲気は消えていた

「……………奴との戦闘では下手な小細工は無意味だ、正面からぶつかる」

サイファアはシャルの見て

「お前はポーデヴィツヒの足止めを任せる、頼んだぞ」

頼む、そう言ってくれたことを嬉しく思うシャル、自分を信頼してくれる……………それだけで力が湧き上がる気分になっていた

「うん、任せてレオン。ラウラは絶対に足止めするよ」

サイファアは僅かに……………ほんの僅かだが、笑ってシャルの頭を撫でた

別の控え室では重い空気が流れていた。シャワーを浴びた後ベンチに座り何時もの表情ではなく無表情をしているラリー、シャワーから戻りその姿を見て戸惑いを感じるラウラ

「ど、どうしたんだ」

ラリーの始めてみる表情に……人寄せ付けない、あの戦い以上の冷たく鋭い気迫をだしていた

「……なに、相手が相手だな」

ラウラの方を向かず声で返事した。だがラリーの体から発する気迫は消えなていなかっ、だがそれは仕方ない、相手は『円卓の鬼神』、最も信頼できる相棒、最も恐ろしい相手、永遠の好敵手ライバル、作戦を立てようにもベルカの数々ある作戦を潰してきた男

するとラウラがラリーの背中に抱きついた

「何を考え込んでいるかはしらん、だがお前は強い。私の嫁なのだから、そのお前と私が組めば誰にも負けん」

ラウラがそう言うと

「……ありがとな、ラウラ」

前に抱きしめていたラウラの手を握り、先程の気迫が無くなった

「……だがサイファーは、これまでの奴らとは別次元の強さだ。・
・俺も1回負けている」

ラウラは驚いた、自分が手も足も出なく、VTシステムでも一撃で倒したラリーに勝ったのだから

「練習や模擬戦じゃない、……己の全てを賭けて挑み、負けた」

ラリーはラウラの方を向き

「サイファーは俺がやる、あっちも同じ考えだろ。正面からぶつか
ることになる」

そう言うとラリーはラウラを撫でた

「お前はシャルロットの足止めを頼む。邪魔が入ると確実にやばい
からな」

撫でながら言うと、目を細め気持ちよさそうな顔をしていたラウラ
は頷いた

「任せろ、直ぐに倒しお前の援護をしてやる」

「それでは1年の部、レオン・クウェイド、シャルロット・デュノアチーム対ラリー・フォルク、ラウラ・ボーデヴィツヒチームの決勝戦を行います。両者中央へ」

アリーナの中央に対峙するチーム、観客席からは声援があがり、来賓には司令と副司令がいた

サイファーとラリーは司令達の姿を確認すると、二人は睨みあった。狭い空だがあの戦いの続き、そう2人は感じていた

「では、試合かいs・・・」

真耶が言い切る前に

ワンオフ・アビリティー
＜単一仕様能力『円卓の鬼神』発動＞

ワンオフ・アビリティー
＜単一仕様能力『片羽の妖精』発動＞

サイファーが蒼くなりラリーが紅くなった。2人は後ろに飛び

「FOX2」

サイファーの右肩、ラリーの右腰のミサイルハッチが開き数十発のミサイル《サイドワインダー》が飛び交う。ミサイル同士がぶつかり爆発、その爆発が他のミサイルに誘爆しアリーナ中央に爆煙が広がり二つの影が出てきた。シャルとラウラだ

2人はサイファー達の突然の行動、その速さに思考回路が追いつかず爆発音で目が覚めた2人は距離を取った。煙が晴れたがそこにいたのはシャルとラウラだけだった。

「あ、あれ！？2人はどこに」

「上だ」

管制室でも殆どの教員がサイファード達を見失い、その動きについて
つけたのは千冬だけだった。千冬の声と同時に空高くで爆発音、カ
メラを空に向けると蒼い光と紅い光が高速で動いていた

ガトリングライフル《ガルダ》を両手に構えたサイファードが変則
機動をしながら発砲するものの、それを全て避けしガトリングライ
フル《シュトリゴン》で反撃するラリー

「MPBMを使用する」

ラリーの左腰のミサイルハッチから放たれた3発のミサイル、サイ
ファードはアフターバーナー全開にし回避行動をとる。サイファードは
1発目の炸裂弾頭ミサイルを急降下しながら弧を描くように上に上
昇し爆発を回避、2発目のミサイルを左に弧を描き回避、3発目を
撃ち落とすと

「TLSを使用する」

その動きを狙ったかのようにTLSを発射、だがラリーの動きを回
避行動しながらも目視で確認していたサイファードは一直線に伸びて
くるレーザーをバーナーで体を90度傾け回避、その後もレーザー
を振り回すが上下左右に足のバーナーを瞬発で全開にして避けるク
イクブリストを使い接近し、武器を《ガルダ》から五十口径ハ
ンドガン《フツケバイン》に持ち帰る

だが接近されたラリーがT L Sの形が変わりT L Sソード《エクスカリバー》へと形を変えた

「はあっ！」

接近してきたサイファーに対し剣を振るうラリー……だが、何かに防がれた

「……それがお前が頼んだ奴か」

サイファーが持っていたものは刃渡り60?のナイフだった。それで《エクスカリバー》を受け止め、左手に持っていた《フツケバイン》を発砲、それを体を捻り回避し距離をとるラリー。サイファーは《フツケバイン》を解除し、両手にナイフ《エスパード》を逆手に構えた

「……確か、サイファーはあの『テンペスト』の教え子だったな」

来客席で見ていた司令がそう言うと

「ああ、前の世界で5指に入るナイフの達人に訓練してもらい最高成績だったのがサイファーだ」

「まさか直に見れるとな、『テンペスト』と呼ばれたボーマンの愛弟子を実力を」

司令と副司令が空を見上げた

「……『ウステイオの傭兵』展開」

空間から小型戦闘機が4編隊出てきた

ガラム1より全機へ、シャルロットの援護に行け。後は任せるぞ
イーゲルアイ

分かった、幸運を祈る。全機聞け、これよりシャルロット機を援
護せよ

クロウ、了解ウィルコ

コブラ、了解ウィルコ

ブリッツ、了解ウィルコ

グリード、了解ウィルコ

全機が地上で戦っているシャルの元に向った

「くっ!」

シャルは苦戦していた『ラビット・スイッチ高速切替』で武器を変えながら弾幕を張る
がAICに阻まれて決定打が一撃も無い、それに比べて

「そこだっ!」

レールカノンとワイヤーブレードでの攻撃により確実にエネルギー
シールドを削られていた、一本のワイヤーブレードがシャルの足に

巻きつき体勢が崩れ、隙ができた。それにラウラがレールカノンの照準を合わせた

「しまっ！」

「くらえ」

ラウラがレールカノンを撃とうとしたが、ハイパー・センサーに警告画面がでた

「何っ！」

気付いた時には既に遅くミサイルがラウラを襲った

「ぐあっ！」

ラウラの体勢が崩れ、レールカノンはシャルの真横を通り抜けた。そしてラウラに機銃を放つ緑色をしたグリペン3機が通りすぎた

あれが今回の獲物か、この前のデカ物より喰いがいがあるようだ。各機喰らいつくすぞ

イエス・BOSS

グリペン3機が行動し始めた

こちらイーグルアイ、聞こえるか？

突然の通信に驚いたシャル

は、はい。聞こえます

これよりそちらを援護する、なお貴機をオーリンジと呼ぶ

わ、分かりました

イーグルアイとシャルが通信しているとグリード隊が攻撃を仕掛けた、
だが

「無駄だっ！」

飛来するミサイルをAICで止めた

なんだあれは!?

……データ認識完了。あれはAICと呼ばれるバリアだ、攻撃を無効化されるぞ

なにか弱点は無いんですか!?

PJがそう叫ぶと

ある、どうやらあれには相当な集中力が必要みたいだ。AIC使用中は動きが止まり無防備になる、そこを狙え。コブラ、ブリッツ隊はオーリンジの援護、クロウ、グリード隊は波状攻撃を仕掛ける!

全機が作戦行動に移った

空中では激しい攻防がおこなわれていた。ラリーが エクスカリバー を振るうが、それをサイファアがナイフで捌き、2本のナイフによる素早い攻撃を避けたり受け止めたりするラリー

ラリーが距離を離し右腰から《サイドワインダー》がサイファア目掛けて飛翔した、サイファアは足をラリーの方に向けアフターバーナー全開にして回避行動をとる

それでも高速で飛翔してくるミサイルをナイフから展開が速い《フツケバイン》に持ち替え、フルオートで掃射。ミサイルを迎撃していると弾が切れホールドオープンした、だがサイファアのISにある銃器特化技能・自動装填オートリロード、文字道理に手動によるマガジン交換を自動で行なう。これによりタイムラグが少なくなり隙を無くすことができる

僅か0.5秒の装填速度リロードで交換しミサイルを迎撃……している途中でラリーが『瞬間加速イグニッション・ブースト』を使い接近、それをハイパー・センサーに警告画面がでた

「フレア射出」

サイファアの後ろ腰にあるハッチが開くとフレアが射出、サイファアを追っていたミサイルが全てフレアに方へと飛んでいき、《フツケバイン》からナイフへと持ち替えた

「お互い、腕は落ちてないようだな」

ラリーがそう言いながら《エクスカリバー》で斬りかかってくるのをナイフで捌く、一進一退の攻防をしていると……聞きなれた

爆発音が聞こえた、この音は前の世界でよく聞いた……

「……………なんなんですかあれは」

管制室には沈黙が流れていた、カメラが2人の動きを捉えきれずにいた。ワンオフ・アビリティ単一仕様能力を使っている2人は既に音速での戦闘をしていた、観客席、来賓席からは音と蒼と紅の僅かな色以外見えてなかった

（あれが奴等の本気か、私でも動きを捉えることが出来ない……………
・その中では恐らく激しい攻防が行なわれているだろう。この世界で奴等に勝てるのは大国単位の軍隊かそれ以上必要だな）

千冬も冷や汗を流していた

その様子を見ている一夏達はもはや声が出なかったと同時にかなり手加減されていたのに一撃すら食らわすことが出来なかったことに悔しさを感じていた

（なんだよ……………あの動き、全く見えねえ。手加減されるのも分かるな……………これじゃ本気なんか出されたら俺達が束になっても1分も持たないな）

一夏はそう思いながら自分の非力さに拳を握っていた

「くそっ!」

ラウラは焦っていた。すぐにシャルを倒しラリーの援護に向うはずがくそ、また止められた！

諦めるなPJ！動きが止まっている！攻撃のチャンスだ！

上空から現れた小型戦闘機、これらの動きはAIでは考えられないほど人間臭い動きと強さだった

ラリーにすぐ行くと約束したラウラは

「なめるなああっ！」

レールカノンを撃ちながら6本のワイヤーブレードが縦横無尽に襲いかかる

「くっ！」

シャルもその猛攻に回避で精一杯だった

ダメだ、攻撃が激しい過ぎる！

ちっ、厄介な

戦闘機部隊もその猛攻に攻めかねていたが、1機だけその猛攻に挑んでいた

おい！1機行ったぞ！どいつだ！

PJだ！あいつやりやがった！

F-16に乗るPJはワイヤーブレードを潜り抜けていた

大丈夫だ・・・このぐらい、サイファーと駆けた戦場に比べれば

PJもアヴァロンドラムに向うあの谷間を・・・あの激しい弾幕を抜けた実力があつた

「落ちろっ!」

砲弾をバレルロールで避けた

クロウ3、Fok・・・

PJがミサイルを撃とうとしたが

「甘い!」

ラウラがAICを使いPJの動きを止めた

しまった!

ラウラの攻撃がPJに迫る

よくやったクロウ3

ラウラの側面からミサイルが飛来した

「なっ!」

ミサイルを被弾したラウラ、そしてそこを飛行するグリード隊

いい動きだったぞ、クロウ3

体勢を崩したラウラのワイヤーブレードの動きが止まった、全機攻撃を開始した……だが

「そこ！」

2本のワイヤーブレードがシャルの腕に巻きついた

「もらったあああっ！」

動きを止められ、防御もできなく、エネルギーシールドも余りない状態で喰らえば……エネルギーは0になる

迫ってくる砲弾にシャルは……悲しい顔をしていた

(ごめんサイファー、せつかく任してくれたのに……信頼してくれたのに……)

それでも無慈悲に襲いかかる砲弾

おおおおおおおっ！

アフターバーナー全開で飛び、砲弾とシャルの間に入りこんだ

勝ってください！シャルロットさん！

砲弾がPJに当たり……爆発が起きた。煙の中から出てくるの

はF-16の残骸

PJエエエエツ！

くそつたれ！よくもPJを！

「……………」

シャルは何も言えなかった、自分のせいで彼を落としてしまった。後悔や何やらで頭の中がごちゃごちゃしている

しっかりし！オーリンジ！PJの行動を無駄にするな！

…………ツ！

イーグルアイの声で顔を表に上げたシャル、その顔は目に涙を溜めながらも強い眼差しをしていた

イーグルアイさん、僕に考えがあります

シャルがイーグルアイに考えを言うと

…………いいだろ。全機聞け、これよりオーリンジが突撃する道を切り開け

イーグルアイの指示で全機ラウラに突撃した

うおおおっ！PJの仇だ！クロウ1、FOX2！

コブラ1、FOX2

ブリッツ2、FOX2

グリード3、FOX2

全機が一斉にミサイルを放ち、ワイヤーブレードやプラズマ手刀で迎撃するも数が多く迎撃しきれなかった

「くっ！」

ラウラがAICを使いミサイルを止めた、そして

「これならAICは使えまい！」

「しまっ！」

シャルはラウラの懐に潜りこんでいた

「だが！第二世代の攻撃力では、このシュバルツェア・レーゲンを落とすことなど……」

そこまで言っただけでラウラは気付いた。単純な攻撃力だけなら第二世代型最強と謳われた装備があることに、それはシャルが常に盾の中に隠していた

「この距離なら、外さない」

盾の装甲がはじけ飛び、中から出てきたのは

六九口径パイルバンカー《灰色の鱗殻》グレー・スケール、通称

「『盾殺し（シールドピアス）』！」

ラウラの表情は焦りで満ちていた

「おおおおっ！」

シャルは声を上げた、拳を強く握り自分の失態、PJの思いを全て叩き込むように突き出す。『瞬間加速』^{イグニッション・ブースター}で接近して放つその威力は倍へと膨れ上がり、銃声が響いた

「ぐはっ！」

1発撃ち込まれ、続けて2、3、4、と撃ちこみ……ラウラのISは停止した

地上で戦闘が終わった頃、上空にいる2人は睨みあいをしていた。お互いのISは所々に傷がありエネルギーも残り僅かだった

「……………これで最後だな」

ラリーがアルバーの構えをし

「……………そうだな」

サイファーは右手に逆手で握ったナイフを前に突き出した

流れる静寂、観客席も来賓も管制室も地上の2人もサイファーとラ

リーを見ていた、動かない2人、流れる時間……そして鷲も
鳴き声が響いた

『イグニッション・ブースト瞬間加速』で一気に加速する2機、お互いの動きが交差する

「れ、レオン機、ラリー機、シールドエネルギー0。勝者！レオン・
クウエイド、シャルロット・デュノアチーム！」

ラリーの《エクスカリバー》の持ち手を左腕で防ぎ、右手の首筋に
ナイフを構えたサイファア、お互い『イグニッション・ブースト瞬間加速』を使ったせいで途
中でエネルギー切れになり公式には引き分け、だが

「……………また俺の負けか」

「……………」

《エクスカリバー》を仕舞い、空を見上げるラリー、無言で空を見
上げるサイファア。観客席、来賓席からは盛大な拍手をしていた

学年別トーナメント 後編（後書き）

PVが70,000突破、ユニークも10,000を突破しました。皆様ありがとうございます

さてアンケートでは1の戦闘機 VS ISになりました。まあエネルギーシールドがあっても、社長の雷電より柔らかいし削り切れは勝てるでしょう・・・てか普通にエネルギーを削れば戦闘機でも勝てると思うんですが、そこらへんはどうなんでしょうか？

あと、またアンケートで、感想にファルケンでるのってありましたので

1、ファルケン採用

2、ファルケン不採用

主はこのままF-15で乗り切ろうと考えてました。何故なら武装もラリーと被つちやいますし、余りのもチート性能過ぎて世界観崩壊が目前に・・・と考えてたからです。なによりF-15Cが戦闘機で1番好きだからです

アンケートは11日までです（アンケートを取るだけで関係ない場合があるかも知れませんがご了承ください、なるべくアンケートを採用するよ
うに頑張ります）

買い物

小説本文 トーナメントが終わり、7月初めの休日。サイファーとシャルは私服姿で街に向っていた

「今日はどうしたの、部屋に来て買い物に付き合ってくれって」

昨日の夜、サイファーがシャルの部屋に行きシャル言ったのが「明日、買い物に付き合ってくれ」だった。シャルはデートの誘いだと思いを真っ赤にしながら首を縦にふった

「ラリーが用事で行けないと言われてな、1人だと何だしなお前を誘った」

「そう・・・なんだ」

シャルは顔を赤らめ、心の中でラリーに感謝していた

「ハックション！」

「ん？どうした風邪か？」

ラリーはラウラと共に駅でモノレールを待っていた

「いや、誰かに噂されてただったりな」

「そうか」

モノレールが来るまで喋って楽しんでる2人であった

サイファー達のモノレールが駅についた

改札口に向かってしていると

「キャツ！」

休日であり駅には人が多く、誰かにぶつかつたシャルはこけそうになつたが……

「……大丈夫か」

サイファーに抱き寄せられていた。

（え？今……僕レオンの腕の中にいる！あ、あああどうしよう、僕汗臭く無いよね！大丈夫だよね！）

偶然とはいえサイファーに抱き寄せられたシャルはいい具合に混乱していた

（でも……レオンの体暖かいな……なんか安心できる）

混乱し過ぎて逆に冷静になつたシャルがサイファーの体温を感じてると

「……シャルロット」

名前を呼ばれ顔を上げると

「……行くぞ、ここは視線が痛い」

シャルが周りを見ると人だかりが出来ていた。それもそのはず、モデルが裸足で逃げ出すほどの整った顔をし、体系は身長が高く無駄な筋肉ではなく精錬された体をしてるサイファーに、華奢な体系ながらもスカートから覗く健康的な脚線美に、タンクトップの上から羽織るホワイト・ブラウスがシャルの魅力を底上げしていた

そんな美男美女が抱き合っていれば嫌でも目立つ

「あ、あわわわわ！」

それに気付いたシャルはパニックになっていた

「……ちっ！」

サイファーはシャルの手を握り、そのまま急いでシヨッピングモールへと向った

そのまま手を繋ぎ歩いていると黙々と歩いてるように見えるが

クロウ3よりガルム1へ、ここはまず2人だけの呼び名を考えるべきです！

プライベート・チャンネルでサイファーと傭兵共と通信していた

名前だけで十分ではないか？

こちらブリッツ2、女心が分からない人ね。ちょっとした特別な関係は、女心をくすぐるものよ

実はブリッツ2は傭兵では珍しい夫婦で傭兵をしていた。ちなみに夫はブリッツ1

こちらイーグルアイ、まずは行動で試してみる

ガラム1、了解

サイファーは立ち止まりシャルの方を向いた

「どうしたのレオン？」

シャルが首を傾げていると

「……………何か呼び名でも考えるか？」

「えーいきなりどうしたの？」

シャルは驚きながらも訊ねると

「……………1度は背中を任した仲だからな」

サイファーが少し考えている顔をしていると

「……………シャルはどうだ？」

「シャル……………うん！いいよ！凄くいいよ！…」

「そうか、それはよかった」

サイファアはそう口で言ったが

・・・何故あそこまで喜んでるんだ

・・・分かん

サイファアと共に頭を悩ませるのは甘いものが好物の戦闘狂、グリード1だ。彼も戦闘しか興味が無く、女心など分かる筈が無かった

・・・ブリッツ1からガルム1へ、聞く相手を間違ってるぞ

などと通信している最中

(シャル・・・シャルか)。これって、ちょっとは特別な存在ってことだよな)

頭の中がお花畑なシャルだった。そしてショッピングモールを歩いているとサイファアはある店に目があった

「・・・シャル」

「なに？」

サイファアに声をかけられ、振り向いた

「寄りたい店がある、よっていいか？」

「うん、いいよ」

サイファーが向った店は……アクセサリーショップだった

「いつらしゃいませ。何をお探しでしょうか？」

「シルバーブレスレットを頼む。俺ではなく女性用を」

店の店員にサイファーが商品を頼み、他の商品を見てると

「いろいろあるな」「」

だれかと声が綺麗にハモリ

「ん？」「」

声がハモる2人がお互いに見ると

「サイファー？」

「ラリー？」

そこにいたのはサイファーとラリーだった

「お前、確か用事があると言ってたか？」

サイファーはラリーを誘った時に用事があると断れたのだ

「ああ、今日はラウラと買い物に」「」

「……………目的は同じだったか」

サイファアは納得していたが

「どう言うことだ？」

「お前はラウラと買い物に来た、俺もシャルと買い物に来た、そう言うことだ」

ラリーが納得していると

「お客様、これはいかがでしょうか？」

先程の店員がサイファアに商品を見せた。シンプルなシルバーブレスレットだ、銀色のブレスレットが店の光で反射し綺麗に輝いていた

「……………値段は」

「お値段は此方になります」

その値段は高校生では手が出ない程だが、サイファアの懐は国の援助と国連の給金で潤っていた

「それを頼む、ラッピングもしてくれ」

「かしこまりました」

数分後、清算し終えたサイファアは商品を受け取り店をでた。そこにはシャルとラウラが喋っていた

「またせた」

サイファーが声をかけた

「お帰り、いいの見つかった？」

「ああ」

サイファー達4人は水着売り場に向っていると

「ん？サイファー、あれはイチカとファンじゃないか？」

サイファーはラリーの言った方を見ると、一夏に右腕に抱きつく、赤髪の少女と左腕に抱きつく鈴音、その後ろに荷物持ちをしている赤髪の少年がいた

「よお、イチカ」

ラリーが声をかけると

「ラリー？お前等も面白い物か？」

「そんなとこだ。にしても羨ましいね、両手に花とは」

笑いながら言うで一夏はげっそりとした顔になった

「一夏、こいつらは？」

赤髪の少年がそう言うと

「ああ、俺のダチで同じクラスの」

「ラリー・フォルクだ。仲間からはピクシーと呼ばれてた、ラリーでもピクシーでも好きな方呼んでくれ」

「……ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

ラリー達が自己紹介し

「レオン・クウェイド。サイファーと呼んでくれ」

「シャルロット・デュノアです。よろしくね」

サイファー達も自己紹介した

「俺は五反田^{ごたんだ} 弾。一夏とは中学からのダチだ、んでこっちが」

「五反田 蘭です」

弾は両手が塞がれていてアクションを起せなかったが、蘭は丁寧に頭を下げた

「てか一夏、お前と同じってことは……もしかして」

「ああ、この2人もISを動かせるんだ。しかも滅茶苦茶強くて、俺じゃ5秒と持たない」

一夏の言葉に五反田兄妹は驚きを隠せなかった

「お、男なのに……ですか」

「うん、サイファーとシャルロットは今年の学年別トーナメント優勝者だよ」

兄妹は啞然としていた、一夏から聞いた話で専用機持ちが5人いるのに

「ふ、2人は専用機持ちですか？」

「ああ、そういえば、2人はどこの代表候補生なんだ？」

まだ何処か話してもらってない一夏が訊ねると

「国連所属だ」

シャル以外、全員驚いた

一夏達とは別れ、水着売り場に到着した4人は水着を選んでいった。サイファーはグレーの水着、ラリーは赤い水着を購入した。水着売り場から出て待ち合わせ場所に向うとシャルがいた

「終わったのか？」

「あ、ううん、サイファーに選んで欲しいなあって思ってた」

「分かった」

サイファー達は女性用水着売り場に向った。そこには男性用水着の倍以上の数、形があり、少し驚いてたサイファーとラリー。ラリーはラウラを探しに行き、サイファーは水着売り場に足を踏み入れたシャルについて行つてると

「そこのあなた」

見知らずの女性に声をかけられたサイファーは振り向くと

「そこの水着、かて……ひっ！」

何を言うか分かったサイファーは少々気迫を出して睨むと、短い悲鳴を上げ女性は何処かへ行った

「何だったのかな？」

シャルは首をかしげていた

「……気にするな」

その後サイファーが水着を選び、シャルがそれを受け取り試着室に入えい、その前で待っていると

「あれ？サイファー君？」

知っている声が聞こえ顔を向けると、真耶、千冬、ラリーがいた

「何してるんだクウエイド」

「シャルロットと水着を買いに」

真耶はショックを受けた顔をしていた

「なら、山田先生の水着を選んできてやれ。デュノアからは私が言っておく」

真耶は驚き、サイファーを考えていると

「あ、あの！お願いしても……いいですか？」

顔を赤くし、モジモジしながら言うと

「……シャルロットに言ってからで」

シャルに声をかけようとしたが

「ああ、いいか行ってこい。私が言っ……」

千冬がさっさと行くように言ったが

「レオン、どうかな……にあっ……」

顔を赤らめ照れた様子だったシャルは、顔を赤くしサイファーの目の前にいる真耶を見てマツハで不機嫌になった

「……何してるの」

不機嫌な表情に不機嫌な声なシャルだが

「デュノア、話がある」

千冬が目で「早く行け！」と睨んでるので真耶と共に水着選びに行くことしたサイファーだが

「シャル、その水着似合っているぞ」

そう言い残し、選びに行った。似合っているとわれ、少々頭の中がお花畑になっているシャルであった

「こんなのですか？」

水着を取り、サイファーに見せる真耶

「……もう少しシンプルな、……これはどうだ？」

周りを見渡すと落ち着いた色をした水着を見せた

「……ならそれを」

サイファーが見せたのは落ち着いた色をしているとはいえ、ビギンタイプの水着だ。それに恥ずかしいそうに受け取り試着室にはいる真耶……その頃

何故ですか！何故サイファーとピクシーばかり！

泣くな、PJ。俺も嫉妬で人が殺せたら・・・

イーグルアイよりクロウ1、クロウ3へ。落ち着け、あのサイフアーに女なんだぞ、基地では機械マシンと言われたサイフアーにだ

こちらブリッツ2、暖かく見守るべきよ

こちらコブラ1、だが両手に花な2人が羨ましいがな

傭兵共がそんなこと言っていたが

グリード2、そんなに羨ましいものなのか？

グリード1、自分に聞かれましたも・・・自分も空を飛んでる方が好きなので

戦闘狂のグリード1、空が好きで戦闘機乗りになり他に興味がないグリード2・・・そして

・・・

無口で必要最低限しか喋らないグリード3、だが傭兵の中でガルムの次に撃墜数が多い凄腕部隊なのだ

試着室のカーテンが開くと、そこにはビギニ姿で顔を赤くしている真耶の姿があった

「どっ・・・ですか」

真耶が恥ずかしながら聞くと

「・・・・・・・・問題ない。似合っている」

純粹にサイファーはそう思った。真耶の白い肌に水着がいい具合にあっている

「なら、これにします」

真耶が笑顔でカーテンを閉め、着替えていると

「・・・・・・・・レオン」

紙袋を持って不機嫌そうな顔をしていたシャルがいた

「買い終わったから、行こ」

シャルがサイファーの腕に自分の腕を組むと

「じゃあサイファー君、レジに・・・・・・・・」

腕を組んでるサイファーとシャルを見てムツとした顔をする真耶

「サイファー君、レジに行きましょう！」

真耶もサイファーの腕に抱きついた

「先生！これから・・・・・・・・ええつと・・・・・・・・食事に行くんです！」

シャルもサイファーの腕に抱きついた。言い合いに挟まれているサ

イファーは溜息をついていた

真耶とサイファーが水着を選んでいるころ

「さて・・・フォルク、行くぞ」

「どこへ？」

水着を選んでいる真耶達を見ていた千冬が言いだすと、ラリーは不思議そうにしていた

「察しが悪いな。此処でやる事は1つだろ」

そう言い千冬は水着を探し始めた、それに納得したラリーも探している

「おいフォルク、どっちがいいと思う？」

ラリーが振り向くと、千冬が持っていた2つの水着

片方はスポーティーながらもメッシュ状にクロスした部分がセクシーさを魅せる黒いビギニ

もう片方は無駄を無くした機能性重視の白いビギニ

「・・・・・・・・」

ラリーは2つの水着と千冬を見ながら悩んでいると

「黒の方だな。そっちの方が似合うと俺はみた」

ラリーは悩んだ末に黒の方を選んだ

「そうか・・・黒の方が」

千冬は白の水着を元の場所に直すと

「そういえばお前はラウラと共に来てたので無いのか？」

「ああ、今頃水着選びに四苦八苦してると思うぜ」

千冬は試着室に入った

「しかし、ラウラがお前に心許すとはな」

教室での出来事、その後何回かぶつかり・・・決定的だったのがVTシステムでの事だ

「まあ、キスには流石に驚いたがな」

試着室の外で会話をしているラリー

「それに・・・可愛いんだぜ、ラウラの笑顔は。あんな顔をされたら・・・守るものが増えちまう」

ラリーの声が若干変わったのに気付いた千冬は、前の世界の事を考えてると察し何も言えなかった

ラリーと別れた水着を探していたラウラだが、数が多くどれがいいのか分からないのでラリーを探していたら

千冬とラリーと一緒に水着を選んでいる姿を見て……胸がチクリと痛んだ

(何故だ……なぜ教官とラリーと一緒にいるだけで……笑ってるだけで、胸が痛むんだ)

胸の痛みの意味が分からないラウラが戸惑っていると

「可愛いんだぜ、ラウラの笑顔は。あんな顔をされたら……守るものが増えちまう」

ラリーの声がラウラまで届き、その言葉に冷静沈着のラウラが取り乱した

(か、か、可愛い？……私の笑顔が可愛い……可愛い……)

そして胸の痛みが突然と消え……胸の中が暖かくなった

(何なんだこの気持ちは……でも嫌な感じじゃない)

ラウラがポケットから携帯を取り出し、番号を何回か間違えながらも電話をかけた

同時刻、ドイツ国内軍施設。そこでは現在、IS配備特殊部隊『シユバルツエ・ハーゼ』……通称『黒ウサギ隊』。ラウラと同じく隊員全員がIS用補佐ナノマシン移植である。本来、眼帯は機^リ能制御装置^{ミッ}だったが、現在では肉眼の保護と部隊の誇りとして眼帯を付けていた

「パターンBからCへと移行、目標への到達時間、早期発見後、戦闘行動への時間を計れ」

そこで指示を出していたのは副隊長であるクラリツサ・ハルフォー^スである。年齢はまだ若いものの部隊の中では最高齢であり、十代が多い隊員達からは厳しくも面倒見がいい『頼れるお姉様』だった
その彼女の携帯が鳴り、通話ボタンを押した

「私だ、クラリツサ」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ隊長、何か問題が起きたのですか？」

「う、うむ、緊急事態だ」

基地施設にいた部隊の顔に緊張が走る

「……部隊を向わせますか？」

「い、いや。実は例のラリー・フォルクのことなんだが」

部隊の緊張が更に高まった

「隊長との戦闘で勝ち、隊長が好意を寄せている彼ですか？」

「そうだ、お前の言う所の……いわゆる私の嫁だ」

「それで一体どうされたのですか？」

ラウラは何故か気恥ずかしいと思いつつも

「その、だな……わ、わ、私は、可愛い……らしい、ぞ」

基地に流れるラウラの言葉に部隊の思考が一瞬止まった

「……それでなんとされたのですか？」

クラリッサが聞くと

「実は「可愛いんだぜ、ラウラの笑顔は。あんな顔をされたら……守るものが増えちまう」と言われたのだ。ど、ど、どうしたらいい、クラリッサ。この場合はどうすべきなのだ？」

「そうでうね……まず状況把握を。直接言われたのですか？」

「い、いや、向こうは私に気付いてない様子だった」

するとクラリツサの口元が笑った

「……最高ですね」

基地内でも部隊の顔は笑顔だった

「そ、そうなのか？」

「はい、本人のいない場所で褒められる言葉にウソはありません」

「そ、そうか！」

動揺していたラウラの声が明るい声に変わった。そも通話を聞いていた部隊も盛り上がっていた

実はラウラは部隊での人間関係に多大な問題を抱えていたが、先月のVT事件の直後に「好きな男が出来た」という相談をクラリツサに持ちかけたときから全ての問題が解消した

その時の様子は凄まじかった。しかもクラリツサの要望でラウラはトーナメントでのサイファーとラリーの一騎討ちの姿を撮った写真を見せており、ラリーとサイファーの凛々しい姿を見て何人かの女性が恋に落ちたとか何とか

「そ、それでだな、いま水着売り場なのだが」

「ほう、水着！そういえば来週は臨海学校でしたね。隊長はどのよ
うな水着を？」

「学園指定もの水着だが」

ラウラの言葉にクラリツサは驚きの表情をした

「何をバカなことを！」

いきなりの大声で驚くラウラ、その後クラリツサの熱弁を真剣に聞いていたラウラが

「な、ならどうすればいい？」

「フツ、私に秘策があります」

目を光らせながらも秘策を教えたクラリツサは

「と、所で隊長。サイファー殿は今何をしているかお分かりになりますか？」

クラリツサは声が少し高くなり訊ねると

「ああ、奴なら確か……女性に腕を抱きつかれてるな」

「なっ！」

クラリツサは驚いた。実は写真で見たサイファーの凛々しい姿に目惚れしていたのだ

「だが……なにやら言い合いをしているな、本人は何やら疲れた顔をしているが」

「……そうですね、ありがとうございます」

そう言い携帯を切り、どうやってサイファーに会いに行くか考え込んだクラリッサであった

買い物（後書き）

中々難産でした

作業用BGMであるMGS神曲メドレーをニコ動で見て邪魔されながらも涙を流し書いてました。MGSの曲は神すぎる（キリッ

アンケートではファルケン採用が多かったので頑張ってみます。次回は臨海学校ですが・・・ファルケンも出しますから、銀の福音シルバリオ・ゴスヘルじゃ
2人相手では力不足ですから、そろそろ登場させましようかな・・・
・2人でもてこずるエースを・・・おや？あそこに赤いツバメ
が

海 前編

「海っ！見えたあっ！」

サイファー達の買い物から数日後、トンネルを抜けたバスの中でク
ラスの女子達が声を上げる

臨海学校初日、天候は見事な快晴。太陽の光を反射する海が美しく、
心地よい潮風にゆつくりと揺らんでいた

「……………」

その海をただ黙って見つめるサイファー、その顔はどこか懐かしい
と感じている顔だった

「どうしたの？」

隣の席に座っていたシャルがサイファーの横顔を見て疑問に感じて
いると

「海か…………あの作戦を思い出すな」

前の席に座っていたラリーが席から身を乗り出しサイファーの方を
向いていた

「…………ケストレルから飛んでみたかったものだ」

2人が海を見て思い出していたのはある作戦…………それは

コスナー作戦

こちらケストレル船長ウィーカーだ。全乗組員聞け、ただし手はとめるな。先発攻撃隊が切り開いた血路を進む、なんとしても突破するぞ！全艦！全速前進！

空母ケストレル、護衛艦が運河を駆け抜けていく。それを艦載機が援護する中で陸上機の姿があった、それは青い翼のイーグルと片羽が赤いイーグルだ

ウステイオの傭兵が混ざっているらしいな

腕のいい連中がいると聞いたぜ

ウステイオの2機か、片羽の赤いイーグル……あれだ

円卓から戻った2機か。手並みを拝見しよう

そして空戦の火蓋が切って落とされた。空に飛交う無数の戦闘機、そして海へと落ちてゆく機体、その中で凄まじい戦果を上げる2機

ガラム1、FOX2

ミサイルが敵機を捕らえ……命中、機体が爆散した

こっちも喰った。だが敵が多いな

ああ、無駄玉を撃つ余裕もない

それでも空母に近づくと敵機を破壊していガルム隊、そして味方艦隊は運河の半分まで来た

艦隊はやつと運河の半分まで進んでいる！ガルム隊、引き続き頼んだぞ

イーグルアイからの通信、海では全速で進んでいるのが分かる、だが

艦隊は何をノロノロと！ガルム1、冷静に敵を落としていこう

空からではゆっくり動いてる風にしか見えなく、空の戦士達は焦っていた

無傷でケストレルに戻りたかったが、ベイルアウトする！

くそ！被弾した。すまないが離脱する

味方機が一機、また一機と消えていき、敵の攻撃で海に水柱の数が増えていった

ただの水柱に怯えるな！被弾したわけではない！

怯えず前に出せ！空の戦士達の善戦を無駄にするな！

今だ敵艦隊の損失はゼロ、この事態にはベルカ空軍も焦りはじめる

護衛機が厄介だ！艦隊に近づけない

無理に突っ込むな！対空砲の的になるぞ！

攻撃の手を緩めるな！奴らを退けるまで続けるな！

あの2機が邪魔だ、艦隊に攻撃できない

空の縦横無尽に飛交う2機のF-15C、その中を突起する1機の姿があった

「艦長！戦闘機が接近してきます！」

「対空砲急げ！なんとしても撃ち落せ！」

空母ケストレルがフアランク스로撃ち落とそうとしたが……ケストレルに警報が響く

「敵機、レーダー発信！回避運動、間に合いません！」

「くそっ！総員衝撃に備えろ！」

ケストレル乗組員が近くの物につかまり

貰った！

ベルカ機がミサイルを撃とうとした……だが、それは発射されなかった。総員が見ていたのは、ベルカ機がミサイルで爆散し、そこを通りすぎて行った青い翼のイーグルだった

「て、敵機撃墜！あれはウステイオの傭兵、ガルム隊です」

「あれが……」

艦長が空に舞い戻る青いイーグルを見ていた……そして

当該空域の敵性反応、沈黙

空にはベルカ機が存在せず味方機が空を飛んでいた

こちら空母ケストレル艦長ウィーカーだ。我が艦隊は運河の通過に成功した

無線での報告に味方が声を上げて喜んでいた

目立った損傷もない、完璧だ。航空部隊の諸君、支援を感謝するぞ！

そしてガルム隊はケストレルを見て笑っていた

「ねえ！サイファー！」

ハッ！となり、シャルの方を見ると可愛らしく頬を膨らませていた

「何回も呼んでたのに」

「……すまん」

サイファーが怒っているシャルに謝っていると

「お前も相変わらずだな、そんな好きだったのか？」

シャルが好きと言う単語に反応した

「……ああ、あれは美しいものだった。また（ケストレルに）
会いたいな」

珍しく褒めるサイファーの姿にシャルは

「……ねえ、サイファー」

今のシャルは先程の怒った顔ではなく、表情は笑っているが雰囲気
は恐ろしく禍々しいものだった

「それって……どんな人？」

「人ではない」

え？つと不思議そうな顔をしていたが

「空母だ」

余計に頭を混乱させていたシャル

「こいつは根っから兵器好きでな、その時みた空母が気に入ったの
さ」

ラリーの説明を聞き勘違いした恥ずかしさと同時にホッとしていた

「それにしても……そのブレスレットはサイファーからのプレゼントか？」

「えっ!？」

ラリーがニヤニヤしながら言うとシャルは顔を赤くし驚いていた

ほどなくしてバスは目的地である旅館に到着、バス4台から生徒が下り整列した

「それでは、ここが今日から3日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「」「」よろしくおねがいします」「」

千冬の注意の後に生徒が挨拶をする

「はい、こちらこそ。今年の1年生も元気があってよろしいですね」
着物姿の女将が丁寧にお辞儀をした。この旅館は毎年お世話になっているらしく慣れた様子だった

「あら、こちらが噂の？」

女将がサイファー達の方を向いた

「ええ、まあ。今年はず人男子がいるせいで浴場分けが難しくなっています申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。それに3人とも、いい男の子じゃありませんか。特に其方の2人は大人びた雰囲気をかんじます」

女将はサイファーとラリーを見てそう言う

「その2人は大丈夫なんですが……」

千冬は一夏をみた

「そうですか？しっかりとした感じをうけますよ」

「そう感じるだけでせ。ほら、挨拶しろ馬鹿者」

千冬が一夏の頭を押さえつけた

「お、織斑一夏です。よろしくお願いします」

一夏の後につき

「ラリー・フォルクだ。3日間世話になるぜ」

「レオン・クウェイド。3日間世話になります」

2人が挨拶すると、ラリーの頭が叩かれた

「敬語を使わんか敬語を」

千冬が怒っていると

「うふふ、仲がよろしいところで。私は清洲景子です」

女将は丁寧に頭を下げた

「出来ない生徒でご迷惑おかけします」

千冬も頭を下げラリーと一夏も千冬に頭を押さえつけられていた

「それじゃあ皆さん、お部屋の方にどうぞ」

女将に色々と説明を受けながら生徒達は返事をする、すぐさま旅館の中へと向う

「ね、ね、れおっち」

サイファーを可笑しげなあだ名で呼び、異様に遅い移動速度でサイファー達に向ってきたのは、のほほんさん（仮）だった

「れおっち」達の部屋どこ？一覽に書いてなかった。遊びに行くから教えて」

その言葉で周りにいた女子が聞き耳を立てる

「分からん、まだ知らされてない。あと俺のことはサイファーよ・・・」

「おい、男子ども」

男子3人が振り向くと千冬がいた

「お前達の部屋はこっちだ。ついてこい」

千冬からの呼び出しに男子3名は後に着いて行くと

「ここだ」

その部屋には『教員室』と書かれた紙が張ってあった

「織斑と私は同室にした。個室も考えただが、絶対に就寝時間を無視した女子が押しかけてくるだろう」

それに苦笑いする一夏だったが

「それならサイファーとラリーは？」

「こいつらは2人部屋だ。特にサイファーは時間にはきっちりしているからな、女子が来ても大丈夫だろう」

一夏は自分とサイファー達の扱いの違いに涙を流したとか何とか。

一夏達と別れ部屋に付き中に入ると

「おお、いい部屋じゃないか」

ラリーの言う通り広々とした間取り、外壁の壁が一面窓になっていて、そこから見える風景も海が地平線まで見渡せるほど素晴らしく、東向きの部屋で日の出も綺麗に見えるものであった

「海を見渡せるとは……いい場所だな」

サイファーも口元を綻ばせていた。部屋に荷物を置くと

「じゃあ行くか」

「そうだな、今日ぐらいは楽しむか」

サイファーも珍しく乗り気で荷物から海パンやゴーグルやらを取り出し、別の鞆にいれた。ラリーも準備が終るとサイファーと共に海に向った

海 前編（後書き）

東北にいる友人に連絡やら安否を確かめてまして更新がおくれました

無事を確認できたのですが、避難所での苦しい生活が続いており助けられない自分が歯がゆい気持ちになってました。

お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りします

こんな時こそ諦めずに希望を持って欲しいものです。と言うわけでアンケします

ウォードック隊改めラーズグリーンズにスノー大尉を出すかどうかです。（ブレイズ、ナガセ、チョッパー、グリムは出します）

1、出す

2、チョッパーいるからイラネ

16日の午後6時が締め切りです。どんどん感想でお待ちしてます

海 後編

サイファー達は着替える為に別館に向う途中に一夏と箒に会い、共に向っていると……かなり珍奇な光景を目の当たりにしていた地面から……ウサギ耳が生えているのだ、しかも丁寧に「引張ってください」と書かれた張り紙までしてある

「なんなんだ、このシュールな光景は……」

ラリーが冷や汗を流しながら苦笑いした……だが

「なあ、これって……」

「知らん、私に訊くな、関係ない」

なにやら知っているような言葉を発している一夏と箒

「えーと……じゃあ、抜くぞ」

「好きにしろ、私には関係ない」

そう言い別館の方へと歩き去っていく箒。その背中を苦笑いしながら見ている一夏だった。そして一夏は道に生えているウサミミを思いつきり引つ張った

「のわっ!?!」

力いっぱい引つ張った一夏は後ろにへと盛大にすっころんだ。その

手に持っているのはウサミミのカチューシャだけであつた

「何していますの？」

旅館から歩いてきたセシリアが一夏のすっこけた姿を見て声をかけた

「セシリアか。いや、今このウサミミを・・・あ」

今の一夏の状態は仰向けで倒れており、それによりセシリアのスカートの中が丸見えの状態だつた。その姿を見ていたラリーは笑つており、サイファーは何時もの無表情だつた

「い、一夏さん!？」

その視線に気付いたセシリアは後ずさりスカートを押さえた

「す、すまん!その、だな、ウサミミが生えていて、それで・・・」

「は、はい?」

セシリアは素っ頓狂な声をだした、その顔は恥ずかしいや怒りなので顔が真っ赤であつた

「いや、東さんが・・・」

一夏が喋つてる時にサイファーとラリーは上空を見上げていた、2人が見ていたのはこちらに接近してくる物影である。普通の人間えは見えない距離でるが2人は戦闘機パイロットであり遙か遠くの機体を目視できなくてはならないためかなり目がいいのだ

そして……地面に激突し砂煙が舞った。視界が晴れてくるとそこには……

「に、にんじん……？」

一夏とセシリアがそう漏らした。それも仕方ない、上空からイラストチックなデフォルメのにんじんが落ちてきたのだから

「あつはつはつ！引っかかったね、いつくん！」

にんじんが真ん中から真つ二つに割れ、笑い声と登場したのは……
……中々洒落た格好をした女性だった……が

「……動くな」

低い……敵意を感じる声に全員が声の主を見ると、そこには腕のみをIS展開し五十口径ハンドガン《フツケバイン》を構えたサイファイとラリーがいた。ラリーはサイファイの《フツケバイン》を^{アンロック}使用許諾されており、それを構えていた

「ふ〜ん、君達がちーちゃんと言ってた……」

女性は明らかに警戒し拳銃を構えているサイファイ達を笑って見ており怯えた様子など皆無だった。そして女性がサイファイ達に近づこうとしたが……女性の横を何かが通り過ぎ、木に大穴が開いていた

「今のは警告だ、次は当てる」

《フツケバイン》をサイレンサーモードにしているサイファイとラ

リリーは警戒心をさらに上げ照準を眉間に合わせていると

「ちょ、ちよつとまで！二人共！」

一夏が女性とサイファー達の間に一夏が割り込んだ

「この人は俺の知り合いで幕の姉の篠ノ之 束さんだ！」

一夏の紹介に2人は僅かに眉を動かした、千冬から聞いた話ではI
Sコアの創造者であり化け物じみた天才であると聞いていた

2人は警戒していたが・・・銃を下ろした

「すまない。突然の登場だ、こちらとしても警戒しないわけにもい
かない」

サイファーが謝罪していると

「気にしなくていいよ。それよりも・・・」

束はラリーを見ると笑顔ではあるが目付きが全く違う、何か探りを入
れているような目付きであった

「君がラリー・ファオルクかな？」

「ああ、そうだが」

束の質問に答えるラリーは何時もの表情であるが警戒心は消えてい
なかった

「ふーん、あのちーちゃんがね……君みたいなのどこがいいのか分からないな」

いきなりの言われようにラリーは苦笑いをしていた

「で、君がレオン・クウエイドかな？」

「……」

サイファーは沈黙していたが、それを了承のように喋り出す束

「……うん、君は信用できそうだね」

と笑い出す束、それを一応警戒しながらポーカーフェイスをするサイファー、その姿に啞然としている一夏がいた

「ん？どうしたのいつくん、そんな顔して」

一夏の表情を見た束が訊ねると

「いえ……俺や千冬姉え、筈以外でそんなに話しているのが以外で……」

そう、この天才・篠ノ之 束は自分の研究と一夏、千冬、筈、後は僅かにだが自分の両親以外は全くと言っていいほど関心がなく見向きもしない、コミュニケーションが限定しすぎている人物である

その幼少の頃から見てきた一夏はまったくの赤の他人で初対面であるサイファー達と普通に喋っている光景は異様といっても過言ではなかった

「それは置いていて、いつくん。篝ちゃんどこかな？さっきまで一緒だったよね？トイレ？」

「えーと・・・」

「一夏は篝が束を避けてどこかに行きました。といえるはずが無く、どう答えるべきか悩んでいると」

「まあ、この私が開発した篝ちゃん探知機ですぐに見つかるよ。じやあねいつくん。また後でねー」

頭のに付けていたウサミミがまるでダイジンググロッドみたく篝の方向を向いてをり、その方向へと走りさつていく姿に一夏は苦笑いしていた

水着に着替えた男子3名は海に向つと

「あ、れおつちだ〜」

既に砂浜には女子がおり、声をかけてきた

「う、うそっ！わ、私の水着姿へんじゃないよね？」

「わゝ、体かつこいい。鍛えてるね」

「ラリー君、後でビーチバレーしようよ」

女子達が男子3名に近づいて話終わると、3人は準備体操をし始めた。海の中で足を攣ると洒落にならないと言うサイファーの言葉に同意する一夏がラリーも一緒に体操していると

「い、ち、かゝゝゝ！」

準備体操をしていた一夏に飛び掛ったのは鈴音だ

「あんた達、真面目ねえ。一生懸命体操しちゃって。ほらほら、終わったなら泳ぐわよ」

「ファン、準備運動しておかないと、咄嗟の時に足を攣るって溺れるぞ」

ラリーが鈴音に準備運動を進めるが

「あたしは溺れたことないから大丈夫よ。前世は人魚ね、たぶん」

鈴音が一夏の体をしゅるりと駆け上がり肩車の体性になる

「おゝ高い高い。遠くまで良く見えていいわ。ちょっとした監視塔になれるわね」

一夏の肩車で周りを見回し笑顔な鈴音であった

「あつ、あつ、ああつ！な、何していますの!？」

驚きの声で言っているのはセシリアだ。その手にはビーチパラソルにシート、サンオイルを持っていた

その後になにやら鈴音と他の女子数名とセシリアが言い合い？している中サイファーとラリーはパラソルを広げシートを広げ、荷物をおいた

「ねえ〜れおっち〜」

準備が終ると同時ぐらいに、のほほんさんがサイファーに声をかけた

「一緒におよ〜」

「ラリー君も一緒にい〜」

のほほんさん以外にも女子数名が誘っていた

「そうだな、泳ぐか」

ラリーはサングラスを外しゴーグルを持ち

「おら、サイファー。行くぞ」

サイファーも泳ぐ準備を終え

「よし！行くかっ！」

ラリーが女子数名と一緒に海へと走り、その後を歩いていくサイファーとのほほんさん

「……ホンネ」

「ん？なに？」

「……それは水着か？」

サイファーが疑問を口にした。まあ、無理もないその姿は水着と言
うよりも寝巻きと言う方が信じられる……。狐のきぐるみ？姿
なのだから

「うん、そうだよ。おかしい？」

サイファーの前でクルツと周り水着を見せるのほほんさん

「……いや、個性的だが……。いいんじゃないか」

サイファーは考えるのをやめ、海に向った

その後、セシリアのサンオイル騒動や鈴音沈没騒動などあったがけ
が人も無くサイファーとラリーが休んでいると

「あ、サイファーにラリー。ここにいたんだ」

2人は声が聞こえた方を向くと水着姿のシャルと……

「なんだ、それは？」

ラリーの疑問……それは全身を何枚ものバスタオルで包んでいる奇天烈な姿をしている人物がいたのだ

「ほら、出てきなつてば。大丈夫だから」

「だ、だ、大丈夫かどうかは私が決める……」

シャルがなにやら説得してるが、中々言う事を聞かない様子だ

「ん？その声はラウラか？何でそんな格好してるんだ？」

バスタオルの主がラウラだと気付いたラリーが訊ねると

「どうやらね、ラリーに水着姿を見られるのが恥ずかしいみたいで」

「なっ！言わないと約束したはずだぞ！」

ラウラがシャルに何か言っていたが

「ラウラ」

ラリーが声をかけると体をビクンツとさせた

「俺はお前がどんな格好でも笑わないし笑うつもりもない。だから見せてくれないか？」

ラウラはううくと唸り……そして

「わ、分かった！見せてやるう！」

バスタオル数枚をかなぐり捨て、水着姿のラウラが現れた。だが・
「…………ど、どうだ？」

黒い水着、レースをふんだんにあしらい、まるで大人の下着みたいだが、それもラウラによく似合い髪も何時ものストレートからアツプテールになっていた

「何処も可笑しくない。可愛いぞラウラ」

そう言いながら頭を撫でるラリー。ラウラはみるみる顔を赤くしていき

「可愛い…………私は可愛い…………」

などと呟き始めていた。その様子を微笑ましく見ているシャルと無表情のサイファーが見ていた

「ねえ…………サイファー」

シャルがサイファーの目の前へと移動し

「どうかの…………似合ってる？」

シャルがサイファーの目の前で水着を見せると

「…………ああ、よく似合っている」

サイファーがシャルの頭を撫で、ほんの微かに笑いながら言つとシ

ヤルは頬を赤らめた

「えへへ・・・ありがとサイファー」

シャルはサイファアの腕に抱きついた

「ああっくく！シャルロットさんずるい！」

女子の声にシャルはハッ！となり回りを見ると数人の女子が見ていた

「サイファー君に抱きつくなんて・・・」

「同じ部屋だったのは大きいわね・・・」

「れおつちずるいく、私もだきつくく」

などと一悶着あつたが

「そつえば、なにかようか？」

ラリーが訊ねると、女子に1人がビーチボールを取り出した

「一緒にビーチバレーしよ！」

その後は一夏達も巻き込みビーチバレーをし始めた。まだ可愛いと言ふ言葉に頭の回転が追いついていないラウラの顔面に一夏のスパイクがモロに決まったりセシリアが倒れかけた時に一夏の水着に手をかけてしまいポロリしてしまったりとはしゃいでいたら

「わー、ビーチバレーですか！懐かしいです」

声の主はサイファーが選んだ水着を着用した真耶だった

「ど、どうですかサイファー君。に、似合います」

真耶が少しモジモジしながら訊ねると

「ええ、似合ってます。魅力的だ」

とサイファーが答えたら・・・何故か妄想の世界にと飛んでいった真耶であった

「やれやれ・・・何をしているんだ山田先生」

真耶に続いて現れたたのはラリーが選んだ水着を着用した千冬だった

千冬の姿に一夏は鼻の下を伸ばし、女子は黄色い声を上げていた

「どうだ、似合っているか？」

千冬がラリーに訊ねると

「ああ、正直予想以上だな」

「ふ、そうか。それなら着たかいたものがあつたものだ」

すると千冬がラリーの腕を掴み

「ひと泳ぎする、お前も付き合え」

そう言い千冬がラリーをつれて行くことすると

「教官！私も行きます！」

先程まで倒れていたラウラが高速で立ち上がり、千冬が掴んでいる逆の腕に抱きついた

「お前は食堂にいつて飯でも食って来い」

千冬とラウラの間を目線で火花が散っている

「サイファー君、私達も泳ぎませんか？」

真耶がサイファーの手を握り行こうとしたが、その光景を見たシャルは黒い笑顔になり

「先生、サイファーはこれから僕と食堂に行くんです！」

そう言いシャルがサイファーの腕に抱きつくと

「え、あ、い、いえ！これから泳ぎに行くんです！」

真耶はサイファーの腕に抱きついた。その後も言い合いが続き、サイファーとラリーが昼食をとったのはかなり後だった

海 後編（後書き）

更新が遅れました

新しく始めたネットゲやら大学の準備やらで中々時間がつくれなくて・
・
・

まあそんなことよりアンケートします。今回のアンケートは一夏達のコールサインの案が中々決まらないのでアンケートをとります

一夏

篤

鈴

セシリア

ラウラ

です。シャルはコメントにあったコールサイン「ラファエル1」に決定しましたドラゴンインストールさん、ありがとございます

アンケートは29日の18時までとします。どんどん感想でお待ちします

レッドアライト

海での自由時間はあつと言う間に終わり。夜、宿の大広間3つを繋げた大宴会場で食事をしていた

「うまいな、この刺身。昼も夜も刺身出るなんて豪華だな！」

「ほんとよね。IS学園は羽振りいいわね」

一夏の隣に座る鈴音、食事はテーブル席と座敷と別れており一夏と鈴音、セシリア、箒は座敷席で食事しており、サイファー達はテーブル席で食事していた。ラリーいわく「あんな座り方で飯が楽しめるか」だそうでテーブル席を選んだ

「にしてもこのサシミか、新触感だな。それに旨い！」

ラリーは初めて食べる刺し身を気に入り、サイファーも刺し身の味に舌鼓をうっていた

「あれ？サイファー達刺し身食べるの始めて？」

サイファーの隣の席に座っているシャルが不思議そうにしてると

「ああ、シャルロットは食べたことあるのか？」

ラリーがそう聞くと

「うん、学園の夕食のメニューに刺し身定食があるよ」

そんなこんなで夕食を楽しんでいると、座敷の方が騒がしいのに気付き、サイファー達が見ると一夏に刺し身を食べさせて貰っているセシリアにそれを見て騒ぎだす鈴音や女子達、その姿を嫉妬の籠った目で見るとなるなどとなっていたが

「お前達は静かに食事することができんのか」

その声に生徒達が凍りついた

「お、織斑先生……」

そこには襖をひすまひらいた千冬の姿があった

「どうにも体力があり余っているようだな。いいだろう、それでは今から砂浜をランニングしてこい。距離は……50キロもあれば十分だろ」

千冬 of 言葉に顔を青ざめながら急いで自分の席に戻る生徒達、千冬の提案を前向きに考えるサイファー

「織斑、あまり騒動を起すな。鎮めるのが面倒だ」

「わ、わかりました」

千冬が一夏に注意した後に襖を閉めた

その後、怒ったり喜んだりしているセシリアの姿があったが、気にせずに食事をするサイファー達だった

食事が終わり部屋でくつろぐ生徒や教員、その一角で異様な光景があった

千冬と一夏の部屋の前で聞き耳を立てる篤、セシリア、鈴音、シャル、ラウラの姿があった。この5人が聞き耳を立てている理由が

「千冬姉え、久しぶりだからちよつと緊張してる？」

「そんな訳あるか、馬鹿者……んっ！す、少しは加減しろ……」

「はいはい、んじゃあ……ここはと」

「くあっ！そ、そこは……やめっ、つう！」

「すぐ良くなるって。だいぶ溜まってたみたいだし……ね」

「あああっ！」

などと部屋から聞こえてくるのは千冬の惱ましい声を聞く5人は生唾を飲みさらに聞き耳をたてていると……襖が耐え切れずに

「……わあああっ！」

襖が外れ部屋へと流れ込んだ5人、その光景を見た一夏と千冬

「……何をしとるんだ馬鹿共」

その後は5人正座させられ、千冬に説教のフルコースを味わっていた

「でも、まさかマッサージだったなんて」

「良かった、てっきり私は……」

シャルが苦笑いし、ラウラは余り驚いた顔をしていなかった

「なんだとおもったんだ？」

ラウラの言葉に疑問を感じた一夏が聞くと

「もちろん男女のい……」

「……わああっ」「」「」

ラウラ以外の4人が急いでラウラの口を塞ぎ、頬を赤らめ苦笑いしていた。その姿に一夏が首をかしげていると

「おい、お前はもう一度風呂に行ってこい。部屋が汗臭くては困る」

「ん、わかった」

一夏は着替えを持つと温泉へと向った

「……」

千冬は備え付けの冷蔵庫からジュースを5本取ると5人の前に置いた

「これは私の奢りだ。好きなものを選べ」

目の前に置かれた飲み物を取るが……

「なんだ、何時ものバカ騒ぎがどうした？まるで通夜か葬式みたいだぞ」

千冬の言う通り、5人は黙ったまま座っていた

「い、いえ、その……」

「お、織斑先生とこうして話すのは、ええと……」

「は、はじめてですし……」

ラウラ以外の4人がそわそわしていた

「そんなこと気にしていたのか、まあ遠慮せずに飲め」

「い、いただきます」

5人がそう言い、飲み物を飲むと……その姿を見た千冬がニヤリと笑った

「飲んだな」

「へ？」

五人が間抜けな声をだすと、千冬が備え付けの冷蔵庫から星のマークがキラリと光る缶ビールを取り出し、それをゴクゴク飲み椅子に座った

その姿にポケンとした表情をしていた5人を尻目に話し出す千冬

「さて、口封じも払ったし本題に入ろうか」

千冬の顔はいつみたく凜々しい顔ではなくイタズラをするような悪い笑顔だ

「おまえら、あいつの何処がいいんだ？」

その質問に篝、セシリア、鈴音の顔が赤くなった。この場合のあいづちは一夏しかおらず……

「わ、私は別に……以前より腕が落ち不甲斐ない姿が腹立たしただけです」

そう言いながらジュースを飲む篝

「あたしは、腐れ縁なだけだし……」

なにやらそわそわし、もごもごと言う鈴音

「わ、わたくしはクラス代表としてしっかりしてほしいだけです」

ツンとした態度で答えるセシリア

「ふむ、そうか。ではそう一夏に伝えておこう」

しれつとそんなこと言う千冬に、3人はぎよつとし一斉に詰め寄った

「「「言わなくていいです!」「」」

それを笑いながら一蹴する千冬がビールを飲み

「デユノア、お前はあいつの何処がいいんだ?」

突然の千冬 of 言葉にシャルは

「え、え!僕……ですか。……言わないとダメですか?」

この場合はサイファアのことだと分かったシャルは顔を赤らめモジモジしている

「当たり前だ。そこの3人も言ったんだ、不公平だろ」

そついいビールを飲む千冬

「……僕はサイファアに守るって言われたんです」

シャルは目を瞑り、胸の前で両手を包むように握っていた

「1人だった僕を助けてくれるって……守ってくれるって言うてくれたんです。その言葉通りサイファアは僕を助けてくれたし守ってくれた。それに、頭を撫でてくれる時の顔が凄く優しい顔なんです」

そつ言い目を開けると……そこには顔を真っ赤にし聞いている

箒、セシリア、鈴音に、目の前で手をヒラヒラを振る千冬の姿だった

「お暑いことで、まさかノロケを聞かされるとはな」

「の、ノロケだなんて！」

顔を真っ赤にし目の前でブンブンと両手を振るシャルだった

「それでラウラ、お前はどなんだ」

ジュースを飲んでいたラウラは千冬の方を向き

「私はラリーの姿に惚れました。奴は明確な理由があり、それを折れずに戦う姿に……あの強い眼差し、頭を撫でてくれるあの優しい姿に惚れました」

キリツとした顔でノロケを言うラウラにまた顔を赤くする3人に若干不機嫌な顔をしている千冬、互の話に盛り上がるシャルとラウラだった

等の本人達はと言うと、ラリーは他の女子達と遊んでおりサイファーは砂浜を走った後に温泉に向うと一夏に会い、一緒に温泉を楽しんでいた

そして翌日、朝から夜まで丸一日ISの各種装備のデータ収集に専用機持ちは大量に本国から送られてくるので大変な作業である

その中で特にする事がない二人がいた。サイファーとラリーだ、2人も国連から大量の武装が送られてきたがその中で1・2個選んだだけで他のを全部送り返したのだ。そのことを予想していた司令官と副司令官は執務室で笑っていたとか

それ以外の生徒は専用機を用意したり、専用機持ちでは無い生徒は打鉄用の総武を運んでいた

「ああ、篠ノ之、お前はちょっとこっちにこい」

「はい」

打鉄用の装備を運んでいた篤は、千冬に呼ばれて向うと

「お前には今日から専用・・・」

「ちーちゃ~~~~ん!!!」

女性の声が聞こえ、その方向を皆が見ると・・・砂塵を上げながら走ってくる。しかもかなり速い、通常に人間では出せないスピードである

「・・・束」

その人物は稀代の天才と称される篠ノ之 束である。IS学園はこの国にも属さない物であり介入も立ち入りも禁止されているのだが・・・この天才は白昼堂々と乱入してきた

「会いたかったよー！ちーちゃん！さあ、ハグハグしよ！愛を確か
m.....ぶへっ！」

千冬へと飛び掛る束を片手で掴み上げる。その姿はアイアンヘッド
と言つなにふさわしい姿だった

「うるさいぞ、束」

「ぐぬぬぬ・・・相変わらず容赦ないアイアンクローだねっ」

千冬の拘束を普通に抜け出す束、そのまま着地し箒の方を向いた

束が乱入してき理由はどうやら箒の為に造った専用IS『あかつほぎ紅椿』を
渡すためめである。スペックは『白式』に増さるも劣らない性能で
あり、他の企業が造つてる試験方第3世代ISなどよりも遥かにオ
ーバースペックである

『紅椿』に登場で回りの生徒がざわめいてる中、ある2人だけはそ
の機体を観察していた

「.....恐らく高速戦闘型、武器にもよるがヒットアンドウエイ
戦法が主体となる」

「俺も同じ考えだな。ホウキは剣の訓練をしているからな、恐らく
近接ブレードのドッグファイトと俺はみた」

その2人とはサイファーとラリーである。いきなり登場した第4世
代型の『紅椿』に驚かず、そのまま機体を観察しその予想した特徴
を口にしていた

『紅椿』の準備中に生徒の誰かが「身内びいき」などを言っていたが、それを束自身が

「有史以来、世界が平等であったことなんて一度もないよ」

その言葉に生徒が黙るが、サイファーとラリーは同意していた。戦争を味わっていた2人は戦争に負けた国がどんな扱いを受けるかを直に見てきた・・・それゆえに平等なんて言葉は平和ボケした人が言う妄言であると考えていた

傭兵である2人は人を殺し金を得る。その金額も殺した量により大きく変わっていく、そんな世界に平等なんてモノはない・・・存在しないのだ

そうしている内に束が投影パネルを叩いて『紅椿』のセッティングが終わり、刺さっていたコード類が全て外れた。既に搭乗していた篤は目を瞑り意識を集中させる・・・そして次の瞬間、『紅椿』がかなりの速度で空へと飛翔していく。その速度はサイファー達に劣るものの他のISを寄せ付けられない速度である

「おわっ!」

急上昇していく『紅椿』の衝撃波で生徒達は短い悲鳴を上げる。『紅椿』は200m上空で滑空していた

「どっどっどっ? 篤ちゃんが思っていた以上に動くでしょ?」

「え、ええ、まあ・・・」

予想以上の性能に箒自身も驚きを露にしており

「じゃあ刀使つてみてよー。右のが《雨月》あまつきで左のが《空裂》からわれね。武器特性データ送るよん」

束から送られてきたデータから出現した二振りの刀、それを同時に抜き《雨月》を雲に向け突く。すると刀身からレーザーが連続し射出、大きな雲が瞬く間に無くなった

「うんうん、いいねー。じゃあ次はこれね」

すると束の隣にでかい深緑をした長方形の鉄箱が表れた

「……SAMだと」

その鉄箱の正体はSAM。地对空ミサイルの略称であり、目標を追尾する高機動ミサイルである

ミサイルハッチが開き、そこから射出される多数のミサイル、その全てが上空にいる『紅椿』へと飛翔していくが

「はああっ!」

箒は左手に持っていた《空裂》をミサイルの方へと薙ぎ払うようにふった。《空裂》の斬撃がエネルギー刃となりミサイル全てを撃墜した

「……やれる!この紅椿なら」

新たに手にしたISちからに笑みを浮かべている箒、その姿を嬉しそうに

見ている束

「いい動きだ、あそこまでの高機動戦闘にくわえ武器の切替なしに近距離、中距離を対処できる」

「搭乗者の腕もいい、いくら機体がよくても搭乗者の腕次第で宝の持ち腐れになるか、強力な武器へとなる。今回は後者だな」

ラリー、サイファーと意見を言い『紅椿』と筭を褒めていた。・・・だが2人の頭の中ではアレをいかに損害無しで効率よく潰すかをシュミレートしていた

その中で1人厳しい顔つきをしている人物がいた・・・千冬だ。千冬は束をその厳しい顔つきで睨んでいた

「たっ、た、大変です！お、おお、織斑先生！」

いきなりの真耶の声に束から真耶へと向き直る千冬

「どうした？」

「こ、こっ、これを！」

真耶が千冬に小型端末を渡すと同時にサイファー達に通信がはいりISを展開した。・・・ほんの限られた人物しか知らない極秘回線に

どうしました、司令

その回線を知っているのは司令と副司令のみで、通信してきた人物

は直ぐに特定できていた

緊急事態だ。レベルはレッドアラート、直ぐにデータをそちらに送る

司令の言葉にサイファーとラリーの顔が真剣になる。レッドアラート……その意味は前の世界での第一級厳戒態勢である

データがISへと転送されそれを見ようとしたら

「クウエイド、フォルク」

千冬の声に顔を向けると真剣な表情であり、その意味を理解し2人は首を縦に振った

「現時刻よりIS学園教員は特殊任務へと移る。テスト稼動は中止、各班はISを片付け旅館へ戻れ。連絡があるまで各自しいつ無い室内待機。以上だ！」

いきなりの命令に生徒たちが騒いでいると

「とつと戻れ！以後、許可無く室外に出たものは我々で身柄を拘束！いいな！」

千冬の一喝により騒いでいた生徒は指示に従い、旅館へと向った

「専用機持ちは全員集合しろ！織斑、オルコット、凰、デュノア、ポーデヴィツヒ！……それと篠ノ之も来い」

千冬が集めた専用機持ちと移動する中、サイファーとラリーはある

不安があった。その不安にする人物を見ながら・・・

レッドアラート(後書き)

ー夏達のコールサインのアンケートありがとうございます

ある程度決まりました。登場するまで楽しみにお待ちくださいw

赤い部隊 前編

国連内でも慌しい空気が流れていた

「どう言うことだっ！何故ISが暴走など起こした！」

そついいある国の代表がアメリカ代表に問い詰めると

「何者かによるハッキングを受け、こちらからの指示に従わなく暴走。搭乗者との連絡も取れない状況です」

アメリカ代表は焦った表情ではなく無機質な表情をしていた。他の国代表もざわざわと騒ぎだしている

「……落ち着かないか」

スピーカーのから声が響き、皆が上座の方を向く。そこに座っているのは司令であり、その後ろには副司令が立っていた

「今は何故その状況に陥ったかを問いつめる場合じゃない、ハッキングは内部からか？それとも外部か？」

司令の声で周りが静まり、アメリカ代表に尋ねると

「ハッキングは外部からです」

メガネの位置を直しながら答えた

「ISを外部からハッキングし暴走させる技術者は多くないはずだ、

まずは犯人を洗い出すことに集中しろ」

その後、会談が休憩に入りコーヒを飲んでいる司令

「犯人の目星は本当はついているんじゃないか？」

そう言いながら近づいてくるのは副司令だ

「それは各国も同じだ。あの白騎士事件の同一犯の可能性ある」

副司令もコーヒを購入し司令の隣に座った

「それに、ハッキングの痕跡すら残さないととなるとそう簡単に見つかるまい」

そう言いコーヒを飲む司令

「彼等も問題のISの撃墜に向かってる、後は任せるしかあるまい」
上を向いていた副司令はそう言い、コーヒを飲んだ

「では、現状を説明する」

旅館の一番奥にある宴会用の大座敷でサイファーを始めとする専用

気持ち、そして教師陣が集まっていた

照明が落とされた暗い室内に、青白い大型の空中投影ディスプレイが浮かんでいた

「二時間前、ハワイ沖で試験稼動にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第3世代の軍用IS『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルが制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡が入った」

千冬の説明に一夏と篤は困惑な表情を浮かべていたが、他のメンバー全員は真剣な表情をしていた

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから2？先の空域を通過することがわかった。時間にして50分後、学園上層部からの通達により我々がこの事態に対処する事が決まった」

淡々と重要な所を説明していく千冬

「教員は学園訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よって本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう」

千冬という言葉に驚きを露にしている一夏。だがそれをスルーした千冬

「それでは作戦会議フリーファイニングを行う。意見があるものは挙手するように」

それに無言で挙手するサイファー

「目標ISの詳細なスペックデータ及び武装についても頼む」

「わかった。だが、これらは2カ国の最重要軍事機密だ。けっして

口外するなよ。まあお前とフォルク、ラウラなら心配いらんが……」

千冬は一夏達の方を向き

「もし情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも2年の監視がつけられる」

少し睨みをきかせ言うと、4人は首を縦に振った。そして、その場にいる全員に開示されたデータを元に相談を始めていた

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……わたくしのISと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですね」

「攻撃と機動の両方を特化した機体ね厄介だわ……スペック上ではあたしの『甲龍』を上回ってるから、向こうの方が有利……」

セシリアと鈴音が意見を交わしあい

「360度による攻撃……死角もなければ抱きつかれ集中砲火を食らうと厄介だ」

「ああ、さらに高い攻撃性能に高機動性能……これは面倒な相手だな」

サイファーとラリーも機体性能に武器性能を照らし合わせながら作戦を練っており

「この特殊武装が曲者って感じるね。防御用パッケージが届いてるけど、連続して防御は難しいね」

「しかも、データでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルもわからん、偵察は行えないんですか？」

シャルとラウラが頭をひねって考え、千冬に偵察できないか聞くと

「無理だ。この機体は現在でも超音速飛行を続けている。最高速度は時速2450kmだ、アプローチは1回で限界だろう」

「1回きりのチャンス……ということやはり、一撃必殺の攻撃力を持ったISで当たるしかありませんね」

真耶の言葉に、全員がサイファールとラリーの方を向いた

「……攻撃させるならラリーだ。俺の装備には一撃必殺は無いが、ラリーの装備にはある」

「ま、そうなるな。TLSの威力ならいけるし、一撃で無理でも動きが止まっている内にサイファールが仕留める」

「万が一の場合でも俺とラリーの性能なら追撃も可能だ」

サイファールとラリーはそう言った。サイファールのISの最大時速は2650km、ラリーのISの最大時速は3200kmまで及ぶ。単純な速さでの勝負なら追いつくことが可能なのである

それに全員が頷いていた

「よし。それでは作戦の具体的な内容に入る。クウエイド、フォルク、超音速下での戦闘訓練時間は？」

千冬の問いにサイファーは千冬に近づき小声で

「……実戦に訓練もあわせたら少なくとも1万時間以上は飛んでる」

「なっ！」

その時間に千冬は驚きを隠せなかった。1万時間とは1日10時間の計算で考えると2年以上毎日続けている計算だ。サイファーとラリーがエースパイロットであると知っている千冬でも、その時間には啞然とする程だ

「まあ、お前達なら大丈夫か……なら作戦は……」

千冬が作戦の概要を説明しようとする

「待った待った！。その作戦はちよつと待ったなんだよ！」

いきなり明るい声が遮った。その声は天井から聞こえ、天井にいたのは首を逆さに生えた束であった

「……山田先生、室外への強制退去を」

「えっ！？わ、わかりました。あな、篠ノ之博士、とりあえず降りてきてください……」

真耶が困った声を出しながら言うと

「とっっっ！」

くるつと空中で1回転し着地した

「ちーちゃん！もつとも〜と！いい作戦が私の頭の中で渦巻いてるよ！」

「……出て行け」

頭を押さえる千冬。強制退去しようとしたが、するりとかわされてた

「聞いて聞いて！ここは断・然！『紅椿』の出番なんだよっ！」

「なに？」

束の説明では紅椿も『展開装甲』によりパッケージ無しで超音速飛行が可能であり、それには白式の《雪片式型》の構造が使用され、それが全身を包んでいる。それによりシステム最大稼動時間がスベックデータ上のさらに倍まで増えていた

その性能に千冬、サイファー、ラリーを除く全員が啞然とした表情をしていた

紅椿を使う作戦とは『白式』を『紅椿』がターゲット目標まで担いで接近し、そこから《雪片式型》の最大出力で攻撃、ISの機能停止にするという作戦だ。サイファー達の作戦も束の作戦も可能なものであり、考えている千冬は

「クウエイド、お前はこれをどう見る」

千冬がサイファーに振ると、同じく考えていたサイファーが

「……………シノノ博士の作戦ですね」

その言葉に束は喜んでいた

「うんうん！話の分かる子は好きだよ！」

だが对象的に千冬は厳しい顔をしていた

「……………理由は？」

「シノノ博士はISに関してはプロフェッショナルです。その場で整備し最高の状態で作戦に望める『白式』と『紅椿』の方が好ましい。確かにこの作戦には穴は在りませんが部の悪い賭けではありません、作戦通り事が運べば自分とラリーが戦闘するより被害が少なくすみます」

サイファアの解説に千冬が溜息をついた

「……………では本作戦では織斑・篠ノ之の両名による目標の追跡及び撃墜を目的とする。作戦開始は30分後。各員、ただちに準備にかかれ」

千冬が手を叩くと、それを皮切りに教師陣はバックアップに必要な機材の設営を始めた。一夏、箒以外の専用機持ちも手伝いをしており、もたもたしていた一夏が千冬に頭を叩かれていた

大体の設営が終わりサイファア、ラリー以外の専用機持ちが一夏に高速戦闘のレクチャーを受けている時に2人は砂浜にいた。2人は自分のISの整備をしていた

「……成功する確率は？」

整備していたラリーがサイファーに問うと

「高くて4割、低くて2割だ」

その答えは意外にも低かった。あそこまで解説した本人が5割を切る答えだったが、ラリーはまったく驚いてなかった

「妥当な数字だな。二人はまだ数少ない実践しか経験していない、さらにホウキは専用機での初の実戦だからな。それに相手は新型だ、俺達の出番が来るだろうな」

ラリーは何故サイファーがああな時にあんな事を言ったのかを聞かなかった……いや既に気づいていたの、それを分かったラリーはサイファーの作戦に全てゆだねることにした

そうして2人は整備に戻った

時刻は11時半

7月の空は太陽が燦々としており、空は晴れ渡っていた。砂浜では一夏と筭がISを展開し、飛ぶ準備をしていた

『白式』が『紅椿』の背中に乗ると

織斑、篠ノ之、聞こえるか？

ISのオープンチャンネルから千冬の声が聞こえた

今回の作戦の要は一撃必殺だ。短時間での決着を心がける

一夏達が話している間、サイファーには不安があった……。それは箒である。他の人は気づいていないようだがラリーとサイファーは見抜いていた、明らかに箒は浮かれているのだ、新兵と同じ興奮とも恐れとも見える感情が露になっている。

「……………ホウキ」

サイファーが箒に声をかけると

「……………落ち着いていけ。冷静な判断を忘れるな」

それに箒は自身満々の表情で

「ああ、任せておけ。一夏の支援もこなすさ」

その返事でサイファーは箒は撃墜されると感じた

イチカ

元の場所に戻ろうと一夏達に背を向けたと同時に、一夏にプレイベ
ート・チャンネルで話かけた

ホウキの援護を第2優先事項に考えろ、じゃないと……撃^お
墜^とされるぞ

サイファアの凄みのある言葉に一夏は冷や汗を流しながら返事をした

……そして作戦が開始された

赤い部隊 前編（後書き）

投稿が遅くなり申し訳ありません

前のアンケートでとったコールサインですが

一夏⇨サマー1

箒⇨ヴァルキリー1

鈴音⇨スピネル1

セシリア⇨サファイア1

ラウラ⇨シュバルツェ1

シャル⇨ラファエル1

で決定しました

解説をいれると一夏はそのまんま夏なんとアンケートであったサマー。箒は女戦士なんでヴァルキリー。セシリアは青と9月生まれなので誕生石がサファイアのもあってでサファイア
ラウラはシュベルツェ隊長なんでシュバルツェ。シャルはアンケートで貰ったラファエルです

問題だったのは鈴音でした。中々難産でチャイナ1やらスプタ1やらツンデレ1やらetc・・・と酷いのばっかしか浮かんでかなく最後の手段ではヴァルキリー2にしようかと考えてましたが、アン

ケで宝石の案があつたので赤い宝石でスピネルになりました

赤い部隊 中編(前書き)

こんなに遅れて申し訳ありません(;A;))

今回は戦闘が始どなく短いです・・・しめんなさい

赤い部隊 中編

篤が一夏を背に乗せ一気に上空300メートルまで飛翔していく、その速さは『白式』の瞬間加速イクニッションブーストと同等の速さだ

そのまま上昇し続け、目標高度500メートルまで達した

「暫時衛星リンク確立……情報照合確認。目標の現在地を確認、一夏！一気に行くぞ！」

篤がそう言うなり『紅椿』の脚部及び、背部装甲がぱかりと開き、強力なエネルギーを噴出させる。その動作は《雪片式型》と同じ展開装甲だった

2人が目標へと飛翔する姿を険しい表情でみるサイファーとラリーは

「ラリー」

「ああ」

アイコンタクトで全てを理解した2人はISを起動させた

「ど、どうしました？」

セシリアが行き成りISを起動させた2人に驚きながらも尋ねると

「最悪の展開を予想した時の準備だ」

サイファーが投影ディスプレイを見ながら投影パネルを叩き操作し

ながら答えた

「でも、あんた達も一夏達が作戦を成功できると思ってた承したんでしょ？」

鈴もセシリアと同じ用に疑問を口にする

「ファン」

ラリーが鈴の方を向き

「物事は最悪の事態を想定して調度いいものなんだ」

そう答え再び投影ディスプレイの方を向き、作業し始めた

「ふ〜ん、後あたしのことは鈴でいいわよ」

鈴はそう返答し自分のISを起動させ準備をし始めた

シャルとラウラはサイファー達と同じくISの設定をしており、セシリアもISを起動させ準備していた

「衛星とリンク・・・完了。コンフリクト望遠カメラ設定・・・完了。コンフリクト」

サイファーは準備しながら衛星のカメラにリンクし『銀の福音』シルバリオ・ゴスペルをカメラに捕らえていた

「『白式』及び『紅椿』を確認、目標までおよそ10秒・・・5、4、3、2、1、0」

筭の背に乗っている一夏は目標を視認しており、さらに加速する筭・
・・・そして

「うおおおおおっ!」

> 零落白夜たじろくひやくやくを発動させ、それと同時に《瞬時加速イグニッション・ブースト》を発動させ間
合い一気に詰める

(行けるっ!!)

振りかぶり光の刃が目標に触れる、その瞬間

「なっ!」

なんと最高速度のまま反転し、身構えた

一夏は驚きの表情を露にしていたが、相手が反撃する前にケリをつ
けようとそのまま間合いをつめる・・・だが

敵機確認。迎撃モードへ移行。《銀の鐘シルバー・ベル》稼動開始」

オープンチャンネルから聞こえてくるのは抑揚のない機会音声だ。
しかし一夏はそれに明らかかな『敵意』を感じていた

(嫌な予感がする)

その予感は数秒と経たず現実となった。福音が体を1回転させ、>

零落白夜くの刃を僅か数ミリの制度で避ける、その姿に一夏はサイファーを重ねていた

「プランA失敗。現在イチカとホウキが目標と交戦中」

ISを使いリアルタイムで状況を把握しているサイファーは千冬達にそれを報告していた

「……っ！」

サイファーがディスプレイに表示されているカメラを見て驚いた表情をした

「織斑先生、海面封鎖をしたのでは？」

驚いたのは一瞬ですぐさま表情をよめないポーカーフェイスになっていた

「ああ、完全に封鎖したはずだが」

「船があります……密漁船か」

その言葉に千冬と真耶が驚いた表情をしていた。それもそのはず先生一同が海上封鎖をしたはずなのだから

「……ちっ！」

サイファアの表情が苦虫を潰したような表情になった

「イチカが落されました」

「なっ!？」

千冬が驚きの声を上げ、他のメンバーも驚きの表情を露にしていた

「イチカがホウキを庇い被弾、そのまま海へと落ちていきました。既にシールドエネルギーが切れ肉体的損傷も負っている可能性がある」

サイファアが淡々と説明していると

「あなたは心配ではないのですか!一夏さんのことが!」

セシリアが声を荒げてサイファアに詰め寄った。それも仕方ないだろう、好きな人が攻撃を受け落され、さらには大怪我をしているかもしれないのに目の前の男はそれを気にもしない様子だからだ・・・
・だが

「・・・そんなことは今は関係ない」

サイファアは冷たい目をして答えた

「あんだ!」

鈴も詰め寄ろうとしたが

「今は個人に構っている暇はない、あのISを停止させる方が先だ」

サイファアの言うことが最もで反論できないセシリアと鈴は苦虫を
噛み潰したような表情をしていた

「行くぞ」

「ああ」

サイファアとラリーが足の裏のバーナーに火が入り空へと上がる前に

「俺達はイチカとホウキを回収してくる」

「ああ……頼む」

千冬表情も曇っていた

サイファア達が一夏と箒を回収して3時間が経過していた。一夏の
体には痛々しく包帯が巻かれ寝ていた

その傍らに椅子に座りずつとうなだれている箒がいた

「みつかったか？」

ラリーとサイファーはある部屋にいた。そこにはラウラがドイツの軍事衛星で福音の居場所を探していた

「待ってくれ、もう少しだ」

ラウラは投影パネルを叩き必死に福音を探していた

すると一夏が寝ている部屋から鈴の大声が聞こえてきた。それには幕の奥底にある闘志を燃やすに十分な言葉だった

「見つけた！」

ラウラの声にサイファーとラリーはディスプレイをみると

「場所はここから30キロ離れた沖合い上空に目標を確認。ステルスモードになっていたが、光学迷彩は持ってないようだ。衛星による目視で発見した」

ラウラの説明を聞いていたサイファー達と

「さすがドイツ軍特殊部隊。やるわね」

鈴と幕が部屋に入ってきた。幕の眼は先程の曇った眼ではなく闘志の炎が見える透き通った眼だった

「ふん、お前の方はどうなんだ。準備は出来ているのか」

「当然。甲龍の攻撃特化パッケージはインストール済みよ。シャルロットとセシリアの方こそどうなのよ？」

すると鈴の後ろから

「たった今完了しましたは」

「準備OKだよ。いつでもいける」

部屋にメンバーが全てそろい

「大丈夫なんだな」

サイファアがいつもの表情で問うと

「私は……」

箒は拳を握り締める、それは後悔ではなく決意の証

「戦う……戦って、勝つ！今度こそ、負けはしない！」

その姿を見たサイファアは

「……いいだろう」

全員が見える位置まで移動したサイファアは

「これよりブリーフィングを行う。既にこちらでTACネームは決めてある、意義は作戦後にしてもらう。まずはホウキ」

サイファアは箒の方を向いた

「コールサインはヴァルキリーだ。次にセシリア」

セシリアの方を向き

「コールサインはサファイアだ。リン」

鈴の方を向き

「コールサインはスピネルだ。ラウラ」

ラウラの方を向き

「コードネームと同じくシュバルツェだ。シャロット」

シャルの方を向き

「コールサインはラファエルだ。そして、俺はガルム1、ラリーはガルム2だ。これより作戦終了までTACネームを使うように、なを今作戦では織斑先生より全権を委ねられている。指示に従えいな」

サイファアの言葉に全員が答えた

そしてブリーフィング後、作戦開始まで30分ありラリーはロビー

で一人座っていた

「おい」

ラリーが声の方向を見ると、そこには千冬がいた

「どうした？」

ラリーは何時もの笑顔をしていると

「いや・・・なに、お前のことだららん物でも食ってる思ってな」

千冬は口元に笑みを浮かべ言うと

「おいおい、俺はパイロットだけ。そこら辺はわきまえてるぞ」

ラリーは肩を竦めながら笑顔で答えた

「・・・・・・・・」

千冬は先程の笑みは消えていた・・・・・・・・そして

「お前は・・・・・・・・あいつ等が危険になるとその身を盾にしても守るのか？」

ラリーの顔を見て真剣な表情で問う千冬

「そんなことしないぞ」

そう答えるラリーに千冬は驚いた表情をした

「そうなる前に俺が落すさ」

何時もと同じ笑顔したラリーだが、千冬にはその表情がとても魅了的に見えていた

「ふ、そうだな。お前はそう言う奴だったな」

そして笑みを浮かべる千冬

「怪我せず無事に帰って来い、怪我して帰ってきたら地獄を見せてやるぞ」

「おお、怖い怖い。なら頑張ってくるかな」

椅子から立ち上がり千冬に近づき・・・・・・・・そして額にキスをした

「なっ！ななな！！」

「そんな暗い表情は似合わないぜ、安心して待ってるって」

千冬が顔を真っ赤にしているのを気にせず部屋を出て行くラリーであった・・・・・・・・そして時間がきた

「各機、ブリーフィング通り動け。では作戦開始」

戦いの第2幕が始まった

赤い部隊 中編（後書き）

さて次回は話は戦闘メインあります・・・あぁうまく書ける自信がない(;・・・)

なにか読者の皆様から要望があればコメントにお願いします。あ、もっと早く書けとかは勘弁な

赤い部隊 後編 - 1 (前書き)

まずは………すいませんでした！

全て纏めて書くつもりだったんですが長くて1と2に分けました
本当にすいません………

赤い部隊 後編 - 1

空に飛行機雲を造りながら飛ぶ2機、サイファアのIS『イーグル』とラリーのIS『モルガン』である

篤達と同時に出撃したが2人のISの性能に篤の『紅椿』ですら追いつけずにいた。これも2人には予想範囲以内のことでありあらかじめ伝えていたことだ

タリホー！0時方向、やや上

こちらにも視認した

サイファアが通信で報告した。サイファアとラリーの肉眼で福音を捕らえた。海上200メートルで静止している福音は、まるで胎児のような格好でうずくまっていた

膝を抱くように丸めた体を、守るように頭部から伸びた翼が包む。サイファア達と福音の距離が縮まっていき……。そして時がきた

ガラム1、エンゲージ

ガラム2、エンゲージ

『円卓の鬼神』と『片羽の妖精』が戦闘に入った

ガラム1、FOX2

右肩のミサイルハッチが開き放たれたミサイルが目標目掛けて飛翔

していく

不意に、福音が頭を上げる。次の瞬間、多数のミサイル全弾が直撃し大爆発を起こした

こちらガルム1、ミサイル全弾命中を確認

そのままサイファーとラリーは散開し両腕にガトリングライフルを装備しそのまま掃射、だが福音も翼から放つエネルギー弾で応戦し続けるが、全て避けガトリングライフルでエネルギーシールドを徐々にだが確実に削られていく

ガルム2、FOX2

右腰のミサイルハッチから目標へとミサイルが飛翔していくが、それを撃ち落さず機動力だけでミサイルを撒いた

ピクシー

ああ

2人がアイコンタクトで会話しライフル掃射しながら接敵機動を行っていく

福音にドッグファイトを仕掛け、十字砲火クロスファイアをしていく。小競り合いが続いていたが、突然サイファーとラリーが福音から距離を取った

突然の出来事だが、福音はサイファーの方へと追撃をしようとしたが、福音の腕部に超音速で飛来した砲弾が直撃し、大爆発を起こした

初弾命中。続けて砲撃を行う！

5キロ離れた上空に浮かんでるISはラウラの『シュバルツェア・レーゲン』である。福音が反撃するより早く次弾を発射した

その姿は通常兵器と大きく異なり、80口径レールカノン《ブリッツ》を二門を左右それぞれの肩に装備していた

砲撃パッケージ《パンツァー・カノニア》を装備した『シュバルツェア・レーゲン』はまさしく砲台と言う名に相応しかった

(敵機接近まで・・・4000・・・3000・・・くっ！
予想より速い！)

福音はサイファールとラリーを無視しラウラへと迫る。その距離は1000を切っていた

その間もずっと砲撃するが翼から放たれるエネルギー弾によって半数以上を撃ち落されながら接敵していた

ちいっ！

砲撃仕様では反動相殺のために機動との立ち回りが難しい。だが福音は機動特化のIS、300メートル地点からさらに急加速を行いラウラへと迫る・・・だがラウラは口元に笑みを浮かべていた

サファイア！

迫る福音とラウラの間に何かが通り過ぎた、それにより福音は後退した

通り過ぎた正体は、ブルーティアーズによるステルスモードからの強襲である

6機にビットはスカート状に腰部に接続され、銃口を塞ぎスラスタの役目をしていた。そして、手にしているのは大型BTLレーザーライフル《スターダスト・シューター》は全長2メートル以上あり、サイファー達の《レールガトリングガン》より長い

強襲用高機動パッケージ《ストライク・ガンナー》を装備しているセシリアは亜音速での反応を補う為のバイザー状超高感度ハイパーセンサー《ブルルアント・クリアランス》を頭部に装着している

敵機 (デルタ)を確認。排除行動へ移行

遅いよ

セシリアの射撃を避ける福音に別の機体が襲う

それはセシリアの背に乗っていたステルスモードのシャルだ

ショットガン2丁による近接射撃を背中に浴び、姿勢を崩す福音

だが、それも一瞬のことですぐに反撃をするが

悪いけど、この《ガーデン・カーテン》はそのくらいじゃ落ちないよ

『リヴァイヴ』専用防御パッケージは実体シールドとエネルギーシールドにより福音の弾雨を防ぐ

この3人に加えサイファーとラリーによって消耗しており

……優先順位を変更。現空域からの離脱を最優先に

全方向にエネルギー弾を放ち、全スラスタを開いて強行突破を計る福音。だが、福音は重大な過ちを犯していた、それはあの2人……『円卓の鬼神』と『片羽の妖精』を注意していなかったことだ

ガラム2、MPBMを使用する

ECMPを使い福音のハイパー・センサーを誤魔化していたラリーが逃走を計ろうとしている福音にMPBMを発射、炸裂し多弾頭ミサイルが福音を包み爆発。その爆発で動きを止められた福音に

そこっ！

『紅椿』に乗った『甲龍』が背中から飛び降り、機能増幅パッケージ《崩山》により両肩の衝撃砲が開くのと同時に増設された2つの砲口が姿を現し、計4門の衝撃砲が一齐に火を吹く

その弾丸は不可視ではなく赤い炎を纏い、しかも福音に勝るとも劣らない弾雨だった

やりましたの!?

あなた、後で体育館裏ね

あきらかなフラグを立てるセシリアに鈴が額に青筋を浮かべ怒っていた

拡散衝撃砲の直撃を受けてなお、機能停止を起こさない福音

《銀の鈴》^{シルバー・ベル} 最大稼動・・・開始

両腕を左右いつぱいに広げ、翼も自身から見て外側へと向ける。・・・刹那、眩いほどの光が爆ぜ、エネルギー弾の一斉射撃が始まった

くっ！

ヴァルキリー！僕の後ろに！

サイファーから受けた指摘通り筈の『紅椿』は機能限定状態にしていた。展開装甲を多様したことによるエネルギー切れを防ぐため、現在は防御時でも自動作動しないように設定し直してある。そう設定できたのも防御をシャルに任せられるからである

各機が異常までの連射に苦しんでいる中、ある2機に姿が無かった。それを感知していた福音をレーダーを最大限にして搜索していた・・・そして、突如として現れた場所は自分と重なっている・・・そう真上であった

ラリーのECMPで共に福音の真上へと移動していたサイファー達は既に照準を合わせており

ガラム2、TLSを使用する

真上からの攻撃に福音は反応するが既に遅く、《銀の鐘》^{シルバー・ベル}に直撃し片翼を破壊した

それにより体制を崩し無防備の福音に真横から

バーナー・オン

足裏のバーナーが赤色から青色へと変化し速度が上がっていくサイファー、その手には何も持っていなかったが拳を強く握っていた

それに反応していた福音が、もう片翼の《銀の鈴》シルバー・ベルで攻撃するもの予知しているかの如くに、そのままのスピードのまま避けながら接敵し殴る

サイファーの一撃で残りの片翼も殴り潰され、さらに追い討ちをかけるように肘打ちを福音の後頭部に直撃させるサイファー。そのまま海面へと福音が落ちていった

やったね！サイファー

喜びの声を上げ近づいてくるシャルを手で制した、サイファーとラリーの表情はまだ険しく睨み付けるかのように海面を見ていた

シャルは不思議に思っていたが、その出来事はすぐに起きた。海面が光の珠によって吹き飛ばされた

その出来事に驚く女性陣、更に鋭い目付きで睨むサイファーとラリー

球体に蒸発した海は、まるでそこだけ時間が止まっているかのようにへこんだままで、その中心に青い雷を纏った『銀の福音』シルバリオ・ユースベルが自らを抱くように蹲っていた

これは！？一体何が起きているんだ……

筭がそう呟くと

まずい！これは……『セカンド・シフト第二形態移行』だ！

ラウラが叫んだ瞬間、その声に反応したかのように福音が顔を上げる
無機質なバイザーに覆われた顔からは表情を読み取れない、だがそ
こに確かな敵意を感じていた

その気配に警戒するが

シュバルツエ！避ける！

ラリーが叫ぶが……既に遅かった

キアアアアアアアッ！

まるで獣の咆哮のような声を上げ、福音がラウラへと飛び掛る

なにっ！

あまりの速さに反応できなかったラウラは足を掴まれる

切断された頭部から、ゆっくり、ゆっくりと、まるでサナギから蝶
へと孵るようにエネルギーの翼が生えた

ラウラを離せえ！

シャルがコールサインで呼ばず、感情のままショットガンから近接

ブレードで突撃する

だが、その刃は空いた手で受け止められた

よせ！逃げる！こいつは……

その言葉は最後まで続かず、ラウラは眩い程の輝きと美しさを併せ持つエネルギーの翼に抱かれる

と誰もが思った。しかし、ラウラの掴んでいた腕を蹴り足を離れた隙にラウラを抱え、ブレードを掴まれていたシャルを抱えた2機はた篤達の方へと移動し一回転した後、膝を曲げ後ろに噴射し勢いを殺した

その2機の正体こそサイファーとラリーである

2人は女性陣の前に浮かび、福音を睨んでいた

……最優先目標を敵機、に設定。攻撃レベルAで対処する

福音がサイファーとラリーに目標を定めた。さらに姿も変わっていき、胸部、腹部、背部の装甲が卵の殻の用にひび割れ、小型のエネルギー翼が生えてくる

どつやらやる気のようにだ

その姿にラリーは驚いた表情を見せずに笑っていた

御指名とあらば受けなくちなサイファー

ワンオフ・アビリティ
> 単一仕様能力、『片羽の妖精』発動<

ラリーのISが紅くなり武器もTLSソードを持っていた

・・・いいだろ

ワンオフ・アビリティ
> 単一仕様能力、『円卓の鬼神』発動<

サイファアのISが蒼くなり

《自立型AI兵器『ウステイオの傭兵』起動》

さらに傭兵達も現れた

後は任すぞ、イーグルアイ

サイファアはそう言い、レールガトリングガンを2門構えた

了解した、ガラム1。全機！交戦を許可する！奴のエネルギー弾
には注意しろ！

クロウ了解。エンゲージ

コブラ了解。エンゲージ

ブリッツ了解。エンゲージ

グリード了解。エンゲージ

ウスティオの傭兵VS銀の福音の戦いが始まった

シルバリオ・ゴスペル

さざ波の音を聞きながら女の子を眺めている一夏がいた

一夏の姿は何故か制服でありズボンの裾を捲くり真っ白な流木に座っていた

ふと一夏が気がつくと、踊りながら歌を歌っていた少女は歌は終わっていた

不思議に思った一夏は座っていた木を離れて少女の隣に向かった

「どうかしたのか？」

声をかけるが、少女はじいっと空を見つめたまま動かない

一夏も少女と同じく空を眺めると、ふと少女の声が聞こえた

「呼んでる……行かなきゃ」

「え？」

一夏が隣に視線を戻すが、そこには少女に姿はなかった

きよるきよると左右を見ながら不思議そつな表情をするが、人影は無く、歌も聞こえない

波の音だけが一夏に聞こえていた

「う~~~~ん……………」

不思議に思っていたが木のソファに戻ろうと体を反転させる

すると…………背中にも声を投げかけられた

「力を欲しますか……………」

「え……………」

一夏は振り向いた。波の中…………膝下まで海に沈めた女性が立っていた

その姿は、白く輝く甲冑を身に纏った騎士さながらの格好だった

大きな剣を自らの前に立て、その上に両手を預け、顔は目を覆うガードで隠されており、下半分しか見えなかった

「力を欲しますか…………何のために」

「ん？ん…………難しいこと訊くなあ」

一夏は頭を捻らせ考えていく

「…………そうだな、友達を…………いや、仲間を守るためかな」

「仲間を・・・」

女性は聞き返す

「仲間をな。なんていうか、世の中って結構色々と戦わなくちゃいけないだろ？単純な腕力だけじゃなくて、色々なことと」

一夏は饒舌に喋っていた。自分で纏まっていけないことなのを妙に思いながら

「そういうときに、ほた、不条理なことや道理のない暴力とか結構多いんだぜ。そういうのから出来るだけ仲間を助けたいと思う。肩を並べて戦いたいだ、この世界で一緒に戦う・・・仲間を」

「そう・・・」

女性は静かに答え頷いた

「だったら、行かなくちゃね」

「えっ？」

また後ろから声をかけられる

振り向くと、白いワンピースの女の子が立っていた

人懐っこい笑み。無邪気そうな笑顔で、一夏を見つめていた

「安心して、それは叶うよ」

少女は笑顔のまま言い

「空の戦士達が、勝利へと導く」

後ろの女性がそう言った。その事を理解できない一夏は首を傾げていた

「ほら、行こ？」

手を取られて、微笑みかけられる

一夏はひどく照れくさい気持ちになりながら

「ああ」

頷いた。すると、いきなり変化が訪れた……

くっ！

筈の鈍い声が無線に流れる。状況は優勢なのだが、それはサイファ
ーとラリーにウステイオの傭兵であって、他のメンバーは苦戦して
いた

エネルギー弾で吹き飛ばされ、近接白兵戦を仕掛けられたりと苦戦し、その度に傭兵からの援護でまだ無事でした

クロウ3、FOX2

クロウ3がエネルギー弾を避けながらミサイルを放つがそれも新たなエネルギー弾で落されてしまう

イーグルアイよりサファイアへ、ラファエルの盾を上手く使い援護射撃に集中しろ。スピネル、ヴァルキリーはシュバルツェの援護を優先しろ

イーグルアイの指示通り動くが翼から放たれるエネルギー弾の量と威力にシャルの実体シールドを1枚破壊されていた

はあっ！

ラリーがTLSソードで攻めるが翼で受け止められ、福音の攻撃を避け、いなす

上空から重い銃撃音と共に光が走る。サイファーが上空からレールガトリングガンを掃射、2門から放たれる銃撃は福音の掃射を上回る弾幕であり、回避運動を取るものの被弾率が上がっていく

被弾による隙を見逃す傭兵達ではない

グリード1、FOX2

グリード2、FOX2

グリード3、FOX2

グリード隊が一斉にミサイルを放ち、直撃。そのまま機銃で攻撃し離脱していく

それにより体制を崩した所に

そこですわ！

後方援護による射撃で確実にダメージを与えていった

よしそのまま・・・レーダーに反応！これは・・・味方のIF
F、織斑一夏のISだ

イーグルアイの言葉に女性陣、特に箒は驚いた顔をしていた

空を翔る音が聞こえ、箒達はその方向を見る。その視線の先には『
白式第二形態・雪羅』を身に纏った一夏だった

「あ・・・あ、あっ・・・」

箒はじわりと目尻に涙を浮かべた

「一夏っ、一夏なのだな！？体は、傷はっ・・・！」

慌てて声を詰まらせる箒の元に一夏が飛んでいき

「おう、待たせたな」

一夏は笑顔を浮かべた

「よかつ・・・よかつた・・・本当に」

「なんだよ、泣いてるのか？」

「な、ないてなどいないっ！」

目元を拭う筈を、一夏は優しく頭を撫でる

「心配かけたな。もう大丈夫だ」

「し、心配なごっ・・・」

強がる筈を尻目に一夏はある物を渡す

「り、リボン・・・」

「誕生日おめでとごな」

「あっ・・・」

7月7日。筈の誕生日である

「それ、せつかくだし使えよ」

「あ、ああ・・・」

その場で髪を結ぶ。その様子を笑顔でみる一夏

ああ・・・お二人さん。お邪魔するのは気が引けるのだが

無線で聞こえてくるラリーの声で、一夏は、はっ！とする

一応ここ戦場だからな、そう言うのは帰ってからしてくれ

戦場のど真ん中でその行為は、端から見ると死亡フラグである。(その間福音は傭兵の皆さんが必死に抑えてました)

こちらイーグルアイ。貴機のコールサインはサマーだ

イーグルアイの声色には少し怒気が含まれていた。それを聞いた一夏は髄経反射で背をのびし

わかりました！

千冬の教育の賜物である

だが、せつかくの新型もまた今度だな

え？

一夏が福音の方を見ると、小型戦闘機が福音を攻撃しながら翻弄しサイファーが確実に弾丸を当てていく

既に福音はボロボロだった

イーグルアイよりガラム1へ。パーティーもそろそろフィナーレだ

ガラム1、了解

サイファーはレールガトリングガンを仕舞い、ナイフを取り出し中腰になり右手をナイフの底に当て突き刺す構えをする。ナイフ全体がラウラのプラズマ刃みたくプラズマがナイフを包みこんだ

バーナー・オン

サイファーが突責していく。福音も最後の力を振り絞りサイファーに全弾放つ。だがサイファーは足のアフターバーナーを上下左右3次元に回避していく通常状態でも驚くべき高機動なのにそれを更に底上げしもはやハイパー・センサーでも捕らえるのが難しい速さである

そしてそのまま接敵する。福音がカウンターを狙ったか右腕を突き出す、それを紙一重で避けナイフを鳩尾目掛けて突き刺した

福音は突き刺しを食らい動きを停止した。アーマーを失い、スーツだけの状態になった操縦者をサイファーが受け止めた

作戦終了、我々の勝利だ

イーグルアイの言葉に全員のが喜びの言葉を上げた。ラリーは一夏に近づき

「残念だったな、お披露目はまた今度だな」

そう笑いながら言つと

「いや・・・最後の動き、ハイパー・センサー使っても霞んで見えただけだ」

それはサイファアの動きを見ていた全員が同じ感想だった

「ま、あれは凄かったが……」

ラリーはあの動きを危険視していた、あの動きはGを完全に相殺しきれない動きだからだ

だが、それを言うのは後にし皆と帰ろうとした……だが

ん？レーダーに反応！高速で進入する機影を確認。このIFFは……
ばかな！そんなはずが！

イーグルアイの驚きの声に

どうしたイーグルアイ？何があった

ラリーが問いかけると

敵IS接近！機数6……判別……ベルカのロト隊！繰り返す
ベルカのロト隊！エース部隊だ！

その言葉にサイファアとラリーは声を失った……いや、驚きの
あまり声が出なかった

それもそのはず……この世界にいない筈なのだから

赤い部隊 後編 - 1 (後書き)

次回予告

現れたのはベルカのエース部隊口ト隊、彼らの強さを身にもってしているサイファー達は、はたして残り少ないエネルギーで一夏達を守りながら勝てるのだろうか！

赤い部隊 後編 - 2

Belkan Air Force 2nd Air

Division 52nd

Tactical Fighter Squadron

Rot

VS

Ustio Air Force 6th Air

Division 66th

Air Force Unit

GARM

勝利の女神は誰に微笑むのか・・・ご期待ください

次回書くのまた遅れそうだな・・・すみません(;A;)感想を下さると主は喜んで書くかもw

赤い部隊 後編 - 2 (前書き)

長らくお待たせして申し訳ありませんでした

赤い部隊 後編 - 2

ロト隊、ロトとはドイツ語で「赤」と言う意味である。部隊章から「赤いツバメ」と呼ばれ、ベルカ軍のプロパガンダに幾度となく登場するエリート部隊である

だが、これらの内容は全てベルカでの内容であり、今いる世界とは全く関係の無い内容……であつた

イーグルアイの報告にサイファーとラリーは耳を疑つた。その関係の無いはずである部隊が出現したからには傭兵として、兵士として、冷静な対応が出来る2人でも動揺する

どういうことだ！イーグルアイ！間違いじゃ無いのか！

無線にラリーの荒れた声が響く

いや間違いない、幾度も確認したが間違いなくこのIFFはベルカのロト隊だ

イーグルアイの内容に舌打ちをするラリー

……まったく、この世界は何でもありだな

溜息をつきながらサイファーが言う

イーグルアイ、敵部隊との距離は？

距離4000、残り4分で戦闘空域に到着する

サイファーは無線を繋いだ……その相手は

織斑先生、緊急事態です

織斑千冬であった

どうしたクウエイド

敵部隊が接近中、およそ4分後に戦闘空域に侵入します

千冬は内容に驚いたが、引つかかる所があった

なぜ敵だとわかる？

そう、サイファーの言った内容では何者かが戦闘空域に近づいてくるのであって敵だとは判断するに情報が少なすぎると千冬は考えていたが

……この世界に来た時、前の世界の話を覚えているな？

ああ、覚えているぞ

サイファーは軽く深呼吸したあとに

接近してくるのはベルカ空軍ネームド、ロト隊だ

これに千冬は絶句した

ば、馬鹿な！……いや、あり得ない話では無いが……し

かし

千冬はブツブツ独り言をいつていると

既に俺達はシールドエネルギー残量は少なく、疲労が顔に出ているほどだ。まともに戦えるのは俺とラリー、後から来たイチカだけだ

サイファアの声に千冬は我に戻り

わかった、クエイドとフォルクで部隊を足止めしてくれ

了解

サイファアは無線を切り『銀の福音』シルバリオ・ゴスヘルの搭乗者をシャルに近づき渡した

「ねえ、サイファア。いったい何があったの？」

シャルの顔には困惑しており、他のメンバーも同じ様子だった

全員聞け。いま敵部隊がこの空域に接近中だ、織斑先生の判断で俺とラリーが足止めし他は撤退しろ

その内容に驚きを表したメンバーは

まってよ！サイファア達だけじゃ危険だよ！

そうですわ！私たちも残ります！

あんたらだけ残してオメオメ逃げろって言うの！

他のメンバーが反対する

いまのお前達はエネルギー残量も少なければISもボロボロだ、そんな状態で戦うと言うのか？

サイファアの的を射た言葉に反論できずにいたが

でもサイファアやラリーだってもう殆どシールドエネルギーが無いんだよ！

2人にシールドエネルギーも皆と同じかそれ以下しか残って無く、
ワンオフ・アビリティ
単一仕様能力 も切れていた

それなら問題ない

サイファアとラリーの主翼下に楕円形の投下爆弾みたいなのが現れ

コンフォーマル・フェーエル・タンク
CFT起動

2人が同時に言うのとシールドエネルギーが回復した。
コンフォーマル・フェーエル・タンク
『CFT』とは戦闘機が付ける外部の燃料タンクであり増槽とも言われている

それを2人のISは標準装備であり着脱できずスロットから取り外すことができないが、有事の際や遠距離での移動などの補給が受けられない状態ではかなり重宝していた

これでエネルギーの問題は無くなった早く撤退しろ

ラリーがそう言うが

逃がすと思うか？野良犬共

オープンチャンネル
開放回線で男の声が聞こえた。サイファーとラリーはその声に聞き覚えがあり

タリホー、0時方向、やや上

こちらにも視認した

現れたのは赤いIS、腰の左右に浮遊するデルタ翼に両肩に装備した先尾翼ガナード、全体的に丸い形をした装甲、その姿はユーロファイター・タイフーンにも見えた

「久しぶりでも言うおうか、ウステイオの傭兵」

無線ではなく声を掛けてくるのはロト隊1番機、隊長のデトレフ・フレイジャーである

「顔を合わせるのは初めてだな」

ラリーがいつもの表情をし、サイファーは無言のままメンバーの前に陣取る

「貴様ら傭兵なんぞに負けた屈辱……一時も忘れたことは無い」

怒りを露わにするロト隊に対し

「戦争をやっていたんだ。どちらかが生き、どちらかが死ぬ」

ラリーが真剣な表情をしながら言う

「それもそうだ……だが」

デトレフは『雪羅^{しゆせ}』を展開している一夏を見ると

「あんな少年を捕まえてこいなど……気に食わん。シュヴァルチエの連中にもやらせればいいものを」

デトレフの言葉に少年……恐らく一夏の捕獲が作戦目的であるのがわかった、だが言葉に聞き洩らせない単語があった

「……シュヴァルチエだと」

サイファはその単語に眉をひそめる

「まさかあの『ハゲタカ』共までいるのか」

ラリーも真剣な表情のまま呟く

「……話しすぎたな、ウステイオの傭兵……覚悟はいいか」

「はっ、また食い殺してやるよ」

ラリーが言うと殺気が膨れ上がる

お前達

プライベート・チャンネルでサイファがメンバーに話しかける

俺達が攻撃を始めたと同時に全速力で撤退しろ

そっついい切ると

ガルム1、エンゲージ

ガルム2、エンゲージ

2人が言うと同時にミサイルハッチの全部が開き

オープンファイヤー！

ミサイル全弾を発射させると同時に一夏達は撤退を開始した

戦闘を開始して10分、2対6で拮抗していたのも次第に崩れていきIS2機に抜かれてしまい2対4で戦闘しているサイファーとラリィ。既に一夏達に連絡はしたがネームド2機相手では実戦経験の無いメンバーでは不安が積もる一方で直ぐに駆けつけたい所だが

くっ！

縦横無尽に襲いかかるミサイル、自分の命を食らおうとする銃弾に舌打ちをするラリー

1対2でロト隊と相手をしているが、相手もエースであり、そう簡単に当たらない

ガラム2、FOX2

右腰のミサイルハッチが開きミサイルが目標めがけて飛翔していくが、相手も2人と同じ高機動型のIS、ミサイルをかわし撃ち落とすしていく……しかし

こちらロト3！ケツに付かれた！援護を！

ロト3が上下左右ジグザグに動くが、それをぴったりとケツに食らいついて離さないサイファー、その後ろをロト4が追いかけてミサイルや《リヴォルヴァーカノン》で攻撃するが

ガラム1、FOX2

ミサイルハッチが開きミサイルがロト3に飛翔していく。ミサイルを迎撃しようと振り向き《リヴォルヴァーカノン》を構えるが

インパクト

ロト3が迎撃する前にサイファイがミサイルを爆発させた、爆煙がロト3、4にサイファーを包みこみ、目視が不可能な状態になった

ロト3がハイパー・センサーでサーマルビジョンに切り替えようとしたが

「もがつ！」

口を誰かに押さえられ喉元に青白く光る何かが刺さる。絶対防御が発動し、シールドエネルギーが削られていく。必死にもがくロト3だが頭を押さえられて、身動きが取れずエネルギーシールドが0になりISが停止した

ロト3から手を離すと煙の中から出た……と同時にHUDにミサイルの警告音が響いた

ハイパー・センサーが飛来してくるミサイルの方向を出し、すぐさま回避行動をとり敵位置を確認した

ミサイルを迎撃しながらロト4に格闘戦ドッグファイトをしかける。ロト4は先程の奇襲で仕留める算段が外れ、舌打ちしながらサイファーと距離をとりながら《リヴォルヴァーカノン》で撃ち合うが、明らかにサイファーの銃の方が連射速度に優れ威力も高くシールドエネルギーを削っていく

くそっ！何故あたらない！

ロト4の声に焦りが現れ、狙いが乱れてきた。その隙を見逃す訳が無く、サイファーは更に縦横無尽に空を駆けまわりガトリングライフルの銃弾を叩きこんで行き

くそっ！野良犬がああ！

ロト4の叫びと同時にシールドエネルギーが0になり、海へと落ちていった

こちらガラム1、2機撃墜

サイファーはまだ戦闘しているラリーの方を向くと既に1機落されており

馬鹿な3機も落されただと！

ロト5は既に自分しか残っていないのに気付き

申し訳ありません隊長、自分はこれまでのようです

ロト5が無線で呟くと

『片羽の妖精』！せめて貴様だけでも！

自分の切り札でもある『瞬間加速』イグニッション・ブーストを使いラリーに突撃する

ぬおおおおつ！

拳を強く握り、ラリーに拳を振りかざす

ブホオツ！

だがその拳は届かず、逆にラリーのカウンターがクリーンヒットする

悪いな、それは見慣れているんだ

殴られた衝撃とシールドエネルギーが0になったことで動かない体とIS、薄れ行く意識の中でラリーの言葉が聞こえていた

こちらガラム2、2機撃墜

報告しサイファアに近づき

「急ぐぞ！イチカが危ない」

「ああ」

二人はアフターバーナー全開にし、一夏達の後を追った

サイファアとラリーがまだ戦闘をしているころ、ロト1とロト2は既に一夏達を視認しており

「ぐわっ！」

ISのセンサーに反応した一夏は反転し迎撃に向かうも、いくら機体性能がよくとも

ロト1、FOX2

ロト1のミサイルハッチから《サイドワインダー》が目標に向かい

飛翔していく、一夏は右手に装備した《雪片弐型》で斬りおとしながら回避行動をとりながらミサイルを全て迎撃する

するとロトーが《リヴォルヴァーカノン》を装備し正面から突っ込んでくる

「はあああああ！」

一夏もそれを正面から挑み、右手の《雪片弐型》を叫びながら袈裟斬りするが、右側へと避けられ空振りによる事後硬直の所を狙われるが

「まだまだあああ！」

第二形態移行した時に左腕にできた多機能武装腕《雪羅^{ひじりせ}》。この武器は使用者のイメージに応じるように指先からエネルギー刃のクローが出現した

「逃がさねえ！」

一メートル以上に伸びたクローは体の回転による遠心力で威力も上がっており速度もかなり早い、一夏自身も「当たった！」っと思っ
た……しかし

「え？」

それは空振りに終わり

「がつ！」

後方から重い銃撃音と共に重い衝撃を食らった

ロト1は高速で迫りくる巨大クローを焦ることなく一夏の下から背後へと回り込み無防備な背中に撃ち込んだ

傭兵共と同じ部隊だから期待したのだが……とんだ期待外れだな

オープンチャンネル
開放回線から聞こえたロト1の声は明らかに落胆した声であり、自ら望んで手に入れた“力”が全く通用しないのに加え相手が期待外れと落胆すれば

「っ！」

奥歯を噛みしめるほど怒るのは必然である

それにロト2の方も早く終わりそうだ

ロト1が言つと同時に

キヤアアアツ！

鈴の悲鳴が上がる。一夏が振り向くと、ミサイルの直撃を食らったのか爆煙の中からボロボロになった鈴が出てきた。セシリアが《スターダスト・シューター》を構えて狙うが、ロト2は箒と格闘戦下をしており上手く射線に箒を入れて撃てないようにしている、ラウラは福音のIS搭乗者を持っているシャルの護衛をしている為戦闘に参加できずにいた

ロト2は1対多数の戦闘が得意でな、学生であるお前等を手玉に

とるくらい簡単だろう……それに

ロト1の声に正面を向く一夏だが既に目の前で《リヴォルヴァーカ
ノン》を構えたロト1がいた

戦闘中に気を抜くのは死につながるぞ

額に当てられている銃口、この距離では絶対防御が発動しても大怪
我をするほどである

いま降参し付いて来るのであれば、お前の仲間とお前自身の安全
を保障しよう

オープンチャンネル
開放回線でのロト1の発言に一夏の表情は迷いがでていた。全員が
ボロボロで残りエネルギーも殆どない、自分自身も力を手に入れて
も目の前の敵にはキズ1つ負わせることができない

そんな奴の要求など呑むな！一夏！

ドッグファイト
格闘戦をしている筈が無線で叫ぶ

そうですわ！私達はまだ戦えます！

セシリアも移動しながら筈の援護をし

まったくよ！

海に落ちてた鈴も空に舞い戻り

まっくなさい一夏、こんや奴すぐに潰して援護に行くから

3人の様子にまだ希望はあると考えた一夏だが

そう簡単に潰せるかな？

ロト1の言葉に全員が不思議に思う

確かに君達のISは高性能だ、私達のIS『タイフーン』よりも性能は上だろう。だが、既に君達のISは至る所に損傷しておりエネルギーも残り僅か、さらに

ロト1はシャル達の方を指差し

お荷物を抱えたまま私達に勝てるほど君達には余裕があるのか？

ロト1の的を射た言葉に一夏達は言葉がでなかった

もう一度言う、降参しろ。目標は織斑一夏1人だ、それ以外は見逃し、君の安全を保障しよう

頭に銃口を突き付けられている一夏は悩む、悩んで悩んで悩み・・・
そして

・・・本当に籌達を見逃すのか？

一夏の出した答えは要求を呑むだった

一夏！

一夏さん！

一夏！

一夏！

一夏！

篤達が一夏の名前を叫ぶ

ベルカの戦士として。部隊章に誓い約束する

一夏は目頭に涙を溜め拳は血が出るくらい握りしめていた

かしこい判断だ。まずは武装解除しろ

一夏が武装解除しようとしたそのとき

なにっ!？

ロト1の驚いた声と共に上に飛び上がった。その後を追うように空に描く雲の軌跡、その先にはミサイルがあった

ああ・・・!

Sに
シャルの喜ぶかのような声が聞こえた。視線の先には青い羽根のI

まったく、諦めるなんて男のすることじゃないぞイチカ

いきなりロト2は回避行動をとると一筋の光が先程までいたロト2

の所を通り過ぎていく。光の発生源のところには赤い片羽のI.Sがいた

サイファー！

ラリー！

シャルとラウラは嬉しそうな声を上げ、他の女性陣も顔に笑みが戻る

すまない、待たせちまったな

ラリーがいつもの笑顔を浮かべ謝る

バカな……なぜ貴様等がここに！通信が無いはずが！

ジャミングを使わせてもらったのさ。残るはあんただけだ

ラリーはガトリングライフル《シュトリゴン》の銃口をロトチームに向けた

この傭兵風情が！

ロトチームが突撃してくるのを

いくぞガルム2

了解、ガルム1

ガルムチームが迎え撃つ

ガラムVSロト、地獄の番犬と赤いツバメの再戦の幕開けである

赤い部隊 後編・2 (後書き)

読んでいただき感謝です

中々モチベーションが上がらないなか、24日に友人とゲーセン巡りをしていた所シャルとラウラのフィギアが置いてありまして、2000円以上を使い無事2人の奪取に成功、ストパンのサーニャも取ったことにより脳汁垂れまくりのうp主はこの気持ちを小説にぶつけましたwww

そう言えばアンケートでファルケンとワイバーンを出してくれと言う人が結構多くいまして、どちらにしようか迷っています、感想で意見をお待ちしておりますのでドンドン感想をお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1570r/>

IS インフィニット・ストラトス Zero

2011年10月3日11時47分発行